
IS 《インフィニット・ストラトス》 - オーストラリアの代表候補！？

グニル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS - オーストラリアの代表候補！？

【Nコード】

N9849X

【作者名】

グニル

【あらすじ】

ISが開発されて10年・・・ISとまったく関係ない生活を送っていたオーストラリアの普通の女子学生。なのに女子全員が受けるIS適性検査でいきなりA判定！？そして代表候補生として日本に！？！？

本来は存在しないオーストラリア代表候補生、カルラ・カストの視点でISの世界を描いてみようという無謀な試み！

原作を読むか、またはアニメを見てからご覧することを強くお勧めいたします！

それではどうぞ！

0・0（前書き）

ご覧頂きありがとうございます。とりあえず本編へどうぞ！

序章

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要として運用され始める。

ISの核となるコアは完全なブラックボックスとなっており製作者の篠ノ之博士しかコアの製造を行うことが出来ない。

しかし篠ノ之博士はISのコアを467個を作った時点でそれ以上の製造を止め、行方を眩ませる。

故に現在ISの絶対数は467機であり、専用のISを持つ事が許されるのは政府や企業の関係者の中でも、選ばれた者のみである。そのため、新しいISを開発する際には既存のISを一度解体し、コアを初期化せねばならない。

しかもISは何故か女性しか起動させることが出来ず、理由は製作者の篠ノ之博士すら分かっていないらしい。そのため世の中には必然的に女尊男卑が浸透していくことになる。

『ISが出来てからの歴史』、第一章冒頭より

「ふっ…」

もう何度も読み返し、ボロボロになった本を閉じて私は目を閉じる。

今は日本へ向かう政府専用旅客機の中だ。

先ほどまでの眼下に広がっていた青い海は無くなり、既に旅客機は空港への着陸態勢に入っている。

本来は本にあるとおりISを扱えるのは、ISを扱っている大企業や保有している国家であり一般人は触れることさえ許されない。それなのに1年前までただの女子学生だった私がIS学園に入学だなんて…運命なんていうのは分からない。

『本気はまもなく着陸致します。お立ちのお客様は席に戻ってシートベルトをお締めください』

うん、既に腰には少しきついくらいにシートベルトが締めてあるというより飛行機が離陸してから一回も外していない。

どうしても飛行機は好きになれないのだ。あの巨大な鉄の塊が飛ぶと考えるのは未だに信じられない。

まだISの方が空を飛ぶのは分かると言いたい位だ。着陸の衝撃に備えて少し体を強張らせる。

『本機は着陸しましたが、完全に停止するまでお席はお立ちにならないようにお願いします』

「あ、あれ？」

いつの間に着陸したんだろう？全然揺れを感じなかった。

「ははは、この機のパイロットは我が国でも最も腕のいい者を選出したからね。初めての人は驚くのも無理はない」

「はあ…あ！」

隣からかけられた声に思わず生返事してしまった。

「す、すいません！」

「いやいや、そんな畏まらなくても大丈夫だよ」

正面にるのは付き添いで来てくれている黒いスーツ姿の男の人。政府のIS関連の第一人者さんだ。

名前は…あれ？覚えてない……あ、あとで名刺見て覚えておかなきゃ！

そうこうしている内に飛行機が完全に停止する。

シートベルトを外して席を立とうとすると、足が動かなかった。

「あれ？」

どうしたんだろう？

「あー、離陸してからずっと足を動かさなかったでしょう。そのせいで筋肉が硬直しているんですよ。荷物などはこちらで運んでおきますので動けるようになったら出口までおいでください」

「あ、わざわざすみません」

「いえいえ、今時分はあなたの様な女性のほうが珍しいですよ。では」

そう言いながら要人さんは出て行った。手で足を伸ばしつつ少し椅子を倒す。

「ん…」

あの人の言ってた通りみたい。感覚のなかった足が痺れてきている。

いくら緊張してたとはいえ恥ずかしいところ見せちゃったなあ。こういう時は政府専用機っていうのも他の人に見られなくていいかも…

先ほどあの人が言った言葉を思い出す。

ISは本にも書いてあったとおり、何故か『女性にしか反応しない』。

そして現行、世界最強の兵器はそのIS。つまり世界のパワーバランスはISの保有数とそれをより高い技術で操れる担い手、すなわち女性の数で決まる。

となれば必然的に女尊男卑が当たり前になってしまう。かつては女性に人権を認めず、あらゆる弾圧に屈しなかった宗教国家でさえ、宗教の根本から覆されるほど。

かつての男性優位の国家はISを保有していない国ぐらいだろう。

そしてそうなれば必然的に横行な女性も増える。自分の周りにはあまりいなかったが、それでも街のマーケットでは奴隷のように男性を使う女性を見かけたこともある。

必要とされているのはISを使える人であって一般の女性ではない。

関わっているから言えることだが、本来ISなど無い方がいいと思う。

ISはどこまで追求しても『兵器』だからだ。『兵器』とは敵となった目標を殺傷、破壊するために使う道具。つまりは人殺しの道具だ。

今はスポーツみたいに扱われているが、使い方を間違えればそれは簡単に人を殺傷する道具になる。

最も懸念されているのは第三次世界大戦……いや、『第一次IS大戦』だ。これはISが登場した10年前から頻繁に話題になる。

ならば本来こんなものは全世界的に排除して元に戻したほうがいい、というのが自分の考えだ。

でも作られたもの、更に言えば便利であるものを人は捨てることは出来ない。

さらに言えば、ISがあることで世界の技術力は飛躍的に上昇している。世界経済もISの開発、ということで雇用を生み出し非常に安定している。

デメリットを消せないならせめて今あるメリットを享受するしかない。

なら自分は自分に出来ることを…

そう思っ て結局私はISを使っている。

「偽善… だよね…」

自然と独り言がでてしまった。

足の痺れも取れてきた。

うん、これなら歩けるかな。

立ち上がると足はしっかり床を捉えてくれた。

CAさんに案内されて出口へ向かう。

外に出ると既に迎えのリムジン車の前にさっきの人が待っていてくれた。

階段を下りていくと気づいたみたいでこちらに手を振ってくる。

「すみません、お待たせしました！」

「いえいえ。さ、お手をどうぞ」

右手を取られて車へ案内される。車の中は広い。今は慣れているけど一年前は本当に落ち着かなかった。

それでも…うー、やっぱり慣れないなあ。小さい普通の乗用車のほうが温かみがあって好きなんだけど…

車が静かに音を立てて発進する。離陸前の説明では今から大使館へ向かい入国兼入学手続きを行うらしい。

そんなに時間はかからないらしいから日本を見学できるといいんだけどなあ…

「カスタ様、右手にIS学園が見えますよ」

運転手に促されて右を見ると海上の一つの島丸々使った巨大な施設が見えた。

あれが…IS学園…

操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される日本の教育機関。

「大きい…」

漠然とした感想だけどそれが一番だ。対岸のここからでも把握できないほどの大きさがある。

「楽しみ…というより不安かも…」

あわわ…手が震えてきた！どうしよう！

0 - 0 (後書き)

初めまして。作者のグニルと申します。

ユーザから入ってもらえれば分かるとおり、作者は『ネギま!』の二次創作もやっています。

この作品はその過程で息抜きで書いていたものなのですが、何故か原作第一巻分が出来てしまったので折角だから破棄するのももったいない。という作者の考えから投稿した作品です。

主人公のプロフィールは次回のあとがきに書きます。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。

してもらえたら作者のテンションが『ヒヤッホイ!』しますw

こんな作者ですがよろしくお願いします orz

設定

名前、カルラ・カスト

性別、女

身長、155・6cm

容姿、長く淡い赤髪を右側でサイドテールにしている。瞳の色はオレンジ

体型は上からB76/W56/H75

趣味、節約、読書、銃器集め

詳細、

IS学園一年一組所属、オーストラリアの代表候補生。

本人は争いごとが嫌いなため一度代表候補になるのを拒否したが、考えを改め守るための兵器としてISを使うという条件で協力することを決意しジャクソン社に所属。IS学園に入るまで本国で試験パイロットとして基礎操作を学んでいた。

争いごとは嫌いなのだが銃器集めという変わった趣味を持っている。

集中力が高く、一つの物事に熱中するタイプ。そのせいで周りを見ていないこともシバシバ。集中してるところに話かけられると「ひゃい！」と言ってしまふ癖がある。（本人は「はい」と言ってるつもり）

普段は物静かなのだが、自分が大切に思っているものを傷つけられたり馬鹿にされるのが許せない性格で、そういう時は普段以上に感情をむき出しにする。

学校の寮で一人暮らしをしていたので料理の腕などは上手い。強気な人に非常に弱いため、織斑千冬はほぼ畏怖の象徴と化している。両親はどちらもジャクソン社員

オーストラリア

詳細、

保有ISは25機とかなり多い。内訳は22機が第2世代IS『デザート・ウルフ』、3機が第3世代試作型IS『デザート・ホーク』

理由として周囲が海に囲まれ進入が容易なことから防衛として多く配備されている。

これを認める代わりに国際IS委員会の取り決めにより、オーストラリアは南シナ海までの周辺諸国の海上警備、周辺諸国への一定状況下のISの貸し出しが義務付けられている。この取り決めにより含まれる国々は赤道に近いことから赤道連合と呼ばれている。

また、そのことによりオーストラリアだけが有利にならないように、オーストラリアのIS関連の企業には防衛している国々から一定人数以上技術者を雇い入れること、また国家IS代表者、代表候補生も他の国から選出することを義務付けている。（技術が見合わなければこの限りではない）

赤道連合への参加国

オーストラリア、インドネシア、マレーシア、フィリピン、パプアニューギニア、ニュージーランド

ジャクソン社

詳細、

オーストラリアに存在するIS専門の国営企業。

基本的に赤道連合のISは全てこの企業に属していることになっている。

第2世代をほぼ自国の中で研究しつくし、現在は第3世代ISの実験開発の段階に入っている。

技術者、開発者、パイロットなど様々な人材を出身国、階級などで差別せず（半分以上条約によるものだが）、能力だけで判断する特異な体系を取っている。これにより他の国、企業よりも一般人に近い身分の人たちの割合が多い。その分様々なアイデアを取り入れてきたため他の国に見ない武装が多い。機体名と武装名の統一感がないのも様々な国家の人が関わっているからである。

一つのベースを作りそれを強化していくのが特徴。現在開発している第3世代IS『デザート・ホーク』も3形態まで強化装甲が考^{バックゲージ}えられており、状況によっては型番後に『改』などをつけ、特殊兵装の実験配備を行っている。

IS

専用IS「デザート・ホーク・『改』」

詳細

オーストラリアのジャクソン社製第3世代型ISの試作改良版。

オーストラリア第2世代型IS『デザート・ウルフ』を基盤に機動性を重視。安定性と稼動効率に特化させられており、防衛任務に適している。また、試作機であるのに即実戦投入が可能に設計されている。

本領を発揮するのはパッケージを付けた際の極地戦闘。

パッケージ無しだと扱いとしては『デザート・ウルフ』の強化版、つまりはどんな状況でも対応できるマルチロール機であると見なされ、実験的にエネルギー兵器、ビーム兵器を搭載して入るが、他国からはあまり重要視されていない。

武装を量子化できるISとしては珍しく複数の武装を常備装備として採用してある。これは相手に高速切り替え戦闘を持ち込まれた際の対応策であり、基本は量子化された兵器を呼び出して戦う。

また、それらの常備装備は隠し武器的要素が強く作られており、一見すると装甲や装飾と見間違えられるように偽装され、あらゆる体勢から攻撃が出来るように装着されている。

オーストラリアISの兵装

- ・18mm突撃銃『ラングリスII』

命中率よりも連射力を重視し、面での制圧を主とする。セミオートとフルオートの使い分けが可能。

- ・24mm対空散弾銃『ラングニスト』

射程距離は短い分、射程内には多数の弾丸をばら撒く。ミサイルや弾丸の迎撃、近距離の敵への牽制などに使われる。

- ・70mmグレネードランチャー付22mmアサルトライフル『ゲリユ』

銃身下部に一発限りの高威力グレネードと22mm弾を採用。18mm突撃銃よりも一発の破壊力を重視しているため連射力や面性圧力は劣るが命中率と破壊力で勝る。

・10、5mm 回転式機関銃『フローキ』

オーストラリアの砂漠環境に適したミニガン。銃自体の重量が重く銃身が大きいので取り回しが悪いが、最も高い連射性を誇る。

・6連発回転式グレネードランチャー『フェンリス』

連続発射可能なグレネードランチャー。リボルバーを採用しているため連射力が高いが一回の戦いで6発が撃てる限度。

・46mm対装甲ライフル『グルファクス』

6連発回転式グレネードランチャーに次ぐ破壊力を持つライフル。反動が大きく連射は出来ないが高い威力と命中率を誇る。射程が最も長い。

・ヒートランス『ブリュナーク』

ジャクソン社が当初から採用しているIS近接戦闘の主武装。2m程の両手持ちの槍で本体は実体槍として機能する。

槍の先端から強烈な熱量を噴射することにより融解による貫通能力を持つ。

『デザート・ホーク』が開発されてからは柄の部分が強化され、高速回転させることで弾丸、ビーム兵器を弾くことができる。

『デザート・ホーク』専用兵装

・両手首上部、10mm2連装ショットガン 『ドラウニブル』

両手を自由にするため手甲上部に仕込まれた小型のショットガン。口径が小さく、装填数は少数、射程距離は短いと使いどころが非常に難しい。

だが罅迫り合い時からの近距離射撃は非常に脅威。また、他の武

装とも共有が可能。

・両手首下部、仕込み鞭 『グレイプニエル』
本機最大の特殊武器で、手甲の下部に仕込まれている。使用者の意思で手甲から射出できる超弾性鋼の鞭。

柔軟性に富み、叩きつける以外に、相手の一部や武器を絡め取ったりそのまま自分に引き付けたりする事も出来る。

常人が気絶する程の高電圧を流し込むことが可能で、相手のシールドエネルギーを削り、IS操縦者にも直接ダメージを与えることが可能となっている。また、相手の武装にこの高電圧を流し込むことで武装自体を破壊することが出来る。

両手の武装との共存が可能で、この武装で相手の攻撃を止めつつ攻撃するということも可能。

・両膝両足、仕込み短剣 『スレイヴニル』
両膝の前部、両足先端についている鋭い突起のような武装。端から見るとただの飾りだが、取り外しが可能。

それぞれ装甲内部には小型の実体短剣を備えており、膝は主に投擲し牽制に使用、足は蹴りの時に展開することが出来る。

・両肩部エネルギーブーメラン 『ヴェルフエルム』
実験的に装備されたエネルギー武装。普段は『スレイヴニル』と同じくただの飾りに見える。

一度投げれば機体と連動して確実に自分の元に戻ってくるため、相手の位置を誘導できれば相手の不意をついた攻撃を行うことが可能。

手に持ってナイフのように近接武器として扱うことも出来る。

・エネルギーソード 『レヴァテイン』
エネルギーブーメランと共に実験的に装備されたエネルギーソ

ド。

展開時は1m60cmの西洋剣のようになる近接武装。ブーメラ
ンと違い実体剣としても使用できる。エネルギー形成時には実体剣
の周囲にエネルギーが形成され、刃が赤くなる。

出力が高くエネルギー消費が激しいため、連続展開時間は1分。
再起動まで30秒かかるため使いどころは非常に難しい。非使用時
は腰部にマウントされていて呼び出す必要がない。

・左手、煙幕弾、ジャミング弾内臓複合盾『アイギウス』

絶対防御機能のついたISには珍しい大型の盾。盾内側に一回き
りとはいえ煙幕弾が装填されていて、不意をつくことが出来る。

また空中待機型の小型ジャミング兵器を合計3機打ち出すことが
でき、ISのハイパーセンサーを狂わすことも可能。ただしジャミ
ングが強力すぎるため範囲内にいると自身のハイパーセンサーも使
えなくなるため注意が必要。

煙幕弾と同時に使うことによって相手から完全に身を隠すことが
できる。

設定（後書き）

前回の後書きで主人公のプロフを書くと言いましたが、まとめてやった方が作者としても読者としても理解しやすいと思い設定として上げました。

パッケージですがもう設定は決まっていますが登場毎に追加していきます

のでお待ちください。

本編は今日中に上げます。

1 - 1 (前書き)

連続投稿2話目！

IS学園、一年一組

「皆さん入学おめでとう。私は副担任の山田真耶です」

あつという間に入学式を迎えた私の前には、黒板の前で小柄で胸の大きいメガネの女性、山田先生が自己紹介をしている。

やまだまや…上から読んでも下から読んでもやまだまや。この人の名前を聞いた人は絶対この印象を受けるはず。私だけじゃないよね!?

第一印象がこれなんだけどうしよう…でもやさしそうな先生かな?

「あ、あれ?え?」

こつちが反応しないことに戸惑ってるみたい…というよりみんな他のことに興味が有るといったほうが正しいと思う。

かく言う私もある無しに関わらず見ることになってしまう。

本来女性しか使えないIS、よってIS学園に通うのは必然的に女性になる。その中の異端。

受験時にISを偶然起動させ、世界で唯一ISを動かせる人にな

った男性。

全世界規模でお茶の間を騒がせた張本人。

名前は確か…織斑一夏…さん。

出席番号は名前順なので才の次は力。必然的に私の目の前に織斑さんの背中がある。

こういう時は自分の苗字を恨むしかない。

山田先生が必死に施設のことなどを説明しているけどやっぱり沈黙だ。なにか答えてあげたほうが良かったかな？

でも、恥ずかしいし…

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

あ、涙目になっちゃった。やっぱり返事くらいすればよかったかも…

ア行から始まるので自分の番はすぐだ。しかも織斑さんの後…うう、やりにくいよう

「では次は織斑君。お願いします」

あれ？織斑さんどうしたんだろう？

なにか考えてるのか俯いたまま返事がない。

「織斑君！織斑君！？」

「は、はい！？」

「あ、大声だしちゃってごめんなさい！でも…自己紹介、“あ”から始まって、今“お”なんだよね。自己紹介…してくれるかなあ？だめかなあ？」

うーん、山田先生は優しいというより私みたいに引込み思案なんでしょうか？それはそれで教師として問題があるような。

「えー…織斑一夏です、よろしくお願いします…」

うわ！皆の視線が痛い！

私に向いてるのじゃないって分かってるけど背中にヒシヒシと伝わってくるよ。

席替えてもらえないかなあ！？

簡単な自己紹介過ぎて皆が次の言葉を期待してるのがすごい分かる。

織斑さんもその空気を感じ取ったみたいで深呼吸をすると…

「……以上です！」

ガタガタガタっ！という音と共にクラスの大半が椅子から転げ落ちた。

私はというとポカーンとしてしまったのだが……でもみんなの反応も分からないこともない。なにか言うのかと思ったから当然といえば当然だね。

と思ったらいつの間に教室に入ってきたのか、黒いスーツ、タイトスカートの長身で鋭い吊り目の女性が立っていた。

その女性が手の出席簿を振り上げて……周りを気にしている織斑さんの頭に振り下ろした。

風を切る音共に振り下ろされた出席簿が気味のいい音を立て、それと共に織斑さんがうずくまる。恐る恐る振り返った織斑さんが声を上げた。

「……ってげえ！関羽！？」

あ、また叩かれた……痛そう……いや、最早痛みを通り越してその出席簿の振り下ろす速度に感心していました。

で、織斑さん。なぜそこで三国志の英雄の名前が出てくるんですよう？

「誰が三国志の英雄か、バカものが」

「織斑先生、会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「いえ、副担任としてこれくらいはしないと」

その女性は軽く山田先生と会話を交わすと黒板の前に立った。

ん、あれ？そういえば織斑って、同じ苗字？

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。だから私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。理解出来ない者は出来るまで指導してやる。私の仕事は若干15歳から16歳までを鍛えることだ。だから逆らっても良いが、私の言う事だけは聞け、いいな」

そう言った瞬間教室が割れるような嬌声に包まれた。思わず耳を塞いでしまう。

「キャーーーーー！！ 千冬様！ 本物の千冬様よ！！」

「私、ずっとファンでした！！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に入学したんです！ 北九州から！！」

「お姉さま！オランダに移住して結婚してください！」

「私、お姉さまの為なら死ねます!!」

ああ!そうか、この人が!

織斑千冬さん。

モンド・グロッシン

第一回IS世界大会の総合優勝および格闘部門優勝者。その実力から『ブリュンヒルデ』と呼ばれる事実上最強のIS操縦者。

非公認だけどあの『白騎士事件』の当事者というのがもっぱらの噂だ。

確かにIS学園で教師をしているというのは聞いていたけどまさか担任がその本人だなんて…

「毎年、よくもまあこんな馬鹿者共が集まるものだ。私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

織斑先生がそう呟くけど…多分どこも同じなんじゃないでしょうか?世界中でファンクラブがあるみたいですし。

「…で?挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は…っ」

織斑先生の手によって織斑さんが机に叩きつけられた……分
かりづらいから今から織斑さんは一夏さんと呼ぼう。

もちろん面と向かつては恥ずかしいから言えないけど。

「織斑先生と呼べ、馬鹿者」

「…はい、織斑先生」

苗字が同じでこれだけ親しいということは恐らく、いや十中八九実の姉弟なのだろう。周りもその関係に気づいたようでヒソヒソと声が聞こえる。

織斑先生が机を叩いただけでそれを沈めた。

「時間も無いことだし次の者、自己紹介を」

「は、はい！」

立ち上がると同時にちよつと足を打った…うつ、皆には気づかれてないみたいだけど、痛い…

「か、カルラ・カストです。オーストラリアから来ました。若輩ながら代表候補をやらせてもらっています。これから1年間、よろしくお願いします」

「ほう、お前がオーストラリアの代表候補生か。確か、元は一般の女子学生ということだったが」

「あ、はい」

「またも周りがざわつくを感じた。うう、今度は私への視線が痛い…」

「人から注目されるのは苦手なのに…ああ、なんか緊張してきた！」

「元が一般人であろうと私は容赦しないからそのつもりでいる。いいな」

「…はいいい…」

「返事はしつかり！」

「ひ…は、はい！」

「うむ、では次の者」

「うう、これでは注目されてるのも一緒ですけど…」

「…え？私以外にも代表候補生がいるんですか？しかもイギリス？ほっ、どうやら私だけが注目されるという自体は避けれそうですね。」

「それにそもそもこのクラスには一夏さんがいるんですから私より目立つのは確実ですね。」

「自己紹介が全員終わったら授業の前の小休憩。それから授業だ。」

「さあ、いつまで騒いでいる！ S H Rは終わりだ。諸君等にはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか？ いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。以上だ」

鬼教官という言葉が頭に浮かんでは私だけではないはずだ。
それでも周りのクラスメイトたちは阿鼻叫喚になっているけど…

こんなので一年間大丈夫かなあ…

1 - 1 (後書き)

というわけで本編第一話。一夏との会合でした。

前書きで書いている通り、原作1巻分までは出来ているので10話前後まで連続投稿します。

内容で言うところと鈴が出てきてゴーレム倒す辺りまでですね。

それ以降はまた2巻分が出来たら連続投稿、という形をとりたいと思います。よろしくお願いします。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。

1 - 2 (前書き)

連続投稿3話目！

この学校は珍しく入学初日から授業がある。織斑先生だったら全寮制なので気にしないでもいいって言われそう。

一時間目はほとんど入学時に貰った参考書に書いてあったことだったしあまり聞いてなくても・・・

とと、織斑先生がいるんだ。ばれたらさっきのツール・ハンマー（命名私）が私の頭にも振り下ろされかねない。集中しなくては！

「先生」

「はい、織斑君」

「ほとんど全然分かりません」

ほえ？

自分の正面から聞こえた声に思わず顔を上げてしまう。

それは山田先生も同じだったみたいで何を言っているか理解できないみたいでした。確かに男性はISに関係ないので私たち女性と違ってそもそもの基礎知識から違うのは分かるのですが、今やっているのは入学前に配られた必読の参考書に載っている基礎の内容のほ
ず。

一夏さんも貰っているはずなので分からないはずはないのですが・・・？

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「あの分厚いやつですか？」

「そうだ、必読と書いてあったろ」

「いや、あの・・・」

もしかして・・・

「電話帳と間違えて捨てました」

あ、やっぱり・・・私も最初は電話帳かと思ったもんなあ。面白かったからすぐ読んじゃったけど。

うわ！出席簿で横頬を殴られた！バシーンっていったバシーンって！

「表紙に必読と書かれてあっただろうが馬鹿者！後で再発行してもらうから、一週間以内に覚えろ、いいな？」

「い、いや・・・一週間であの厚さはちょっと・・・」

「・・・やれと言っている」

「・・・・・・・・はい、やります」

鋭い眼光でにらまれて一夏さんが頷いた。

というよりそれ以外の返事は許さないという目だ。あれでも一回でも反抗したらおそらくあのツール・ハンマーが振り下ろされるのだろう。

あれは弟だからなのだろうか、それとも他の人にもあんな風にやるんだろうか。

もしあの人の前でへまをしたらああなっちゃうんだろうか・・・

あわわわわわわわ・・・

「カストさん？」

「・・・・・・・・」

「カストさん！」

気づくと山田先生に呼びかけられていた。

「ひ、ひゃい！」

「大丈夫？何か顔が青いみたいだけど」

「だ、大丈夫です！問題ありません！」

「そう？ならいいけど」

いけないいけない。また悪い癖が出てたみたい。気をつけないと。

休み時間

教室の外には一夏さん目当てに他のクラスからすごい数の人が押しかけている。まるで客寄せパンダだ。

お手洗いに行くため廊下に出るのも一苦労してしまう。

かく言う私もさっきまで自分の席から離れてわざわざ遠巻きに見ているんだからその中の一人に変わりは無いんだけど・・・

一夏さんがパンダの気ぐるみを着て机に座っているのを想像してしまった・・・ふふ、なんだか可愛いかも。

授業開始ギリギリに教室に戻ると一夏さんと金髪のクラスメイト、確かイギリス代表候補生の（自己紹介のときそこだけすごい強調してた）セシリア・オルコットさん、だったよね。

その二人が何か言い合いをしていた。

言い合いというかオルコットさんが何か一方的に怒ってるように見えたけど。

その時休み時間を終えるチャイムが鳴り響いた。

「くう！話の続きはまた改めて！お逃げにならないように！」

「逃げるってなんでそんな必要があるんだよ」

なんの話をしていたか気になるけど・・・でも一夏さんに直接聞くのも恥ずかしいし・・・

「はい、皆さん。授業を始めますから席についてください」

そんなことを考えていると山田先生が入ってきた。そういえば一夏さんってさっきの休み時間にも篠ノ之さんにも話しかけられてたなあ。

つと、織斑先生が入ってきた。集中しないと！

今回の授業は織斑先生が担当みたいでそのまま教壇の上に上がる。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

そこまで言って織斑先生が思い出したように切り出した。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦と代表者？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席：まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

なるほど、つまり委員長のような存在というわけですか。これは私が出る幕ではなさそうですね。というよりも・・・

「はい！織斑くんを推薦します！」

「あ、私もそれがいいと思います！」

「私も織斑くんで！」

「お、俺！？」

必然的にこうなるのが分かってるのでそこまで焦る必要はないというかなんというか・・・

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつと待った！俺はそんなのやらな・・・」

「自薦他薦問わないといった。他薦されたものに拒否権などない選ばれた以上は覚悟しろ」

有無を言わせずとは正にこのところだろう。

まあでも流石にこれで一夏さんも諦め・・・

「だ、だったら俺なんかより相応しい奴がいるだろ・・・えっと・・・カストさんとか」

「え・・・」

一瞬思考が停止した。

え？一夏さんは今なんていいました？すみません思考が全く追いつかないので誰か説明をお願いします。

「ふむ、では織斑とカストで投票ということでもいいな？」

はい！織斑先生簡潔かつ明快な答えをありがとうございます！

「あゝ・・・拒否権って・・・」

「当然なしだ」

ですよねー。織斑先生にまったく表情を崩さずに言い切られました。

こ、これが切り捨て御免というやつなのですか。日本人はもっと遠まわしに物事を言う人たちだと聞いていたのですが。織斑先生に常識は通用しないみたいです。

「あ・・・なんかごめん・・・そこまで嫌だったなんて」

「ぐすつ・・・いいんです、諦めました・・・」

涙が出そうになってしまいますが相手が推薦されている以上推薦し返すというささやかな仕返しさえできない。
それに多分選ばれるのは一夏さんでしょう。

「よし、ではこの二人で・・・」

「納得いきませんわ!」

バン!という音と共に聞いた声が教室に響いた。振り返るとオルコットさんが怒りに肩を震わせて立ち上がっている。

「そのような選出は認められません! 男がクラス代表なんていい恥さらしですわ! このセシリア・オルコットにそのような屈辱を

一年間味わえと仰るのですか!？」

屈辱って・・・そこまで言うほどのものでもないと思うのは私だけでしょうか？

いいえ、推薦されている以上他の人は一夏さんでいいと思っています。はずです。オルコットさんだけだと思います。

ちなみに私も一夏さんでいいと思っています。

「第一！文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと事態、私には耐え難い苦痛で・・・っ!!」

「イギリスだつて大したお国自慢無いだろう。世界一不味い料理一位、何年覇者だよ」

一夏さんが言い返した言葉にクラスの何人かが軽く頷いている。
まあ・・・私も前にイギリスに行ったことがありますがあれは確かに・・・

それからオルコットさん。日本はイギリスと比べても経済国として有名ですし、何と言つてもESを作った国ですから文化後進国は間違っていると思います。

「な！貴方私の祖国を侮辱しますの!？」

さらに言えば先に日本を侮辱したのはオルコットさんなんですけどね。

「それと！カストさん！」

「ひゃい！」

な、何なに！？いきなり話を振らないでください！

「貴方も代表候補生ということですけど、クラスの代表者は一番強い人になるべきだと思います？」

「は、はあ・・・そうですね」

まあ、それは確かにそうですね。

「それに加えて！元々わが国の支配下にあつた国の人より私のほうが下と思われること事態がこれ以上ない屈辱ですわ！」

ブツン・・・

自分の中で何かが切れる音がした。

「で？結局何が言いたいんですか？」

「決闘ですわ！この中で誰が一番強いのか、その身に分かせて差し上げます！」

「流石イギリス。気に入らないことがあれば争いごとで決めるのは昔から変わらないんですね」

「な、なんですって！」

「それに所構わず怒鳴り散らすのがイギリス淑女の嗜みなんですか？お国柄を疑う淑女のあり方ですね。あなたの言う元々支配国の私の国のほうがまだマシですよ？」

オルコットさんの顔が真っ赤になっている。いい気味だ。
故郷を侮辱するような人に容赦する理由はどこにもありません。

「いい加減にせんか馬鹿どもが！」

ダァン！

「ひい！」

教室中に響き渡るほどの勢いで織斑先生が教団を叩いた。

「二人とも口は十分回るようだが、どちらも代表候補ならばISで

決着をつけてみる」

「わ、分かりました」

「り、了解ですわ」

その有無を言わせない気迫にオルコットさん共々頷くしかありません。

「それでは一週間後の月曜日、第3アリーナで模擬線行う。カスト、オルコットが先に戦い、勝ったほうと織斑と戦い、そこで勝ったものがクラス代表だ。三人はそれぞれ準備をしておくように。織斑も、それでいいな？」

「え？それってどっちは連戦するってこと……ですか？」

織斑先生の言葉に一夏さんが慌てて口調を改める。どうやらまた叩かれるといったことは防げたみたいです。

「仮にも二人とも代表候補生だ。連戦ハンデ無しで丁度いいくらいだろう？」

「分かりましたわ」

「私もそれで構いません」

「よし、ではこの話は終わりだ。授業を始めるぞ」

そう言つて織斑先生が締めくくつた。とりあえず勝負は来週の月曜日。週末に調整が出来ればいいんですけど。

私は無意識の内に首から下げられてた指輪を服の上から弄つていた。

1 - 2 (後書き)

『デザート・ホーク』の待機状態は金の指輪。カルラは鎖に通して首に掛けて、胸元にしまっています。

というわけで連投3回目。カルラの静かなる激昂を描きました。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。

1 - 3 (前書き)

連続投稿4話目！

「えつと、1024・・・1024・・・あ、ここだ」

夕食が終了し、私は今割り当てれた部屋を見つけて扉に手をかけた。

「あ、あれ？」

鍵がかかっている。どうやら相室の人はまだ戻ってきてないみたいだ。食堂に最後までいたのは私だったんだけど・・・貰っている鍵を使って中に入る。電気をつけて中を確認するとまだ相手の荷物さえない・・・

荷物は入学前に運び込まれてるはずなんだけど？

「もしかして・・・」

寮の部屋割り名簿を確認する。思ったとおり・・・ここではあまり思い通りにならないで欲しかったんだけど・・・相室はいないという決定的な事実がそこには記されていた。

「そ、そんなぁ・・・」

せっかく友達を作れるチャンスだと思ったのに……
相室がないなら一夏さんが一番いいんじゃないの！

いや、まあオルコットさんと一緒よりは全然いいんだけどね。

ベッドの上でそうしてゴロゴロ悶絶していたが今更決まったことを嘆いても仕方ない！

こうなったらクラスで友達を！

バキィ！

「ひい！ごめんなさい！」

思わず謝ってしまった……こういう時は同室がいなくて良かったかも……

音源は隣の1025かららしい。なにかの破壊音と喧騒が聞こえてくる。

初日から喧嘩でもしてるんだろうか？

興味本位で扉を開けて外を確認すると既に人だかりが出来ていた。

人だかりの中心は隣の部屋の入り口。一夏さんがいた。

どうやら隣の部屋は一夏さんの部屋みたいだ。でも中に誰かいるみたいだ。女の子と同室になってしまったのだろうか？

みんな既に部屋着やパジャマなどラフな格好でいる。私にはあそこまで恥ずかしげなく男性の前に出ることは出来ない・・・と思う。

ふっと、入り口を開けている私と目が合った。

え？え？何でこっちに走ってくるの！？

必死の表情で迫ってくるので思わずドアを閉めようとして・・・閉まりきる前に取っ手を掴まれた！

「ひい！」

「ごめん！匿ってくれ！」

「え？ええ！？」

「お願いします。このままじゃいろいろまずいので頼む！いや、頼みます！」

「う、うん。構わないけど」

「助かった！ありがとう！」

必死の懇願に思わずうんと答えていた。一夏さんを中に入れて扉の鍵をかける。

「えっと・・・カストさん、だったよね？」

「え、はい。そうですけど」

「良かった。無理言っ入れてもらって名前まで間違ってたらどうしようかと思ったよ」

息を整えている一夏さんがそう言う。

そういえば・・・思わず入れちゃったけど若い男女が密室で二人つきりって言うのは非常にまずい気がしてきた・・・

「と、ととと・・・とりあえず織斑さん、何か飲みますか？」

「へ？ああ、いいよ。ほとぼりが冷めたらすぐに出て行くから・・・」

「いえ！招いた客人をもてなしもせず返したとあつては両親の教えに反します！ぜひ！」

「そ、そうなのか？じゃあお願いしようかな」

自分の気持ちを落ち着けるために半ば強引に進めてしまった・・・
両親の教えというのは本当なただけどこっちのほうに怒られそうなの・・・

とりあえず椅子を進めてから荷解きもしていないダンボールの中からコップを二人分取り出して他のダンボールから飲み物を取り出す。

やっぱり最初に飲んでもらうなら『ヌーディー』かな？あれなら誰でも好きになれる味だと思う。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

「いいえ」

座ってる一夏さんにコップを渡して反応を待つ。実は他の国の人に物を勧めるのは初めてだったりするわけで・・・

「お・・・」

「お、美味しいくなかったですか？」

「いや、逆だよ！これ美味しいなあ！」

「そうですか？良かったですあ」

「うん、不思議な触感がするけど。これフルーツ？」

「はい、これは柑橘系のフルーツを使ったものです。国では『ヌーディー』と言って結構有名なんですよ？他の果物のも飲んでみます

か？」

「いいのか!？」

「はい、むしろ飲んでください」

かれこれ一時間は『ヌーディー』の話で盛り上がっていただろうか。と言ってもほとんど私が故郷の話を交えながら勝手に話していただけのような気がしますけど・・・

気がつくとはほぼ全てのボトルの蓋を開けて試飲させてしまっていました。

「あ・・・す、すみません！」

「へ?どうしたの？」

「こ、こんな無理やりいっぱい。織斑さんに迷惑でしたよね」

「ああ、そんなことか。むしろご馳走になっちゃって悪いって思ってたくらいなんだ」

「そ、そうですか?ならいいんですけど・・・」

「迷惑なら迷惑って俺はちゃんと言っからさ。気にしなくてもいいよ」

一夏さんはそう言って笑ってくれた。いい人なのかな・・・織斑

先生とは大分違うタイプみたい。

「あ、そういえばさあ」

「はい？」

思い出したように織斑さんが尋ねてきた。

「カストさんもえっと・・・代表候補生なんだよな？」

「え、ええ。そうですよ。それがなにか？」

「いや、あのセシリアって奴と大分感じが違うというか・・・エリートって感じじゃないなあって」

「ああ、そう言うことですか。確かにほとんどがエリートと言える人たちでしょうね。むしろ私みたいな人のほうが特例です」

「カストさんもセシリアみたいな貴族とかどっかの社長の令嬢とか？」

「いえ、生まれは一般家庭でどこでもあるような普通の学校に通ってましたよ。私の場合は両親がIS開発に携わってるんですが、その関係で。なのでこれと言って特異なものがあるわけではありません。そんな私に専用機まで用意してくれるんですから両親と国の人々たちには本当に感謝してます」

「ふうん」

この顔・・・専用機って分かってませんね。

「織斑さん、教科書の6ページを読んでおくことをお勧めします」

「へ？なんでさ？」

「専用機って言葉の意味、わからなかったでしょう？」

「あ・・・バレた？」

「当然です」

普通なら専用機持ちはISを使うものにとつての憧れ。それをあんな風に流すんですからそれはバレて当然でしょう。

そこで話が途切れたので外の様子を見るために鍵を開けて廊下に顔を出す。どうやら皆さん部屋に戻ったようだ。

「織斑さん、もう大丈夫みたいですよ」

「そっか、本当ありがとうな。カストさん」

「いえ、織斑さんは唯一ISを使える男性ですし・・・皆さんの興味を引くのも仕方ないことかと」

「あゝ、そのさ、織斑さんってやめてもらえないかなあ？」

「へ？」

「ほら、千冬姉がいるだろ？そのせいで苗字で呼ばれるとなんかむず痒くってさあ」

確かにそうかもしれない。けど・・・

「でもいきなり名前で呼ぶのも・・・」

「んー、俺は構わないんだけど・・・お！じゃあさ、友達なら名前で呼んでも大丈夫だよな」

「はい？」

そんなさもないアイデアを思いついたように言われても！

「あれ？迷惑だったか？それならいいんだけど・・・」

「いえいえいえ！そんな私なんかが・・・むしろもったいないって思っくらいで！」

「じゃあ俺とカルラさんは今から友達ってことで、おっけー？」

「は、はい。おっけー・・・です」

そう言っで一夏さんが手を差し伸べてきた。

「よろしくお願いします、おり・・・一夏さん」

「うん、よろしく。カルラ！」

「カル・・・！」

ま、まさかいきなり名前を呼び捨てにしてくるなんて！せめてそこは『さん』づけとかじゃないんですか・・・

「あれ？カルラ、顔が真っ赤だけど大丈夫か？」

「だ、大丈夫れす！また人が来る前に早く戻ったほうが！」

「あ、ああ。じゃあカルラ。明日からよろしくな」

そう言っで一夏さんは部屋に戻って行った。

日本の男性というのはあそこまで大胆なものなのでしょうか？一夏さんが特別なのでしょうか？

と、とりあえず疲れました・・・今日はもう寝ましょう

『よくもまあオメオメと戻ってこれたものだな!』

『ま、まだ怒ってたのか!』

隣の部屋から叫びが聞こえますが・・・

幻聴です。幻聴なんです。これは余程疲れているのでしょう。早くシャワーを浴びて寝なくては明日に支障がですね。

『成敗してくれる!』

『た、助けてくれー!!!!!』

こういう時は日本語でなんて言うんでしたっけ? ご愁傷様です、で合っていましたっけ?

1 - 3 (後書き)

カルラの部屋には後々誰か入ります。

はい、連投4回目。クラス代表決定戦は話数的にちょうど今週末くらいになりそうです。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。
それではまた次回 ノシ

1 - 4 (前書き)

連続投稿5話目！

IS学園、食堂午前8時

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いやあ！ここの朝食は美味しいな二人とも！」

ど、どうして一夏さんはこの空気でここまで食が進むのでしょうか！？

状況を整理しましょう・・・私は今朝食をとるために食堂へ来た。ここまでいいです。

そこで一夏さんに会った。これも皆さん食堂を使うのでありえないことではないです。

でも・・・そこで「朝食一緒に食おうぜ！」なんて誘われるのは計算外です！

しかも一緒にいた篠ノ之さんが、その瞬間敵を見るような目つきでこっちを睨んできてさつきからずっとこの調子です！

これはもう恋ですね！恋なんですね！？篠ノ之さんは一夏さんにLoveしてるんですね！？

初対面の私でも分かるそれを一夏さんは全然気づいていないよう

です。

確か日本の漫画で読みました。こういう人は朴念仁とか鈍感男とか言っんですよね？

「ん？カルラどうした？箸が止まってるけど？」

「あ、あまり食欲が無くて・・・」

もう一瞬でも早くこの場を離れて教室に行きたいんですけど・・・

「ダメだぞ、朝はちゃんと摂らないとばてちゃうじゃないか。ほら、これなんて美味しいぞ！」

「ええ！？」

なんとということでしょうか！あろうことがこの人は自分の鮭の切り身を進めてきたのです！

いえ、それは問題じゃなくて、切り身を箸で挟んでこちらに差し出しています！

これは世間一般で言う「はい、あーん」というものなのですか！？

ひい！

篠ノ之さんが視線で人が殺せたらって言うほどの目つきになって

ます！

多分その目線は心臓病を患ってる人か老人は殺せると思いますよ！？

「だ、大丈夫です！お気になさらず」

「大丈夫じゃないって。IS学園に入って最初の友達が体調崩すようなことしたら放っておけないだろ」

「……………一晩でずいぶん仲が良くなったものだ……………」
夏

今日初めて篠ノ之さんの声を聞きました……
でもなんででしょう……全く助け舟の気がしません。

そのまま一夏さんが篠ノ之さんを妙な言い争いを始めたので一夏さんの注意が反れました。

今のうちに自分の朝食を摂ってしましましょう。

「あ、あれ？もう食ったのか？」

「は、はい！では私は準備をするのでまた後で！」

「あ、ああ。後でな」

顔が熱い……きつと今私の顔は茹でた蛸のように真っ赤に違い

ない。

足早に食堂を出る際に「もったいない・・・」とか「私がして欲しかった」とか聞こえましたが無関係なのです！男性耐性なんてないんですよ！

きつと自分の番になったら私みたいになるに決まっています！

食堂を出た途端後ろから織斑先生の声が聞こえてきました。なんでも織斑先生は一年生の寮長だとか。

それを直接聞かないでホッとしている自分がいる。どうやら織斑先生への苦手意識がはやくもついてしまっているみたいだ。

本当・・・これから大丈夫なんだろうか

その日からは通常授業。今日はずっと座学です。

既に一夏さんは2時間目までの授業内容で頭がパンクしているみたいで、今にも煙が出るんじゃないかって言うくらい唸ってますけど・・・

それでいて休み時間には他の生徒の質問攻め。心休まる暇が無いとは正にこのことでしょう。

織斑先生が3時間目の授業直前に来て一夏さんに話しかけました。この人が来るだけで教室の空気がまったく変わるんですね。さすがと言っべきでしょうか。

「織斑、お前のISだが準備に時間がかかるぞ」

「へ？」

「予備の機体がない。だから少し待て。学園側から専用機を用意する事になった」

「専用機？」

「専用機！？一年のこの時期に！？」

「それって政府から支援が出るって事でしょ！？」

「すごい…私も早く専用機ほしいなあ」

織斑先生の言葉に教室中がざわめく。当の一夏さんは頭の中から情報を引っ張り出そうとしているようで頭を捻っている。

「専用機って・・・昨日言ってたあれだよな？国家の代表やカルラみたいな代表候補生とかが専用で使えるISのこと」

確認するように一夏さんが振り返って聞いてきた。

「はい。正確には主に国家代表操縦者、または代表候補生や企業に所属する人間に与えられるISのことです。ISは現在467機し

が存在しないので、専用機を持っているということはそれだけで特別な存在、というわけですね」

「467?それだけ?」

「作った篠ノ之東博士以外はコアがブラックボックスになっ
ていて他の人には作れないんです。ですから現状存在するISは467
だけです」

「あー、そういえばそんなこと書いてあった気が・・・」

昨日の夜少し専用機の話をしたんだけどそれが良かったのかも
しれない。

そういえば数の話はしなかったと思い出した。

そんなことを思っていると織斑先生が話を切った。

「今カストのいった通り、IS専用機は国家、企業に所属するもの
しか与えられない。が、お前の場合状況が状況だ。だからデータ収
集を目的として専用機が用意される。理解できたか?」

「な、なんとなく・・・」

「よし、ではこれで話は終わりだ。山田先生、授業を」

「は、はい。それでは皆さん、テキストの12ページを・・・」

「安心しましたわ！」

授業が終わったのも束の間、いつの間に来たのかオルコットさんが一夏さんの目の前で仁王立ちしていた。

「クラス代表の決定戦！私とあなたでは勝負は見えていますけど、流石に私が専用機、あなたが訓練機ではフェアではありませんものね！」

「もう勝った気でいるんですね」

「当たり前ですわ！あなたも代表候補生で専用機持ちといいますが、私があるときに負けるはずがありませんもの！」

とことん人を挑発するのが好きな人だ。

「そんなの分からないじゃないか。カルラが勝つ可能性もある」

「それこそありませんわ。期待するだけにしてもいいかもしれませんが、せんけど無駄になりますわよ？」

この良く分からない自信は一体どこから出てくるんでしょう？
まあどの道結果が全てです。両親からも教えられましたが正式な
場以外での乱闘騒ぎは先に手を出したほうの負け。なら本番で見返
してあげればいいだけです。

「そうなのか？ 篤」

そしてどうして篠ノ之さんに話を振るんでしょう？ 確かに男の一
夏さんよりは詳しいと思いますけど。

「私に振るな」

なんとというか、「寄らば切る！」みたいな感じですね。朝からず
っとこうですけど・・・

「そういえばあなた、あの篠ノ之博士の妹だそうですね？」

「妹というだけだ。それ以外の何者でもない」

オルコットさんがそのことについて言うとなら、篠ノ之さんが凄みのあ
る声で答えた。

珍しい苗字ですしまさかと思ってましたけど・・・

でも篠ノ之さんは篠ノ之さんなりに天才の妹、ということでも苦労してきたんでしょう。

その顔は「その話をするな!」と言っている。

「ま、まあ?どっちにしてもクラス代表はこの私以外はありえないんですけど?」

気迫に押されて最初キョドりましたね。

「相変わらず口が回るようだが、いつまで教壇の前で仁王立ちしているつもりだ馬鹿者が」

バシィ!

「いた!」

いつの間に教室に来ていたのか、織斑先生の出席簿がオルコットさんの頭に振り下ろされた。

「うつ・・・ま、まだチャイムは鳴って」

キンコンカンコンコン

「あ・・・」

「何か文句があるのか？」

「も、申し訳ありません」

頭を抱えながらオルコットさんが席に戻っていく。この人には一生勝てないと改めて思いました・・・

チャイムが鳴ったすぐ後に山田先生が入ってきましたが・・・

「あ、あれ？織斑先生？私より後に職員室を出たはずじゃあ・・・」

「何を言ってるんだ山田先生。熱でもあるのか？」

「あれ？あれ・・・？」

勝てる勝てない以前にこの人本当に人間なんでしょうか・・・？

1 - 4 (後書き)

11月になりましたね。

というわけで(どういうわけ!?)連投5回目です。今日読み返してみたんですけど展開遅いですか?遅いようなら2部からはもう少し展開を早くしてみようと思いますけど・・・

文章的にはこのくらいが読みやすくて丁度いいと自分では思っんですけどね。ネギまの方ではずっと長文だったので勝手が分からないと言っのが本音です。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております!よろしくお願いします!

1 - 5 (前書き)

連続投稿 6 話目！

「ねえ、カストさんも専用機もってるんだよね？」

「は、はい。一応」

「オーストラリアの専用機かー。やっぱり『デザート・ウルフ』？」

「いえ、一応実験中の第3世代『デザート・ホーク』を・・・」

「第3世代！？」

「すっごーい！オーストラリアってあんまり有名じゃないと思ってたけど、もうそこまで行ってるんだ！」

今は授業が終わってお昼の食堂。私が昼食を取っているとクラスの色々な人たちが話しかけてきた。

皆さんやっぱり気になっていたりみたいで、今日の騒ぎで一気に話を聞きに來たみたいです。

それはいいんですけど・・・食べる時間がなくなりそうな勢いです。

「おーい、カルラ！」

「あ、織斑君だ！」

私の周りの人たちが一斉に振り返った。私も声のほうを見ると、一夏さんと篠ノ之さんがトレーを持って立っていた。

「あつちで一緒に飯食わないか？少し話したいこともあるし」

「あ、はい。いいですよ。皆さんすいません。話はまた今度で」

「うんうん、行つて来な！」

「はあ、いいなあ。私も一緒に食べたい！」

「我慢我慢、まだまだこれからよ！」

トレーを持って奥のテーブル席に移動する。篠ノ之は相変わらずの仏頂面だ。確かに朝と同じで食べにくいけど・・・朝よりはマシかな。マシだと思う。マシだと信じたい・・・

しばらくは特に大した会話も無く3人で昼食を食べていた。もうすぐ食べ終わるという段階になって一夏さんが口を開いた。

「箸、カルラ」

「なんだ」

「はい？」

「俺にISのことを教えてくれないか？来週の勝負、このままじゃ

何も出来ないまま負けそうだ」

篠ノ之さんはあの篠ノ之博士の実の妹。その関係で一緒に誘っているでしょう。でもこの話し方だとそれ以前からの知り合いのようですけど。

「でもそれなら篠ノ之さんだけで十分ではないですか？あの束博士の妹さんならば尚更私なんかより・・・」

「私はあの人ではない。それに、それは一夏の自業自得だ。あんな分かりやすい挑発に乗った罰だ」

やっぱり天才の妹、と思われるのはこの人にとっては苦痛みたいだ。あまりこの話題を出すのはやめておこう。

「でも筈はこうしてIS学園に入ってるし、カルラも代表候補生なんだろ？だったらどっちが強いとかは置いておいて、少しでも経験のある奴から教えてほしいんだ」

「で、でも私と一夏さんはひょっとしたら戦うかもしれないんですよ？それなのに私に頼むなんて・・・もしかしたら私が貴方に不利になるようなISの操縦方法を教えるとか考えなんですか？」

「いや、それはないだろ。カルラなら」

ああ、もう！この人は何でつい昨日友達になった人にここまで断言できるんでしょう？

それに相変わらず篠ノ之さんの好意に気づいていないのも問題です。

話を聞いてるだけでも一夏さんと篠ノ之さんは昔からの間柄の様なのに・・・

「筈、どうした？」

「なんでもない！」

「な、なんで怒ってるんだよ？俺何かしたか？」

「何でもないと言っている」

「嘘付け、顔が怒ってるじゃないか」

「この顔は生まれつきだ」

そう言っ て篠ノ之さんが残りのご飯を一気に掻き込んだ。

ああ！そんなことしたら！

「むぐ！」

ああ、やっぱり。案の定喉につまらせたようです。

「だ、大丈夫ですか!？」

私が背中を摩りながら水を手渡すと、篠ノ之さんが一気にそれを飲み干す。

「す、すまない。迷惑をかけた」

「いいえ、篠ノ之さんこそ大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない」

「なにやってんだか」

「ねえ、君って噂の男の子でしょ？代表候補生と喧嘩するってことになった」

急に話かけられて3人の視線がそちらに向く。帯の色が3年生の赤色だ。ということはこの人は3年生ということですか。

「良かったら、私が教えてあげ・・・」

「結構です、私が教えることになっていますので」

篠ノ之さんがその人が言い終わる前にその人に言い放った。

「あなたも１年生でしょ？私は３年生。私のほうが上手く教えられると思うけど？」

「私は・・・篠ノ之束の妹ですから」

言うときに少し苦そうな顔をして言っていた。篠ノ之束の妹、という位置づけは相当苦勞しているらしい。姉の名前を嫌がりながらも使うほど一夏さんのことが好きなのだろう。

「ですので結構です」

「そ、そう。それなら仕方ないわね・・・」

その３年生は渋々ながらに元の席に戻っていった。

「教えて・・・くれるのか・・・？」

「放課後に剣道場に来い」

「そっか！サンキュー！！」

「ふ、ふん！」

うん、私の出る出番は無さそう。これなら篠ノ之さんの思いに――
夏さんも……

――夏さんにはれないように篠ノ之さんに耳打ちをする。

「良かったですね。頑張ってください篠ノ之さん」

「な！わ、分かるのか？」

「それはもう」

「そ、そうか。ありがとう……それからカスト。その……苗字で呼ぶのは止めてくれ。私は篝という名前がある」

「あ、分かりました。では篝さんと。私もカルラでいいですよ」

「む、そうか。ではそう呼ぶとしよう」

やっぱり篠ノ……篝さんは一夏さんが関わらなければいい人のようだ。初めてこの人の素の笑顔を見れた気がする。

放課後の剣道場

「どうしてこうなったんでしょう・・・」

「どうしてこうなっているんだ・・・」

私と箒さんがほぼ同時にそう呟いた。

事の発端は授業が終わって直ぐ。二人が剣道場に行くのを見守っている一夏さんに私も一緒に来てくれと強制連行されました。以上。

「だから、カルラにも教えて欲しいんだって言ったろ？」

「諦めろ、あいつは言い出したことは曲げない。多分カルラが頷くまでこんな感じだぞ？」

箒さんがもう慣れたといった風に肩を竦めた。

「箒さんは一夏さんのこと、よく理解しているんですね」

「そりゃ箒は俺の幼馴染だからな！」

聞こえていたのか一夏さんがそう言った。なるほど。幼馴染・・・高校で再会した幼馴染。片思いとそれに気づかない鈍感男・・・

どっかで聞いたような話が始まりそんな予感ですね。しかもB A
D E N D 臭がプンプンするんですけど・・・

「分かりました。でも放課後はそこまで時間はありませんし、それに一夏さんのI Sも届いていないそうなので、一応訓練機の使用許可を求めてみましょう。それが出たなら私が可能な限り教えますよ」

「そうか！二人とも、ありがとうな！」

「言っておきますけど使用許可は自分で出してくださいね。そこま
で面倒は見ませんよ」

「おう！」

そう言って一夏さんは笑顔を向けてきた。・・・天然ジゴロとは
正にこのような人を言っんでしょうね。ここまで純粋な笑顔を向け
られるとこっちが照れます／＼

そこからはしばらく私は見学だ。一夏さんが箒さんと打ち合うの
を見ているだけ。こうやって見ると箒さんの剣道の腕は凄まじい。
様々な技を駆使して一夏さんを見事に翻弄している。

しばらくすると一夏さんが待ったをかけた。明らかに疲労してい
る。

「どういつことだ！どうしてそこまで弱くなっている！」

「いや、どうって言われても」

「中学では何部に所属していた！」

「帰宅部！3年連続皆勤賞だ！」

思わず何も無いのに転びそうになりましたよ・・・

「一夏さん、それ自慢することじゃないです・・・」

「そうか？」

「IS以前の問題だな！これから放課後三時間！私が稽古をつけてやる！」

「ちょっと待て！俺はISのことを教えてもらいたくて頼んだんだぞ！今更剣道の稽古なんて・・・」

「いえ、一概にそうは言えません」

「カルラ？」

「ISは乗り手の思い通りに動いてくれます。だからIS自体の性能も重要ですが、操縦者の心身鍛錬も非常に重要です。その技術をそのままISに使用できますから」

「カルラの言うとおりだ！ほら立て！」

そうは言っても篝さんは嬉しそうだ。やっぱり好きな人と二人で同じことを出来るというのは嬉しいんだろう。

私の出番はISの使用許可が出てからだ。それまでは篝さんに――夏さんとの時間を作ってあげよう。

「脇が甘い!」

「ゴボア!」

作って上げ・・・

「防御を下げるな!」

「ペプシ!」?

作って・・・

「死ねえ!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!!!!!?!?!?」

声に鳴らない悲鳴を上げる――夏さんを見て思ったこと。

・・・告白する前に――夏さん死んじゃうんじゃないかな・・・・・・・・

.

1 - 5 (後書き)

今回も見てくださってありがとうございます。

連投6回目です。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております！

1 - 6 (前書き)

連続投稿7回目！

土曜日、朝、第一アリーナ

今日、ISの使用許可がようやく下りたため人の少ない朝方を狙って第一アリーナを借りた。

それにしても訓練機を借りるのに書類を十枚前後書かなきゃいけないなんて、使わせたくないのかと疑ってしまいます。

いえ、でも開校一週間も経たずに新入生にISを貸し出すのは代表候補生以外は特例中の特例でしょうし、しょうがないと言えばしょうがないでしょう。

まあそれは置いておいて、目の前には日本の第2世代型IS『打鉄』が用意されている。

『打鉄』は日本の2世代型純国産のISだ。1m60cmの近接ブレードを主武装とし、安定した性能を誇るガード型のIS。見た目的には灰色の武者鎧といったら分かりやすい。

その特性から初心者にも使いやすく、現にこのIS学園でも訓練機として使用されている。

その『打鉄』を一夏さんが触りつつ、へーとか、ほーとか言いながら周りを回っている。

「私の方に許可は出なかったのに・・・」

「仕方ないですよ。この時期に一夏さんの許可が出ただけでも異例

だそうです。試合でもない篝さんの許可は流石に無理だったという事でしょう」

「うう・・・」

明らかに肩を落としている篝さんには同情するしかない。

私の機体は両親や企業の人から他の人に触らせるなって言われているし、こればかりはどうしようもない。

「おいカルラ！こっちは準備いいぞ！」

「あ、はい！」

いつの間にか一夏さんは『打鉄』を身に着けて立っていた。

初期動作は昨日教えておいたので身に着けるまでは簡単に出来たみたい。

「で、これからどうするんだ？」

「はい、一夏さんのISはどんな型分かりませんので、変な癖がつかない程度に基礎の動きを練習しましょう」

「専用機ってそんなに違うのか？」

「ピンキリはありますが、一つのものに特化したものや、あらゆる状況に対応できるものなどありますし」

「そうか、じゃあカルラに任せるよ。よろしく頼む」

一夏さんは起動が今回で二回目。しかも連続稼働時間は30分程度ということらしかつたので、本来は歩行からやってほしかつただけど・・・実戦も近いことだし、試しに飛行をやってもらった。はつきり言って歩行は戦闘時には役に立たないからだ。

飛行はIS起動の初めての人はほとんど出来ないのだが、なんと一夏さんは危なげながらも見事に飛行して見せた。

しかも1時間程度飛んでいるとその危なげな部分をドンドン修正してしまうのだ。正直これは反則だと思う。

・
私なんてすっかり飛べるようになるまで一週間はかかったのに・

『うひょおおおおお！これ楽しいなあ！』

空を飛んでいる一夏さんから通信が入る。そこには心底楽しそうにISの飛行を楽しむ青年が映っていた。

『よし！お？あれ？うわあああああああ！』

「一夏さん！？」

「一夏！」

叫び声で今まで空を見ていた篤さんもモニターに飛びついてきた。
一夏さんが激しくきりもみしている。

そのままアリーナの地面に『ドオン!』と激しい音と共に激突した。

墜落、正にその言葉が相応しい堕ち方だった。

「一夏!」

篤さんが激しく土煙の立つ激突地に走っていった。私もその後が続いてそこに向かう。

煙が晴れるとISと一夏さんが見えてきた。
良かった。どうやら傷らしい傷はないみたい。絶対防御機能があるので当たり前といえば当たり前なのだけど・・・

「おおう・・・死ぬか思った」

「ふん!いきなりで変なことをしようとするからだ、馬鹿者め!」

「ちなみに何をしようとしたんですか?」

「いや、前に動画で見た飛び方を試してみようかと・・・」

「それは無謀ですよ・・・」

「そんなことだろうと思った」

ISは飛行機ではないし、素人がそんな動画に上がるようなISの行動をいきなり取れるわけがない。

飛行機もほとんど乗ったことないですけどね、私。

「いやー、出来そうな気はしたんだけどなあ」

「慣れたときが一番危ないですよ？自転車とかと同じです」

「だな、気をつけないと」

その後はさつきよりは慎重にISを動かしていた。こちらの指示にもしつかり従っていたし、これならどんな専用機でも初期動作はほぼ上手くいくでしょう。

「一夏さんの攻撃方法はやはり近接戦闘ということになりますかね？」

「だな。あいつに射撃の云々があるとは思えん」

箒さんは空を自由に飛びまわるISを見ながらそう答えた。

そもそも箒さんとの訓練と言う名のしごきでは剣道しかしていないので近接戦闘を主とするしか選択肢がないのだけれど。

「で、どうしましょう?」

「ん?何がだ?」

「一夏さんと戦う可能性がある私やオルコットさん対策を立てるのに私が一緒にいるべきかどうか、ですよ」

「む・・・」

そう、一夏さんは構わないと言ったが対戦する相手ISの対策と言うのは必須だ。特に一夏さんは超をつけてもいいほどの初心者。仮にも代表候補生の私やオルコットさん相手には奇襲奇策の類が必須となる。

でもそれに私が関わるとその作戦は瓦解する。なにせその内容を敵となる人が知ってしまうとそれは奇襲でも奇策でもなんでも無いからだ。

オルコットさん対策には私も付き合いますけどね。

「ちなみに・・・」

今私はISの頭部のみを部分展開して一夏さんとの連絡を取っている。つまり頭の周りは情報の塊だ。空中に画面を映し出して筈さんにも見えるようにしている。

その画面を指で弾いて変更。出てきたのは大量の文章だ。全てセシリア・オルコット専用機、『ブルー・ティアーズ』の情報が映し出されている。

ISは慣れてくるとこういう風に部分的に展開できるのですごい

便利だ。

ISは条約により開発したその技術を全て他国に晒すという条件の代わりに、ISの稼動状態を映した動画というのは極端に少ない。それこそ内通者でもない他国ISの実際の稼動状況は見られることは滅多にない。

そのため、戦ったことの無い機体情報はほとんどが文章でのみの理解が必要となる。

「オルコットさんの機体、『ブルー・ティアーズ』は『BT兵器』のデータをサンプリングするために開発された機体であるため、試作機という意味合いが強いみたいです」

「『BT兵器』？」

「簡単に言えばオールレンジ攻撃が可能な小型飛翔体、らしいです。私も文章のみではそこまでしか分かりませんが・・・この機体の武装はそこまで多くありません。主武装のレーザーライフルと近接用のショートブレード、それに今言った『BT兵器』。これが相手の全武装です」

「なるほど。ということは中遠距離タイプだな」

「篝さんの言うとおり。近接武器はショートブレードのみということとは完全に射撃メインの機体ということ。」

「はい。なので一夏さんはこのまま箒さんとの剣道で基礎を磨いて、接近戦主体で行ってもらうのが一番良いかと。問題はどんな動きをするか分からない『BT兵器』の存在ですが・・・これは私が可能な限り引き出します。私が負けたとしてもオルコットさんの手の内は全て晒して見せますよ」

「そ、そうか・・・」

「なので私が負けたときは箒さんが一夏さんと対策を考えてくださ
いね」

もちろん負ける気はありませんけど。

「随分一夏に肩入れするのだな・・・」

「へ？」

その声に画面から顔を上げると箒さんがこちらをジト目で見ていました。

擬音で現せばそれこそ「ジィ〜」ってというのが一番合いますけど・
・・どうやら誤解を生んでいるようです。

私は一夏さんを恋愛感情で見てるわけじゃないんですよ？

「あの人はこの学園で最初の友達ですから。それにもし箒さんが一夏さんの立場でも私は同じことをしているでしょう」

「う、む・・・そうか、そうなのだな。うむ、それならいい。うん」

それを聞いて篝さんは少し頬を染めて何度も頷いています。

ああ、何かこの人すごい可愛いんですけど・・・

いえ、その気はないんですけどなんていうか、可愛くありませんか？私だけですか？そうですか・・・

「まあ私も負ける気はないので私の対策までは一緒に考えたりはしませんけどね」

「む・・・」

途端に少し厳しい目つきでこちらを睨んできたんですけど・・・さすがにさっきのを見た後だと全然怖くないと言つかむしろもつと可愛いに見えると言つか・・・

無性にそのポニーテールを引っ張りたくなりますね。私もサイドテールですからやったらやり返されるのが目に見えているのでやりませんけど。

「では今言ったことは一夏さんに伝えておいてくださいね？」

「うん？カルラも一緒にいるんだから言えればいいじゃないか」

「何言ってるんですか。出来る女をアピールするチャンスですよ？」

「う／＼うるさい！余計なお世話だ！」

ああ、やっぱり可愛い！

それからさらに一時間ほど、時間としては正午ほどになるまで――夏さんには基礎の基礎を教えます。そろそろ時間ですね。

「ではこれくらいで終わりにしましょう」

『え？もう？』

「前に行った通り変な癖がつくと大変ですし、そろそろ次の人の使う時間です」

『そうか、分かった』

午後からは箒さんが剣道の稽古をつけるというが私は用事があると遠慮しておいた。箒さんは良くも悪くも感情の起伏が激しい。二人きりで稽古できるということで今は嬉しそうな顔をしていた。

次の日も同じ内容を行うようにと箒さんには伝えておいた。基礎訓練は繰り返しが大事だ。特に一夏さんはまだ初心者。とにかく経験が足りない。無茶をさせるよりは基礎だ。

それに応用は基礎が出来ていれば自分で考えることが出来る。日曜日も一夏さんは私に見て欲しいと言ってきましたが丁重にお断り

しました。

日本の都都逸曰く、『人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死に
じまえ』

篤さんという馬に私もまだまだ殺されたくありません。

ちなみに用事と言うのは本当。

何せ・・・一夏さんたちの後に使うのは私なんですから。

「セツト・・・」

周囲から複数の模擬戦用の空中攻撃目標が浮いているのがピット
から確認できる。

「オープン！」

ピットから飛び出すと同時に思った。

私かオルコットさんが勝つかは分からないが、できれば一夏さん
とは戦いたくないなあ・・・なんて考えは甘いのだろうか・・・と。

1 - 6 (後書き)

はい、というわけで連投7回目。祝日なのでお昼更新です。

今回結構オリ設定2つあります。突っ込まれる前に原作にないその部分を上げておきます。

1、一夏の訓練機使用 原作では訓練機を使用しているのは最初の一回だけですが起動できたので出来るんじゃないかなあと。そもできないとこの話が成り立たないので一夏さんにはがんばっていただきましたw

2、情報は文章のみの云々かんぬん この件、原作には全くない作者のオリジナルです。映像あつたらもう完全に対策できちゃうし、ってことで文章のみの開示というわけでえす。

今回以降、文章的なオリジナル要素が出てきたらその都度説明入れます。

次回、ようやく代表決定戦ですね。ちょい長めでしかも初めての試みなので生暖かい目でよろしくお願いします。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております！
では ノシ

1 - 7 (前書き)

連続投稿 8 回目！

月曜日、第3アリーナ

織斑先生と山田先生に案内されて私は一夏さん、箒さんと一緒に第3アリーナのオルコットさんと反対側のAピットにいた。箒さんは一緒に教えていたということでセコンド扱いで一緒にいる。

「カストはこの後すぐオルコットとの模擬戦がある。お前のISはその間に届くと思われる。時間がないからフォーマットとセッティングは素早く済ませるように」

「あ、ああ」

「一夏さん！返事返事！」

「へ？あ！は、はい！」

「ふん」

私の言葉に慌てて一夏さんが言葉を正す。もう少しでまたツールハンマーを貰うところでしたね。

「では私は行きます」

「む？まだ早いぞ？」

「いえ、一夏さんの機体を見るのは終わった後の楽しみに取っておきたいので」

「ふ、そうか」

遠回しの勝利宣言に織斑先生が笑う。そのまま山田先生と共に奥に歩いていきました。多分奥にある管制室に行ったのでしょう。

私は鎖に通して首に下げている指輪を握りこんだ。一瞬の沈黙の後、専用機『デザート・ホーク・改』が私の体を包む。

このISになったのはつい最近・・・それでも使っているコアは同じなので温もりに包まれる感じがする。

オーストラリアの砂漠の色に近いサンドブラウンの装甲。この色は故郷を思い出させてくれる。

背中には大きな前進翼、足の部分にもカナードが付いている。特徴的な大きな手甲、所々に現れる大きな飾りは左右対称で作られていてバランスを悪くしないように意匠されている。

基本装備の左手の盾が一瞬遅れて手元にあらわれる。ISの半分ほどを覆う大きな楕円形の盾で、現れる瞬間は注意しないと重さで体をそちらに引っ張られてしまう。

さらにその後左右後ろの腰の部分にそれぞれの武装が配置される。

「常備装備とは珍しい・・・」

第さんの呟きも最もだ。『デザート・ホーク・改』は武装を量子

化できるISとしては珍しくいくつかの装備を基本武装として常備してある。その常備装備も量子化出来るのだけど他の装備は常備装備としては採用できないのでそのままにしておくほうが楽だ。

「これが、カルラの専用機・・・なんかかつこいいな！」

「そうですか？ありがとうございます」

お世辞でも何でもない直線の言葉を一夏さんがかけてくる。こっぴどい所に篤さんは惹かれたんでしょうか？

「では、行きます」

「ああ、頑張つてな！」

「勝ったら貴方と戦つんですよ？」

「あ、そうか・・・うん、でも俺はカルラに勝って欲しいな！」

「そ、そうですか・・・」

ですからなんでもこう／＼

・・・もついいです。ほら、また篤さんが機嫌悪そうになるし・・・

「では・・・行きます!」

カタパルトに両足を固定し力を入れた瞬間、カタパルトが押し出されてアリーナに飛び出す。軽くバレルロールを行いながら中空に停止した。

そのすぐ後にオルコットさんが反対側のピットから発進し私の少し上の位置で停止する。

鮮やかな青い機体。『ブルー・ティアーズ』だ。その背後には特徴的な4つのフィンアーマーを備えている。

「あら、ISにそのような大きな盾なんて、不恰好ではありませんこと? オーストラリアの技術者を疑いますね」

オルコットさんの見下すような声が開放通信で聞こえてくる。会った瞬間に挑発ですか。いえ、でも相手の冷静な判断力を失わせると言っ点で戦いの前の挑発は有効です。

・・・この人の場合は素でしょうけど。

「放っておいてください」

「まあいいですわ。どうせあの男性では勝負になりませんもの」

「そうなるかどうかはわかりませんがね」

「あら、随分買っていますのね。まあ、格は違うとはいえ貴方も代表候補生ですもの。これが実質クラス代表決定戦。少しは粘ってくださいませ！」

「そちらこそね！」

オルコットさんが手に持っているのは2mを超える長大なライフル。

データ検索、67口径特殊レーザーライフル『スターライトmk？』と該当

ISのハイパーセンサーが瞬時にデータを見つけて教えてくれる。レーザーライフルですか。実用化はされている中ではかなり大きな口径のもですね。

そう考えて右腰のスカートから18mm突撃銃『ラングリスII』を取り外して構える。銃の状態は良し、マガジンも装填済みで安全装置も解除しており、いつでも撃てる。

『それでは、始めてください』

開始の合図とほぼ同時に私とオルコットさんが射撃体勢に移行した。

「行きますわよ！」

瞬間オルコットさんが一瞬早くレーザーライフルのトリガーを引くのが確認できた。

警告、敵IS射撃体勢に移行を確認。初弾エネルギー装填

ISの警告が出る前に回避行動を行い、今までいた場所をレーザーが通り過ぎる。相当な早撃ちだ。さらに精度も高い。

次弾の装填も・・・はい！

すんでのところでレーザーが右肩を掠った！

だが精度が高いということは狙いが分かるということだ。このくらいの射撃をする人なら本国にも何人かいる。

当然のように避けて接近しながら『ラングリスII』のトリガーを引く。激しい銃声と共に弾丸の雨がオルコットさんに襲い掛かります。

反動はあるのだけど、そのほとんどは学習能力によってIS自体が相殺してくれている。

面での制圧が得意なだけあって威力と命中率は低いが、その分避ける場所が少ない。オルコットさんは回避行動を取ってはいるが少

しずつ確実にその装甲とシールドエネルギーを削る。

ISはシールドエネルギーによるバリアーや『絶対防御』などによつてあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。

ではどうやって勝負を付けるのか。そのシールドエネルギーの削りあいだ。シールドエネルギーはバリアーを貫通した時、もしくは『絶対防御』が発動したときに減る。そしてそのシールドエネルギーは数値化されていて、0になると負けになる。

ちなみに『絶対防御』が発動したときは極端にシールドエネルギーを消費する。発動するのは装甲のない肌の直接露出した部分、つまりは操縦者の命に関わる部分に攻撃が当たった時だ。

あちらも回避しながらレーザーを撃つて来るが如何せん2m大の銃は取り回しが悪すぎる。遠距離戦なら取り付けられているスコープで高い命中率と共に一方的に攻撃できるのだろうが、この距離だと銃口の向く位置から大体の射撃タイミングが分かってしまう。折角の特性と早撃ちも台無しだ。

それに加えてこの『ラングリスニ』による弾幕はオルコットさんにとつて鬱陶しいことこの上ないはず。

IS同士の戦いはかなりのところ相性で左右される。

今回はこちらが有利だ。逆に言えば近接戦闘主体の『打鉄』のよきな相手ならば『ブルー・ティーズ』とオルコットさんの射撃の餌食になるでしょう。

「くー！チョコマカ鬱陶しいですわね！」

オルコットさんがなんとか距離を取ろうと一気に急上昇を行う。

「うっ！」

追おうとして、止めざるを得なかった。

太陽を背に取った見事な位置取りだ。そのせいでセンサーでは捉えているのに姿が視認できない。

流石にこれは追撃を行うことが出来ず、センサーで捉えている位置に『ラングリス二』を射撃しながらこちらも距離を取る。

狙いが反れたのをチャンスと見てレーザーの雨が降り注いきた。ISの警告に左手の盾を頭上に掲げて防ぎつつなんとか避け続ける。盾を正面に持ち替えながらレーザーの来る方向から相手の位置を予測し一気に急上昇。多少シールドエネルギーが削られるがこの程度はどうってことない。

「この私の射撃をこうも読むとは、中々やりますわね！」

「それは」丁寧にも！」

ほぼ同じ高さまで上昇すると、距離を取りながらレーザーを射撃してくるオルコットさんが話しかけてきた。まだ距離がある。

こちらの進路を妨害するように撃ってくるため何らかの時間稼ぎの可能性もある。こちらにも『ラングリス二』を再び撃ち返すが先手

を取られている以上回避優先にならざるを得ない。

なんと言つてもレーザー兵器だ。一撃の威力は『ラングリスニ』の比ではないはず。直撃だけは避けたいところです。

「ですがそれもここまで。そろそろ本気でいきますわよ！」

オルコットさんがそう言った途端に『ブルー・ティアーズ』背部のフィンアーマーが外れ、小型機動兵器として射出された！

「な！？」

データ検索、特殊BT兵器『ブルー・ティアーズ』と該当

これが・・・BT兵器！？

慌てて回避機動を取る。4つのビットはそれぞれが不規則な機動を描き上下左右から私を狙い撃ってくる。

流石に4方向からの攻撃は避けるのが難しい。警告と共に回避行動を取るが・・・

「くっ！」

背中からモロに一発くらってしまった。背後の装甲が吹き飛び、

衝撃で私自身も前に押し出される。シールドエネルギーの消費は装甲に当たったおかげで微々たるものだけどこれを続けられると消耗するのはこちらだけだ。

それに打開策を考える前にこのレーザーの嵐を何とかしないと！

攻撃範囲を限定させるために高度を下げてアリーナの地面ストレスを飛翔する。

「さあ踊りなさい！私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

「ダンスは苦手なんですけど・・・ね！」

盾で正面から来たレーザーを受け止める。その瞬間他の3つは既に私の視界の外から狙いをつけているのだから大したものです。

代表候補生の名前は伊達じゃないってことですね！

先ほどのレーザーライフルよりも口径が低いおかげで威力は低いが、この物量は正直レーザーライフルを避け続けるよりもきつい！

更に強度も中々のもののように『ラングリスニ』が当たっても有効射程の外から撃ってきているから弾き飛ばすだけで破壊できない。

なら武装を変えるしかない。

『ラングリスニ』を右腰に戻しながら、左腰の24mm対空散弾銃『ラングリスト』を取り出す。

射程は短いけど近距離広範囲に弾をばら撒くこれなら・・・

後はチャンスだけ・・・！

1・7（後書き）

遂に來ました初のIS戦闘！

VSセシリア・オルコットです！

えー、お気づきの通り前編後編に分けての掲載です。

そこで見てくださっている皆様に質問なんですけれど・・・
これどうでしょう？

いえ、結構分割するか悩んだんですけど、やっぱり見るのは読者の皆様方であって自分の一存で決めるべきではないのかな？と思いつつ、でも自分の作品だし色々試してみたいなっていうのもあり・・・
というわけで質問なのですけどこれからの話、こういう風に長くなったら分割したほうがいいでしょうか？それとも長くなっても分割しないほうがいいのでしょうか？

感想書くのが恥ずかしいと思っている人はメッセでも構いません！
たくさん意見を参考にしたいのでよろしくお願いします！

「書くの面倒だな」ってそんな人のために選択肢

1、続きが気になる分割でいいよ

2、続きが気になってしょうがないから長くなってもいいよ

数字だけ送ってもらっても構いません！

ちなみにその答え次第で次の話を分割するかどうか決めるつもり

です。

ちなみにこの土日はお昼更新の予定ですので分割、連続は次の話の前、日曜日の朝までにお願いします。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価もお待ちしてます！よろしくお願いします。

では、明日のVSセシリア決着編でお会いしましょう！

1 - 8 (前書き)

連続投稿9回目！

10分は避け続けているだろうか。既にシールドエネルギーも半分になってしまっていて、装甲もかなりボロボロ。

でもそのお陰でまだ予測の範囲を過ぎないが、大分『ブルー・テアーズ』の特徴が分かってきた。

まずこのビット自体はオルコットさんが操って指示を出していてオートマチックでの攻撃ではない。

そして反応の一番鈍い部分をかなりの確立で狙ってくる。上手くすれば誘導することも可能だろう。

最後に最大の特徴にして弱点、本人が動けないということだ。理由は分からないけど恐らく相当の集中力を要するのだろう。その証拠にビットが攻撃している間はレーザーライフルの射撃がない。その逆もそうだ。オルコットさんが射撃をしている間はビットの攻撃がこない。

ならば・・・

ビットの3つが視界の中に入ってレーザーを乱射してくるがこれは本命ではない。あたればいいという程度、誘導だ。ならその誘導に乗るまで！

迎撃する振りをして一発だけ『ラングニスト』を撃ち込む。当然のようにビットが射程外に逃げ去るので深追いするように体を前めりにする。

その瞬間左手に6連発回転式グレネードランチャー『フェンリス』

をオープンする。

「貰いましたわ！」

「こちらが・・・ですけどね！」

既に装甲の無い背中を狙ってくるのは読めています。

『フェンリス』を地面に向けると同時にISの制御を変更する！

反動制御を解除、以後手動に移行します

タイミングを見計らって足のブースターを吹かすと同時に『フェンリス』のトリガーを引いた。

『フェンリス』はこのISに搭載されている武装の中で最も反動が大きい。一般の人が撃てばそれこそ腕が吹き飛びほどの反動をIS自身の制御で無効にしている。

つまり反動を最低限にすれば・・・

ドオン！

「ぐ・・・！」

左腕が吹き飛びそうな反動と共に『フェンリス』から放たれたグ

レネードが地面に炸裂。その衝撃と反動で体が反転し浮き上がるのを感じる。『フェンリス』は私の手が反動に耐え切れず思わず離れてしまったけど今は拾う余裕がない！

それと同時に足のブースターが連動して今までと真逆の方向、後方のビットに向かって飛んだ。

慣性を一気に逆転させたため、気を失いそうになるがISのブラツクアウト防止システムがそれを防いでくれる。

直ぐ真下をレーザーが通り抜け、さらに後進をかけて足元にビットを捉える。それ目掛けて抜き放った『ランゲニスト』を撃ち込んだ。

予想通り蜂の巣になったビットが一瞬後に爆散する。

「な!？」

オルコットさんが驚きの声を上げる。その瞬間、一瞬だがビットが全て止まったのを確認。

予想通りビットはオルコットさん自体が操っているようですね。

またも3つのビットが攻撃仕掛けてくるが先ほどの攻撃を危険視しているのか遠距離からの射撃で避けるのは容易い。左側の攻撃は全て盾で受け止めながらオルコットさん本人を見る。太陽にも大分なれた。

さて、特徴も分かったところでそろそろこちらの反撃といかせて貰います！

盾を真上、垂直にオルコットさんに向けて構える。

「何をする気が知りませんが！」

私の行動に、オルコットさんが一気に残りのビットが距離を詰めてくるがそんなことはどうでもいい。

この『アイギウス』はただの盾ではないんですから！

盾の内側が弾けると同時に何かが射出されて空中で炸裂する。

「え、煙幕！？」

そう、煙幕。この盾の中には一発きりですが広範囲に煙を展開する煙幕弾が内蔵されていて、一瞬にしてアリーナ全体が真っ白な濃い煙に包まる。

「し、しかし煙幕なんて・・・え！？」

どうやらもう一つ気づいたようだ。おそらくハイパーセンサーが正式に動いていないのでしょう。

『アイギウス』にはもう一種類の弾丸が内蔵されている。

ジャミングだ。

空中待機型の小型ジャミング兵器を相手の周りに3つ撃ち出す事で、ISのハイパーセンサーをも狂わす電磁波をで30秒発生させる。ただしジャミングが強力すぎるため範囲内にいると自身のハイパーセンサーも使えなくなる上、小型とはいえ10cm大のジャミング兵器は目視で見ればオルコットさん相手ならすぐに撃墜されてしまう。

けど、煙幕と組み合わせることでその弱点を補い、最大級の妨害を行うことが出来る。

この場で役に立つのは熱探知センサーと目視のみ！

右手の『ラングニスト』を左腰に戻し、背腰部のエネルギーソード『レヴァテイン』を抜刀、エネルギーを展開する。連続展開可能な時間は1分・・・その間に決める！

煙幕の中を旋回して場所を特定させないようにさせながら、熱探知センサーに映っているオルコットさんに真後ろから突進する。

『レヴァテイン』のエネルギーを展開。真っ赤なエネルギー刃が実体剣の周囲に現れると同時に煙幕を飛び出す。

瞬間、狙いに気づいたのかオルコットさんがこちらを捉えた！

「射撃型の私にこんな方法で近接戦闘を挑むなんて！」

オルコットさんは驚きながらも私が振り下ろした『レヴァテイン』をギリギリのところで回避してレーザーライフルを撃ってくる。剣を振ったせいで回避してもレーザーが左肩を掠ってしまい装甲が削られますが、ここで怯むとビットが戻ってくる。わざわざビットを相手にする必要はない。

相手に使わせる隙を与えなければ！

距離を取ろうとするオルコットさんに離されないように肉薄する。距離を取られれば圧倒的にこちらが不利だ。喰らいつけるだけ喰らいつく！

「はあ！」

気合の声と共に振り下ろした剣はまたも避けられて距離を少し開けられる。が、撃ってくるライフルを全て盾で防ぎ、また接近して剣を振るう。

この繰り返しだ。

本来のIS同士の戦闘相性なら退きながらりながら撃てるオルコットさんの方が有利なのかもしれないが、私の場合は違う。IS半分を覆う大きさの『アイギウス』は、この距離では相手から見れば壁も同じ。オルコットさんのライフルの射撃を全て遮ってくれる。私は熱探知センサーの示す位置に突っ込んで剣を振るうだけ。

完全に追う側と追われる側の立場が逆転。

でもジャミングも後10秒もたない。そろそろ戦略を変えないと煙幕で誤魔化すという手段は通じない。

この武装はあまり使いたくなかったんですけど・・・

続けて斬りかかりながら再び退いたオルコットさんに向けて左手の盾を投げつけた。

「そ・・・んな程度！舐めないでくださいます！」

当然のように『アイギウス』がライフルに撃たれて弾き飛ばされる。

「盾を捨てるなんて、勝負を捨てましたわね！」

「セツト・・・」

素早くこちらの姿を視認したオルコットさんがライフルを構えた。それを見計らって私は・・・

「オープン！」

言葉と共に左腕を斜め上に振るい、

ヒュン！

風を切る音と共にオルコットさんの手からライフルを弾き飛ばした。

「え！？」

混乱していてもそこは流石代表候補生。瞬間的にビットをこちらに飛ばしてくるのは見事としか言いようがない。でも……

「今までとは違っんです！」

振りぬいた左手を振り下ろす。またも風を切る音と共にオルコットさんの左肩に『それ』が直撃した。

そのまま『それ』がオルコットさんの左腕を絡め取る。

「ぐ！こ、これは……鞭！？」

叩きつけられた衝撃に苦痛の声を上げながらオルコットさんが『それ』を視認したようです。

私の左腕から……正確には手甲の左手首の内側から鞭が伸びている。

仕込み鞭『グレイプニエル』。普段は手甲の内側に収納されている。

る超弾性鋼の鞭でこの機体の最大の隠し武器。

「こ、こんなもの!」

「終わりですよ」

慌ててビットで鞭を焼き切ろうとするオルコットさんを鞭を収納することで一気に引き付ける。

これがこの『グレイプニエル』の特徴。弾き、叩きつけ、絡め取り、引き付ける。

そのままオルコットさんをゼロ距離まで引き付ける。こうすればビットの攻撃にあわせてオルコットさんをそちらに向けるだけで攻撃を防げる。しかも右手には先ほどから展開し、すでにに振り上げられた『レヴァティン』。展開できる時間は後10秒ほどだけこれだ……!

その瞬間オルコットさんの顔が……笑った!?

「お生憎様!『ブルー・ティアーズ』は……」

この状態で笑う……ということは!

「6基ありましてよ!」

「でしょうね！」

腰部の突起が外れて、動く！

その瞬間に私はその二つを両足で踏みつけた。

踏みつけただけでは弾くだけで破壊は出来ないし時間稼ぎにしかならないでしょうがこの『デザート・ホーク・改』にはまだ隠し武器がある。

仕込み短剣『スレイヴニル』。足と膝の先端に取り付けられた小型の实体短剣で、足に付いているものは角度を180度まで、膝に付いているものは90度まで変更できる。

そして今、足の『スレイヴニル』は稼動限界ぎりぎりの真下に90度。

『ブルー・ティアーズ』は両足の『スレイヴニル』に貫かれて煙を上げていた。どう考えても再起不能。

正面を見るとオルコットさんの顔があった。その顔は正に信じられないといった表情だ。

「く、『イン』・・・！」

オルコットさんが左手を突き出して何かの名前を叫ぼうとする。多分近接用のショートブレードでしょうけどこの距離でそれは致命的です！

「失礼します！」

「きゃあああああああつ！！！！？」

声と共に『レヴァテイン』を唐竹割に振り下ろす。

『レヴァテイン』を無防備な頭に振り下ろしたことにより絶対防御が発動。オルコットさんのシールドエネルギーがゼロになった。

ビーーーーー！！

『試合終了。勝者、カルラ・カスト』

試合終了の合図と共に勝利宣言が上がった。

『レヴァテイン』を解除し『グレイプニエル』の拘束を解き、更にアリーナに投げ捨てた『フェンリス』も回収します。

次は一夏さんとなので私は必然的にBピットへ行かなければなりません。

そして当然私とオルコットさんは同じピットへ入ります。

「すみません、あんな卑怯な勝ち方をして・・・」

「え？」

ピットでISを解除して初めて言った言葉にオルコットさんはすごい驚いていたようだったが、隠し持っていた武器で戦ったのだ。データでは分かっていたとしてもフェアではない。

実際真剣勝負なのだから卑怯も何もないのですがお詫びくらいしないと私の心が痛む。所謂偽善、エゴと言ったものと分かっているんですけどね・・・

「・・・・・・・・いいえ、私の負けを認めますわ」

「え？」

「貴方は貴方のISの特性を生かして戦いましたわ。それで負けたのは私の慢心以外の何者でもありません。貴方の祖国を侮辱したと、お詫びいたしますわ。許してくださいます？」

何か嫌味を言ってくるかと身構えていた私は毒気を完全に抜かれてしまった。

「そ、そんな。オルコットさん・・・」

「セシリア、でよろしいですね。また、試合していただけます？」

「あ、は、はい！もちろん！」

「今度は負けませんわよ！カストさん！」

「私もカルラで結構ですよ。セシリアさん」

セシリアさんが差し出してきた右手を、私はそう言いながら両手で握り返していた。

1 - 8 (後書き)

V S セシリア 決着編、いかがでしたでしょうか！

なんかセシリアすごい強い気がしますけど普通このくらいは強くてもおかしくないんじゃないかなーって思ってた書き込みでした。

しかしセシリアの機体見たとき種デスのストフリ思い出したのは自分だけじゃないはず！

え？セシリアフラグ？叩き折ってやんよ・・・と思っただんですけどちゃんと立たせますよ。オルコツ党員は安心してください。

アンケートはまだまだ待っています。とりあえず明日はV S 一夏戦。さあ、どうなる！？

一夏戦は感覚が分からない人のために試して一気に全部上げます。それを見て判断してもらえれば嬉しいです。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしく願います。感想と評価をもらえると作者のテンションが発狂します！

ではまた ノシ

お詫び

設定を見てももらえれば分かるのですが、『デザート・フォックス』が『デザート・ウルフ』になっています。

これはシャルの武器の名前に既に『デザート・フォックス』があったためであり、完全に作者の設定ミスです。申し訳ありませんでした。

1 - 9 (前書き)

連続投稿10回目！

セシリアさんは先に応援席に戻っていた。『いつまでもいて集中を乱してしまつてはいけませんから』ということらしい。

セシリアさんは案外優しい人なんじゃないかって思う。ただ最初がきついただけなのだ。

つまりは篤さんと一緒だ。身内には優しいんだと思う。多分・・・

やっぱり友達が増えたことはうれしい。その人の知らない一面を見れるのも友達の特権だ。

一応IS同士が映像を共有出来るコードは交換しておいたので一夏さんの行動を私の視点で見ることが出来ます。

私だけ見れてセシリアさんだけ見れないのは不公平ですしね。

次の試合は30分後。

30分あれば疲れた体も使った集中力、精神力も何とかギリギリ回復することが出来るはず。

シャワーを浴びるために控え室に一度戻る。下着さえも乱暴に脱ぎ捨ててシャワー室に入ると勢いよくお湯を出した。

ISを使った後のこれは一種の癖みたいなもの。親にもはしたないから直しなさいと散々言われたけどこればかりは直る気がしないんですよね・・・

10分ぐらいは浴びていただろうか。お湯を止めて体をタオルで包む。脱ぎ散らかした下着とISスーツを一度回収します。

この面倒な作業も私にとって必要な作業ですのでやっぱり直りませんね。

髪を乾かしてISスーツを再び着込み、髪をいつも通り右側に結ぶと30分ピツタリに再びピットに戻ることが出来た。

再びIS『デザート・ホーク・改』を起動させる。先ほどの傷は修理するまで治らないので所々ボロボロだけでしょうがない。

それに本当は一夏さんと戦う理由が一切ない……いえ、ありませんね。企業の人から可能ならば男性ISパイロットのデータを取ってきてくれて言われてました。

そんなので人と争うとかはしたくないんですけど……

「後一回……お願いね」

アリーナに飛び出す。先ほどと同じようにバレルロールを行いながらアリーナの中央に停止。今回はホルスターの武器いざというきのために温存することに決めて左手の盾をクローズ。両手持ちの10,5mm回転式機関銃『フローキ』をオープンする。実弾系統は総じて弾丸を再装填する必要があるため『ラングリス二』『ラングニスト』共々マガジンの残弾が心もとないというのも理由のひとつだ。

反対側のピットから一夏さんが発進してきた。少し戸惑いながらも私と同じ高さまで上がってくる。

少し灰色がかった白色、それでいてスマートな見事な機体。太陽の光をあびたそれは更に白く見える。

「げ！なんだそのガトリング！さっきは使ってなかったよな！？」

「ええ、あれだけでは芸が少ないので、今回はこれでお相手します。ちなみにこれの正式名称はミニガンですよ？」

「どこがミニだどこがぁ！！そっちのほうが強そうなんですけど！？」

「そうですね、制圧力がありますよ？」

「そういえばさっきの最後、すごかったなあ。あんな戦い方もあるのかって関心しちゃったよ」

そこで尻込みするのではなくて関心するというのが一夏さんらしいですね。

その時、高速でデータ検索をしていたハイパーセンサーが一夏さんの機体の情報を映し出してくれた。

データ検索完了、機体該当データ無し。 unknownと認定

unknown？ということはこの場が初のお披露目ということですか。光栄ですね。

「ありがとうございます。でも、手加減はしませんよ？」

「へ、当たり前だ！」

『それでは始めてください!』

声が試合開始を告げる。

「行きます!」

『フローキ』を構えて作動させる。甲高い機械音と共に6つある銃身が高速回転を始め、たちまち『ラングリスニ』よりも激しい弾幕を形成した。

「うおおおおおお!？」

一夏さんが機体を不規則に動かしながら回避する。正しい回避方法だ。機関銃のような取り回しの悪い大型の射撃武器相手は常に移動することで狙いをつけさせない。教えた基礎をしっかりと生かしている。

それでも時々当たっているのはまだあの機体に慣れていないからだろうか。それにしても・・・

「速い・・・!」

これだけ弾幕を張っても当たっているのは10発に1発程、しかも掠っている程度のためほとんどシールドエネルギーを削れていない。

いくら『ラングリスニ』に比べて命中力に劣るとはいえ面での制圧力は『フローキ』の方が上のはずなのに！

『ラングリスニ』と『ラングニスト』を使いすぎたのはやっぱり失敗だったみたいですね。でもセリアさんは手加減できる相手ではありませんでしたし仕方ありません。今ある武装で対応するのも戦闘というものですしね！

いざというときのために『フローキ』をクローズ、70mmグレネードランチャー付22mmアサルトライフル『ゲリユ』をオープンする。

中遠距離用の武装ですけど今は無駄に弾丸を使うよりスコープのついているこっちのほうが命中率が高いだろう。

スコープで狙いをつけながらトリガーを引く、左肩の装甲に直撃し剥ぎ取った。一夏さんがその衝撃で体制を崩したところを更に撃ち込む。

でもあれでは装甲を弾き飛ばしただけでシールドエネルギーは大して削れていないはずだ。

しかしここまで何も撃つてこないということは近接用？それとも気を伺っている？どちらにしろ今は攻撃のチャンスだ。スコープを覗きながらトリガーを引き続ける。

それでもたまに反応しきれないで当たったり掠ったりしている。これならこのまま削りきることも・・・

「素手でやるよりはいいか！」

一夏さんが吹っ切れたように初めて武器をオープンする。
実体剣？

データ検索、武装該当データ無し

予想してましたけど怖いですね。どんな装備が全く分からないというのは。

あれがああ機体の装備。あれだけなら相当な容量を残しているはず・・・それとも他は使えないのだろうか？

何にせよ接近を許すわけには行かないですね。

「うおおおおおおおおおおおお！」

「やっぱり・・・速い！」

一夏さんがあつという間に『ゲリユ』の弾丸の雨を掻い潜って接近してくる。振り下ろされた剣を回避して『ゲリユ』を撃つが、ダメージをもとめず接近してくるのは最早勇気というより無謀に近い。

しかし・・・この突進力は予想以上に！？

「くっ！」

『アイギウス』のオープンが間に合わない！

咄嗟の判断で『ゲリユ』を盾代わりに使ってしまう。

剣の勢いに私の手から『ゲリユ』が弾き飛ばされる。

「もらった！」

「させません！」

ここがチャンスとばかりに一夏さんが再度剣を振りかざしてきましたが、ここまで時間が稼げれば大丈夫。

間に合っていないかった『アイギウス』がオープン、取り出して振りがずす。

ガン！

金属通しがぶつかる音がして一夏さんに一気に押される。が、こちらもブースターを吹かしてなんとか持ちこたえた。

「くそ！防がれた！」

「私も、そう簡単にはやられませんよ！」

私が銃を持っていないため一夏さんが一度距離を取る。『ゲリユ』は弾き飛ばされてしまったため他の銃を使うしかない。

でもこの距離では銃を使うわけにはいかない。使う前に懐に入られる。『グレイプニエル』も同じ理由で除外。剣での戦いでは一夏さんが有利でしょう。

となると・・・

「では、私も接近戦でお相手しましょう！」

『アイギウス』をクローズしつつ右手を掲げて棒状の武装をオーブンする。何度か頭の上で振り回すと一夏さんに向けて構え直した。

「なんだ？ 槍も使えるのか？」

「当然です！」

言ってブースターを一気に吹かす。そもそもこのIS『デザート・ホーク・改』はマルチロールな機体。一夏さんの機体ほどではないけど接近戦もこなせる機動性は十分にある。

右手を伸ばすように槍を一気に突き出して間合いの距離を稼ぐ。

剣とは違う圧倒的な間合い。これが槍の特性だ。更にブースター

との突進力を加えて相手への一撃離脱を目的としたこの方法は槍とは最も相性がいい戦法。

そしてこの槍、ヒートランス『ブリュナーク』は槍の先端から強烈な熱量を噴射することにより融解による貫通能力を持つ。絶対防御機能によりその溶解能力は人体への影響はないも同然だけどその熱量はなくなっていない。

「熱っ！なんだこれ！？」

剣で反らしたせいで近距離を槍が通過した一夏さんが驚きの声を上げた。

「ヒートランスです！上手く避けないと火傷しますよ！」

もちろん嘘ですがこういう脅しも時に有効なときもあります。明らかに大きく避けるようになって隙が大きくなった一夏さんに柄の部分を使って罅迫り合いに持ち込んだ。

「くっ！」

「ですから言っただけでしょう？貴方に不利にならなくても、私は貴方の機動をあらかじめ見ることが出来たおかげで、機体性能が違ってもある程度の行動予想が出来るんです！」

「それは俺が言い出したことだ！俺はカルラに教えてもらって良か

ったと思ってる！」

「……！まだそんなことを！」

両手首につけられた手甲が火を噴いた。

10mm2連装ショットガン『ドラウニブル』。『デザート・ホーク・改』の隠し武器の一つ。こういう罅迫り合いの時くらいしか使えないほど射程は短いが意表をつくのには十分だ。

「なに！？」

案の定怯んだ一夏さんの空いた腹部を『ブリユナーク』の石突の部分で思い切り弾き飛ばす。一夏さんは受け流しきれずに地面に激突して砂埃を巻き上げた。

『ブリユナーク』をクローズして『フローキ』を取り出す。

「これで……！」

再び甲高い回転音と共に『フローキ』から弾丸が吐き出された。回避する間もないほどの弾丸の雨が一夏さんを襲う。

あっという間に外れた弾丸で砂煙の煙幕が出来上がる。

手加減など出来ない。一夏さんはそれほどに強い。

……機体もそうだが一夏さん自身のIS操作が相当なものだ。初心者とは全く思えない。下手なISパイロットよりよほどの実力

だ。

なにより思い切りの良さが半端ではないのだ。普通初めての实战なら怯んだり萎縮したりするのだけれどそれが全くない。

正直一番やりにくいタイプです。

ガチンガチンガチンガチン！

『フローキ』が弾切れを起こしこれ以上は無理と伝えてくるまでトリガーは引きっぱなしだった。

『フローキ』をクローズして再び『ブリュナーク』をオープンし、構える。

一夏さんのいた部分は弾幕が起こした砂埃で全く見えない。

煙が晴れていく。『ブリュナーク』を構えなおして一夏さんが出てくるのを待つ。まだシールドエネルギーは残っているはず。でなければ試合終了の合図が出る。

油断は即負けにつながる。

煙が完全に晴れる。と・・・そこには先ほどのISとは形の違うISが立っていた。

「綺麗・・・」

場違いにも私はそう呟いていた。

機体は先ほどよりも鮮やかな白を基調とし、まるで西洋の騎士の鎧をイメージしたようなデザイン。いや、あれはそもそもあれが完成形態なのでしょう。今までがまだ未設定だったんですね。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

開放通信を通じて一夏さんの声が聞こえてきた。

「最適化・・・終わってなかったんですね？」

「いやあ・・・着いたのが結構ギリギリだったからな」

「はあ、分かりました。ここからが本気ということですね」

「ああ！行くぞ！」

距離があるため『ブリュナーク』を左手に持ち替え、右腰から『ラングリス二』を取り出して再び乱射。

完全に使い切るつもりで一夏さんに撃ち込む、が先ほどとはスピードの桁が違う！？

二番の目の面制圧力を誇る『ラングリス二』でも掠る気さえしないってというのはどれほどの機動性を誇っているんですか！？

あっという間に『ラングリス二』が弾切れとなったため右腰に戻し、『フェンリス』をオープン。

先ほどの実体剣がいつの間にか二つに別れ、間からエネルギー刃を形成している。おそらくあの武器もあれが本来の形なんだ。

近接信管稼動。全弾連続発射

ISのハイパーセンサーが素早く私の思考を読み取り『フェンリス』の設定を書き換える。

残弾5発のグレネードが『フェンリス』から発射され、名前の通り牙を剥いた。

「弾丸が・・・見える！」

一夏さんが言ったとおり弾丸の隙間を掻い潜る。その瞬間更に一夏さんのスピードが上がった！

最早グレネードの近接信管が追いついておらず、一夏さんが通り過ぎた後に爆発を起こしています。

『フェンリス』は弾を撃ちつくした瞬間にクローズ。『ブリュナーク』を再び両手で構えて迎撃の準備を整える。

「はあ！」

気合の声と共に右手で突き出した『ブリュナーク』が空を切る。いつの間にか懐に入り込んでいた一夏さんが剣を振り被っています。

「この距離なら槍は不利だな！」

「槍だけなら・・・ですけど！」

「げーやばー！」

左手には槍を突き出した瞬間引き抜いた左手の『ランゲニスト』。
あれを避けて懐に入られるくらいは想定済み！
この距離なら外れはない！

バン！

『ランゲニスト』が火を噴いた・・・が一夏さんが・・・いない！？

「まさか・・・あの距離で避け・・・！？」

「うおおおおおおおおお！」

声に反応して上を見上げると既に一夏さんが剣を上段に振りかぶっていた。ここまで来ていると槍を引き戻しても喰らうことは間違いない。

こうなったら一度もらうことを覚悟して返す刀で一夏さんに攻撃するしかない。

実際私のシールドエネルギーはほとんど減っていないのだしそれが一番効率がいい！

そう考えて少しでも避けようと体に入れた瞬間・・・

ビーーーーー

『試合終了。勝者、カルラ・カスト』

「え！？」「はい？」

二人揃って疑問の声を上げてしまった。

「俺・・・なんで負けたんだ？」

「ですね。あの剣のせいだとは思いますが」

未だに私も一夏さんも意味が分からず、よほど混乱していたのか私は同じ方のピットへ戻ってきてしまった。

気づいた時にはISも解除してしまったし今更反対側に戻るわけにもいかない。

ISを解除し終わったと同時に織斑先生がピットに入ってきた。その後ろから山田先生と篤さんも続いて姿を現しました。

「バリア無効化攻撃を使ったからだ。武器の特性を考えずに戦うからそうなる」

「バリア無効？」

あわわ、一夏さんと声が被ってしまった・・・恥ずかしい／／／それでも織斑先生が説明してくれてるのでそれに聞き入る。

「ああ。相手のバリアを切り裂いて、本体に直接ダメージを与える。雪片式型の特殊能力だ」

雪片式型・・・ああ、あの剣の名前ですね。そう納得する私を置いて織斑先生の説明は更に続く。

「これは、自分のシールドエネルギーを攻撃に転化する機能だ。私が、第一回モンドグロッソで優勝できたのも、この能力によるところが大い」

「なるほど、それで私を攻撃する前にシールドエネルギーが0になったんですね」

「その通りだ」

「諸刃の剣ってやつか」

「IS 同士の戦いはシールドエネルギーの 0 になったほうが負けになります。白式の攻撃は自分のシールドエネルギーを犠牲に相手にダメージを与える、織斑君の言うとおり諸刃の剣、というわけですね」

「つまり、お前の機体は攻撃特化の近接型というわけだ。よく訓練して使えるようにする必要がある。しっかり修練しておけよ」

「はあ・・・」

一夏さんがため息混じりに肩を落とした。まあ勝ったと思った瞬間負けてしまったのですから分からはないですけどね。

「IS は今待機状態ですけど、呼び出せばすぐに展開できます。ただ、ちゃんと規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね」

山田先生がそう言って IS 教則の本を一夏さんに手渡した。それを見て一夏さんはますます肩を落としてしまった。

「それでも、あの動きはすごかったです。あれで実戦が初めてなんて、誰も信じられませんか?」

「いや、カルラと箒との特訓のお陰だ。やっぱり二人の助けがあつ

「だからだよ」

「そ、そうですね」

「そうかそうか、私との稽古が役に立ったか。うん」

ですからその笑顔は正直反則的なんですけど／＼／
篤さんも表には出しませんが内心嬉しそうです。

「行くぞ一夏！今からまた特訓だ！」

「あ、ああ！ほらカルラも！」

「ええ！？私もですか！？」

「ああ、お礼もしてないしな」

「分かりました！分かりましたから手を引つ張るはやめてください
！」

篤さんに引つ張られる一夏さん、一夏さんに引つ張られる私とい
った奇妙な隊列が出来上がる。

騒がしいのは苦手なんですけど。でも・・・こういうのも良いか
もしれませんね。

月曜日、朝のSHRの席で山田先生がクラス代表の発表を行っていた。

「と、いうわけで！ クラス代表は織斑一夏くんに決まりました」

「……は？」

一夏さんがまったく意味が分からないという風に首を傾げている。

「はい、先生。質問です」

「はい、織斑君」

「何で負けた俺がクラス代表になっているんでしょう？」

「それはカストが辞退したからだ」

織斑先生が山田先生に代わって答えた。その瞬間一夏さんがものすごいスピードでこちらを振り向きました。

その顔にはなんで？と書いてあります。

とりあえず笑顔で手を振っておきましょう。

「なん・・・だと・・・!？」

「ホームルーム中は前を向かんか馬鹿者が」

その瞬間、一夏さんの頭にツール・ハンマーが落ちました。

「静かにしろ馬鹿者」

「い、いや千冬姉！ 何で俺が!!」

再び出席簿が一夏さんの頭に落ち、その痛みに一夏さんが悶え苦しんだ。

えっと・・・理由説明したほうがいいんでしょうか？

「弱者は勝者に従うのが常だ。弱肉強食。そんなに嫌ならお前が勝った上で辞退すればよかったんだ。昨日までの時点でお前はそれを怠った。つまりお前に決定だ。反論はないな。あっても受け付けないが」

説明する必要は無かったようですが・・・すごい理論ですね。道理で随分あっさりと辞退できたと思いました。

「よし、反論がないところでクラス代表は織斑一夏だ。全員異論はないな」

『はい!』

一夏さん以外の全員が一丸となって返事をしました。申し訳ないですけど私もクラス全体の意向を無視するわけにもいかないので一夏さん、諦めてください。

人間諦めが肝心です。

1 - 9 (後書き)

祝！連投10回目！

VS一夏からクラス代表決定まで一気にですけどいかがでしたでしょうか？

今回を見て前々回の結果出してもらえたら幸いです。よろしくお願いします。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

感想と評価をもらえると作者のテンションがヒヤッホイ！します！

初試み

オリ設定のコーナー

???「いつくんかつこよかったよねー！」

はい？

???「白式もいい具合に見せ場作ってくれたし、IS作ったかいがあるってもんだね！うんうん！」

あの、自己紹介のほうを・・・

???「なに？浸ってるのが分からないの？バカなの？死ぬの？」

ご、ごめんなしあ・・・

???「まあ話も進まないし・・・改めて、みんなのアイドル、篠

ノ之 束ちゃんです、ヴィヴィ！」

今回からオリ設定の説明を本編のキャラにお願いしようと思いましたが。

しばらく出番がない束さんをお呼びしてみたんですけど・・・

束「ま、一応あなたにはこれからいつくんの活躍を書いてもらうんだからすこーしだけなら付き合っただけよ。で？今日は何？」

主人公はカルラなんですけどね・・・

えっと、今回のISのオリジナル設定を説明していただきたいなあと・・・

束「おっけい任せて！今回は最初のIS同士の映像共有だね！これって正確に言うなら『視覚共有システム』のことなのだ！」

ほうほう

束「宇宙空間に限らず、相手が何してるか、言葉で伝えても相手の視点じゃないと分からないことってあるでしょ？だから相手の視点を共有することで、こっちの作業効率を更に上げるために作ったんだ！」

流石天才。簡単に作ってしまうところに憧れます

束「ははは！もっと褒めるがいい！まああなたに褒められても全然嬉しくないって言うかむしろうざいけど。話しかけるな」

ぐはぁ・・・

束「ちなみにこの『視点共有システム』は通常はコードでロックしてあるから相手から許可がないと使えなんだ。そりゃ相手の視点にばんばん入ってこれたら簡単に犯罪出来ちゃうしねー。そこら辺はこの天才の頭脳のコードだからそこら辺の技術者じゃ解除できないよ？」

おういえ・・・

束「そんじゃ、今日はここまで！ばっはーい！」

締めという言葉も取られた・・・

1 - 1 0 (前書き)

連続投稿 1 1 回目！

「織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

声と共にクラッカーが乱射された。夜の食堂を貸しきつてのクラス代表決定のお祝いだ。

食堂の一つのテーブルを陣取って席の中央には一夏さん、その左に篤さん、右側に私とセシリアさんという位置取りで座っている。他の人たちは周りに立っていたり近くの席に座ったりしてこちらを見ている。

席にはジュースやお菓子が持ち寄られて結構豪勢になっているのですが・・・始まる前からいくつか袋が空いているのはご愛嬌ということですかね？

「なあ二人とも、本当に俺がクラス代表でよかったのかなあ？」

一夏さんが私とセシリアさんに向けてまだ疑問の声を上げる。

「はい、元々私はそういうガラではありませんし・・・」

「私に勝ったカルラさんが良いと申すのでしたらそれで構いませんわ」

「そうそう！二人とも分かってるー」

周りのクラスメートから助けが入った。二人だけで説得できないと悟ったのだろう。

「折角男子がいるんだから、持ち上げないとね！」

「そうだよオリムー！好意は素直に受け取るものだよ」

訂正、面白がっているだけのようです。しかしオリムーって言ったのは・・・布仏さん？

なんとというネーミングセンスでしょう・・・前にやった日本のポケンというゲームで確かそんな名前のモンスターがいたような気が・・・

しかし私はなんと呼ばれているのか怖くなってしまいます。

「人気者だな、一夏」

「そう見えるか？」

篤さんは一夏さんが他の女性にチャホヤされているのが気に入らない様子です。でも一番座ってる距離が近いんですね。素直じゃないんですから。

その時、眩しいフラッシュが一夏さんを照らしました。

その方を見るとメガネを掛けた黄色のタイをつけた人が立っています。ということはこの人は二年生ですか。

「はいはい、新聞部です。私は新聞部副部長、二年のまゆずみ黛かおるこ薫子。以後よろしくね」

第一印象は活発で明るい人。友達に一人は欲しいタイプですね。

黛さんはそう言いながら手作りらしい名刺を私、セシリアさん、一夏さんに渡してきた。

ですからそういう風にやると・・・

ああ、また篝さんが睨んでいます・・・もう止めてください・・・

「で、早速なんだけど！写真を一枚！あ、セシリアちゃんとカルラちゃんも一緒にいいかな？」

「わ、私もですか？」

「注目の専用機持ち二人だからね！ほら、カルラさんは一夏君の左側に！」

「は、はい。えと、篝さん、失礼します」

一夏さんの前を抜けて篝さんの間に入る。
で、ですから私を睨まないでくださいってばー！

「あ！三人揃って前で手を組んでもらってもいいかな？団結の証、見たいな感じで！」

「こ、こうですの？」

セシリアさんがいち早く一夏さんの手を握って前に差し出す。私はセシリアさんの上から被せるように手を乗せた。

「ほら！三人とももつと寄って！それじゃ行くよー！ $35 \times 51 \div 24$ は？」

なんなんですかその全く関係ない計算は・・・そこは普通に $1 + 1$ でいいじゃないですか・・・

「え、えつと・・・・・・2？」

「不正解。正解は74、375でしたー」

やはり第一印象で人を判断するものではないですね。友達として欲しいけど面倒なタイプです・・・

それともこの人の笑顔にする方法、みたいなものなんでしょうか？首を傾げているとその間にシャッターが切られてしまった。

シャッターが押される瞬間、近くにいたクラスの皆さんがフレームの中に集まったのはやはりご愛嬌というものでしょう。

「な、何故皆さんは入ってますの!？」

「まーまーまー」

「セシリアとカルラだけ抜け駆けってのはないでしょう?」

「団結の証ということだし写っても問題あるまい?」

「むー!」

あ、膨れたセシリアさんも結構可愛いかも。

一夏さんのインタビューを終えた後は就任祝いというのもあり織斑先生に解散させられるまで騒いでいたでしょうか。

それから篝さんもセシリアさんも何気に写真を要求しましたね。なぜか私も貰えるようになってましたけど・・・集合写真は良いものかもしれません。もらったら部屋に飾りましょう。

パーティー終了後

「カルラさん！」

「はい？」

部屋に戻る途中で後ろから声をかけられた。振り返るとセシリアさんが走って私のところにやってきていた。

「少々お話がありますの。お時間をいただけます？」

「はあ、ここですか？」

何の話だろう？

「いえ、出来ればどちらかのお部屋で」

「じゃあ私の部屋で。すぐ傍で相部屋の人もいませんし」

「あ、それでは10分ほどしてから参りますわ」

「？分かりました」

部屋に戻ってから来客のため少し散らかっていたプリントや荷物を片付ける。お湯を沸かして紅茶のTバッグを用意してから、セシ

リアさんはイギリス生まれなのだからこんな味では失礼だろうか。
などと考えてしまった。

でも私の部屋にはこれ以外紅茶なんてないし・・・

コンコン

悩んでいるうちにセシリアさんが来たらしい。ノックされた扉を
開けるとそこにはセシリアさんと・・・箒さんがいた。
なぜか箒さんはむすっとしていますが・・・はて？

「あれ？箒さん？」

「私が呼びましたの。よろしいかしら？」

「は、はい。どうぞ」

部屋に二人を入れて箒さんの分のコップを用意して紅茶を渡す。

「どうぞ」

「あ、ああ。ありがとう」

「わざわざ申し訳ありません」

二人が向かい合ってベッドに座っているので私は三角形になるように椅子を出して座る。

ちなみにこの部屋、本来二人部屋なのに私一人のせいでひとつのベッドは完全に荷物置きと化しています。

「それでお話というのは？」

「ええ、そのことですけど・・・」

少し間を置いたので私は紅茶を啜る。
む、少し砂糖入れすぎたかな？

「お二人は一夏さんのことを好いてますよね」

「ぶっ！」

思わず口に含んでいた紅茶を吹き出してしまった！

さらに二、三度咽てようやく落ち着いたところで篤さんが口を開いた。

「それがどうした。お前には関係ない」

「わ、私は一夏さんがすk・・・」

「私も一夏さんには好意を持っていますわ！いえ、好意なんて言い方ではありません！これはLove、愛ですわ！」

どうしてこうなってしまったんです！どうしたこうなってしまったんです！？

「映像越しでも分かるあの凛々しいお姿、降り注ぐ弾丸をもろともしない勇敢さ、あれこそ私の求めている理想の殿方ですわ！」

あー、私のせいですか・・・私のせいなんですネ。
篤さんすいません。私のせいですごめんなさい。

「な・・・！この間まで男を侮辱していたやつと言葉とは思えないなこの猫被り！」

「あらあら、好きな人の前で鬼の形相をしているよりはマシだと思いません？」

「ええと・・・あのー・・・」

全く持つて私のことは蚊帳の外になってしまっている。ていうよりなんで私は巻き込まれているんですか！？

「コホン・・・本題から反れましたわね。今日はお二人に宣戦布告

をしにきましたのよ！」

ドォーン！という感じでセシリアさんが立ち上がり右手を腰に、左手を私たちに突きつけて言い放ちました。

さて、ここでの宣戦布告なんて悪い予感しかないんですけど・

・！

逃げてもいいですか？逃げてもいいですよね！？

「宣戦布告？」

ああ、箒さん！逃げるタイミングをばっちり潰してくれましたね！なんて優しい人なんでしょう！

「ええ。私だけ抜け駆けして一夏さんの恋人になってしまって、後から文句をつけられるのも癪ですしね」

・・・もう箒さんが爆発寸前の顔をして怒りに我を忘れそうなくらい肩を震わせています。

爆発物処理班の電話番号は何番ですか！？

「私は一夏の幼馴染だ！パツと出のお前たちに一夏を渡すものか！」

「分かりませんわよ？選ぶのは一夏さんですからね！」

たち！？たちって言いましたか！？ですから私にそのような感情はあああああ！

私が悶絶している内に二人の会話はドンドンエスカレートしていく。私の穏やかな学園生活はどこへ行ってしまったのだろうか？

カムバック平穩！

コンコン

そんな時、天の救いか誰かが私の部屋をノックした。もしかしたら近隣から騒音の苦情かもしれないけどそれでも今の状況よりはマシでしょうし・・・

「お、お二人とも！来客の様なので少しお静かに！」

「む、なら仕方ないな」

「あら。それは失礼を」

二人とも流石に言い争いを止めて静かになったところで扉を開ける。

「ようカルラ」

しまったー！近隣つて一夏さんも含んでましたね！
外を確認しないで開けた私のミスでした！
まさかこの状況の元凶を招きいれてしまうとは・・・

「一夏！？」「一夏さん！？」

一夏さんの声に反応した二人がほぼ同時に扉まで駆けってくる。

「こ、こんな時間に女子の部屋に何のようだ！一夏！」

「そ、そうですね！ま、まままままま！まさか既にカルラさんとそのような関係で！」

ああ、誤解が深まっていくのはもう決定事項なのです。神は我を見捨てたもうたのですか？

・・・神様申し訳ありません。あなたのことを少しでも疑ってしまつとは神の子失格ですね。ちなみに私はキリスト教徒です。

「ん？何言ってるのかはよく分かんないが、俺はカルラの部屋から2人の声が聞こえて、丁度頼みたいことがあったから尋ねただけなんだけど・・・」

「へ？」

「箒には今までどおり剣の使い方を教えて欲しいんだ。白式には雪片式型しかないからな」

「あ・・・ああ！任せろ！」

「そうか、ありがとう」

「そ、それで！？私への頼みというのは！？」

「うん、セシリアには・・・っていうよりこれはカルラと同じなんだけど、ISの使い方を教えて欲しいんだ。戦いの立ち回りとか仮想の敵とか。二人とも全然動きが違うから練習になると思うんだ」

「ええ！ええ！もちろん協力させていただきますわ！」

神と悪魔が同じだったというのはなんとという皮肉！いや運命ですか！？

「私も構いませんよ。寧ろ一夏さんの弱点を探させてもらいますからね」

「そうか。三人ともありがとう。そういえば三人は何してたんだ？」

「わ、わわわわわ私たちは特には何も！」

「そうだな！特にということとは！」

「嘘付け。怒鳴り声がこつちまで聞こえてきたぞ？」

ああ、やっぱりそうですね。最初にそう言っていましたし。

「ISの議論をしていただけですよ。少々熱くなって大声を出していたことは謝ります。すいません」

「あ、そうなのか？だったら俺も呼んでくれれば・・・」

「PICの原理やハイパーセンサーの応用、反重力力翼などなどの専門用語が飛び交う会話ですが呼んだほうがよかったですか？」

「遠慮しておきます・・・お構いなく」

とりあえず適当にISの教科書に出ている難しい単語を並べてみると、一夏さんはシオシオと自分の部屋に戻っていった。

「「ふう」

「お二人とももう少し落ち着いて」

「あ、ああ。すまなかった」

「反省致しますわ」

二人とも本当に反省したのかシヨボンとしてしまった。今の段階で一夏さんに恋心を抱いているというのはばれたくないみたい。

「と、ともかく！私の話はここまでです！正々堂々、戦いますわよ！」

セシリアさんが立ち上がって私と篤さんに指を突きつけた。

「ふん！望むところだ！私と一夏の絆がいかに強いか見せ付けてやる！」

「それではカルラさん、お邪魔しました」

「ああ、お茶も美味しかったぞ」

二人はそう言うつと部屋を出て行った。

嵐は去りました。後には何も残さずに・・・

「あ！」

一夏さんを好いているって否定するの忘れてた・・・どうしよう・・・

前言撤回です。私に受難が残りました・・・

1 - 10 (後書き)

連投11回目。

というわけですね。アンケートというか『1 - 7』での結果は分割してやったほうが面白い、ということなのでキリのいいところで分割してやっていききたいと思います。

あ、後は質問や疑問も受け付けてます。

何かこの小説で聞きたいことなどがあればこれからの後書きなどで答えていけたらいいなーって思ってます。あつた時は前回の後書きみたいにやるみたいなのでよろしく願います。

流石にこれからどうなるか、みたいなのはネタバレなので書きませんが、設定については遠慮なく聞いてください。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
ではまた明日！

2 - 1 (前書き)

連続投稿 12 回目！

あの宣戦布告事件から数週間。結局翌日否定しても敬遠してるだけと取られてしまったし、あの二人には完全に恋のライバルと認定されてしまったらしい。

クラス代表決定から約半月、4月も終わりに近づいたころ。今日も今日とてISの授業で私たちは第3アリーナに来ています。

今までの半月でISの基礎知識を、今からの半月でISの基本動作を叩き込むということでしたので今日から本格的にISを使った授業に入る。

流石に半月も経つと一夏さんも慣れてきたみたいで、授業も集中して聞いているみたいですね。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらつ。織斑、オルコット、カスト。試しに飛んで見せろ」

『はい！』

3人で前に進み出てISを起動させる。いつも通り首に掛かっている指輪を握りこんで意識を集中しISを呼び出します。

よし、今日もいい感じ。

「何をしている。オルコットやカストは展開まで一秒かかっていないぞ」

その声に振り向くと一夏さんはまだ慣れていないようで呼び出せていませんでした。

右腕を突き出して一夏の専用ISの『白式』の待機状態のガントレットを左手で掴みました。あれから何度かISを起動させる機会がありましたがあれが一番集中できるようですね。

その瞬間一夏さんを白い光が包み込み、次の瞬間にはあの白い『白式』を身に着けていました。

うん、相変わらず綺麗な白色だ。

ちなみにセシリアさんはとくに『ブルー・ティアーズ』を呼び出しています。

「よし、飛べ！」

言われてからセシリアさんが真っ先に、続いて私、一夏の順に空へと舞い上がる。

一夏さんはまだ垂直上昇に慣れていないのか、私たちに追いついてこれていませんね。

『何をしている。スペック上では二人のISよりお前の白式の方が上だぞ』

開放通信から織斑先生の容赦のない叱責が飛びます。
確かにそうですが急上昇急降下は昨日習ったばかりなんですけど・
・一夏さんは一回実戦を行っているので昨日習った内容としては
考慮されていないのでしょうかね。

「進行方向に角錐をイメージって言ってもなあ・・・」

「一夏さん、イメージは所詮イメージですわ。自分がやりやすい方
法を模索するほうが建設的ですよ？」

「そうですね。正直言って私もそうです」

「そうは言ってもなあ。大体・・・空を飛ぶ感覚自体がまだあやふ
やなんだよ。どうやって浮いてるんだ、これ？」

私もセシリアさんも最低一年は飛んでますからね。まだ半月ほど
の一夏さんでは中々イメージがつかないのでしょう。

私も最初はそうでしたし・・・

「説明してもいいですけど、長くなりますわよ？」

「ええつと反重力力翼と、流動波干涉の話と、あと・・・」

「いや、いや。遠慮しておく」

ただでさえ初心者なのに専門用語を連発されて、一夏さんはそれこそ頭がパンクしてしまうといった風に肩を落とした。

「ふふ、残念ですね。一夏さん？よろしければ放課後に指導して差し上げますわよ？その時は二人きりで・・・」

『一夏っ！！いつまでそんな所にいる！早く降りて来い！！』

セシリアさんが何か言いかけた時、聞きなれた声が物凄い音量で響いた。

下を見ると山田先生のインカムを箒さんが奪っていました。

って、生徒にインカム奪われるって先生としてどうなんですか山田先生・・・

『何をしているか馬鹿者が』

『痛っ！』

まあそんなことすれば当然織斑先生のお叱りを受けるわけで。

予想通り箒さんの頭には出席簿トール・ハンダーが炸裂した。

その箒さんの目の端に涙が浮かんでいるのが見えるのもISならではの特性。そもそもが宇宙空間での活動を想定されているから何万キロも離れた星の位置で自分の居場所を確認しないといけないため、これくらいは苦ではないらしい。

ちなみにこれでもまだ制限が掛かっているというのだから束博士

というのは本当に天才だ。

『3人とも、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から10cmだ』

「了解です。ではお二人とも、お先に失礼しますわ」

そう言ってセシリアさんが地上へと向かう。あっという間に小さくなったセシリアさんは地面直前で見事に完全停止をやってのけた。

「では私も行きますね」

「あ、ああ」

背中ブースターを吹かして急降下。地表直前で全ブースターを逆噴射してピタシ10cm、セシリアさんの真横につけた。

「よし、次！」

織斑先生の言葉と共に最後の一夏さんが急降下してくる。直前で逆噴射……したのだけど

「やばっ！」

ズン・・・

勢いをつけすぎたのか、激突は避けたようだけど地面に右膝をついて膝立ちの状態になってしまっています。

「馬鹿者が、誰が接地しろといった。空中で止まれといったんだ」

「すみません・・・」

「あと勢いも足りん。あれでは実戦で遅れを取るぞ。精進しろ」

「はい・・・」

そういえば起動一回目で墜落してましたね・・・ちょっとトラウマなんでしょうか？

「よし、では三人とも、武装を展開しろ。ああ、そう言えばカストのISは最初から展開されていたな。ではそれ以外の武装を展開しろ」

『はい！』

セシリアさんは当然『スターライトmk?』、一夏さんは『雪片式型』、私は『ゲリュ』を展開する。

ちなみにタイムは私とセシリアさんがほぼ同時の0.5秒、一夏さんは0.7秒。

「遅い。0.5秒で出せる様になれ」

ぱっさり切られましたね。ご愁傷様です。

「二人は流石代表候補生と言ったところか。ただしオルコット、そのポーズはやめろ。横に向かって銃を向けて誰を撃つ気だ？正面に向けて展開できるようにしろ」

セシリアさんのライフルには既にマガジンが装填されていていつでも撃てるような状況なのですが、左腕を真横に突き出しての展開でした。それが織斑先生にはひっかかったようです。

「で、ですがこれは、私のイメージを纏める為に必要な・・・」

「直せ。いいな？」

「は・・・はい・・・」

正に一刀両断です。正面に構えるように教えてくれた先輩方には本当に感謝します！

無駄な動作はコンマ一秒とはいえ隙が出来る。その隙は戦闘では

致命的となることもある、とそういうことなのでしょう。

「次だ。まずオルコット、近接用武装を展開しろ」

「あ、はい！・・・あ、あら？」

？

どうしたんでしょう？セシリアさんの右手には小さな光がクルクルと回っているだけで一向に形になりません。

「ふむむむむむ・・・！」

そういえば思い出しました。クラス代表決定戦のときも確か近接武装を出そうとして間に合っていませんでしたね。本人が遠距離狙撃タイプなせいで近接武装を展開しなれていなんでしょう。

「ああ、もう！『インターセプター』！！」

半ばやけ気味に武装の名前を叫ぶとようやく近接ショートブレード『インターセプター』がセシリアさんの手元に現れました。

しかし武装の名前を呼んで出すのはIS教本の頭に載っている所謂『初心者用』の出し方で、こんな時間が掛かっている・・・

「何秒掛かっている馬鹿者。実戦でも相手に待ってもらうつもりか？」

織斑先生が頭に手を置いてヤレヤレといった感じで言います。

「じ、実戦では接近なんてさせませんわ!!」

「ほう、カストの時はそれが間に合わなかったせいで負けたのにか？」

「う・・・」

いえ、こっちを見られても過去のことですし・・・あの時はあーしないと負けちゃうんですからしょうがないじゃないですか！

こ、今度一緒に近接戦闘の練習をしましょう。ええ、一夏さんと一緒にセシリアさんも満足できるでしょう。

むしろ一夏さんに教えてあげてって頼めばいいんでしょうか？あ、それだと篤さんがはずされてしまいますね。

ということは篤さんに二人の近接戦闘の練習を頼めばいいのでしょうか。そうですね。それなら・・・

いえいえ、それだと恐らく一夏さんは私も誘うでしょうし私が皆さんに教えれば・・・

「次、カスト。同じく近接用武装の展開だ」

「ひゃい！」

い、いけないいけない。今は授業に集中しないと・・・

『デザート・ホーク』に搭載されている量子化された近接武装は『ブリュナーク』しかないのもそれをイメージ。

右手が一瞬光って『ブリュナーク』が実体化、私はそれをいつものように・・・

「あ・・・」

「ほう・・・教師に武器を突きつけるとはいい度胸だ」

そう、最悪なことに・・・いつもの様に頭上で数回回してから正面に構えてしまった。

つまり傍から見ると『ブリュナーク』の先端を織斑先生の鼻先に突きつけている状態なわけで・・・

「・・・」

「・・・」

気まずい・・・非常に気まずいです！いえ、もうこれは気まずいとか言うレベルの問題ではなく死活レベルの問題です！

セシリアさん・・・完全に目を逸らしてます。
篤さん・・・流石に無理だって顔をしています。
一夏さん・・・目で諦めろって言ってます。
山田先生・・・あわあわしています。
クラスの皆さん・・・なんで手を合わせてるんですか！そして何故念仏を唱えてるんですか！布仏さんだけは何故か手を振っています。

ああ、その優しさが痛い！

日本ではこういう時にどうすれいいんでしたっけ！？えっと・・・
えっとお！
そうだ！

「すいませんでしたあ！」

両膝をびったり合わせ地面について、地面に頭をつけて両手をその頭の上で地面につける。

ジャパニーズドゲザ。目上の人に失礼をした時、日本ではこうすると書いてありました。

必ずしも許される謝り方ではないですが最上級の礼儀だと・・・

「ふん」

「痛い！」

私の頭に出席簿・・・しかも横じゃなくて縦のが炸裂しました・

・
あの・・・織斑先生？ISの絶対防御があるのになんでただの出席簿が痛いんでしょうか？

セシリアさんのBTLレーザーの直撃を受けた時よりも痛いんですけど・・・

「貴様もその癖は直せ。一々上で振り回すくらいなら元々正面で構えろ」

「わ、分かりましたあ」

結局私はその日ISで生身の人間にドゲザした史上初の人間としてクラスで噂される羽目になりました・・・

皆さんクラスの恥になるので言いふらしはしないでくれたのが唯一の救いです。友情って美しいですね。

あれ？なんででしょう？目から汗が止まりませんよ？

2 - 1 (後書き)

連投12回目。今回から2章ということで鈴編に入りました。
鈴出てきてないですけどね！キリがよかったので章を変えました。

今回は原作にもあった日常授業風景にカルラを投入しただけなので
ほぼ原作どおりですね。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
評価、感想をもらえたら作者のテンションが倍ブッシュしますw
ではまた次回

追記、PV32 / 928アクセス ユニーク5 / 038人
こんな駄文にこれだけの人が見てくれるなんて感謝感激です！
これからもがんばりますのでよろしくお願いします！

2 - 2 (前書き)

連続投稿 13 回目！

さて、席が後ろと言つことはどうということなのか？

「なあカルラ、さっきの授業のこつてどつという意味だ？」

一夏さんに物凄い話しかけられます。特に授業の後はこんな感じで尋ねられるのだからどうしようもないですね。

「ああ、これはですね。その前のページの図を参照にして・・・」

それに答えている私も私だ。これでは箒さんとセシリアさんに関係を疑われても無理はない。

その上あの夜から私は妙に一夏さんを意識してしまうようになっていた。教科書を覗き込んでいると顔が触れそうな距離にあつたら慌てて離れてしまつたり、手が触れ合つた程度でうるたえたりと、とにかく今まで何でもなかった行動が一つ一つ気になるのだ。

こうやって気になり始めると一夏さんの鈍感さも非常に目立つ。なにせ他のクラスメイトたちはその行動だけで気づくのには本人は「？」を浮かべるだけで全く気づいていないのだ。

前も思つた通り流石に恋愛感情として一夏さんを見ているわけではないのですがこれはこれで悔しい気がするんですけど・・・

そんな日が続いてあつという間に4月も中盤を過ぎ後半に入りました。朝のSHR前。

？

教室がいつもより騒がしいですね。

「織斑くん、おはよー。もうすぐクラス対抗戦だね」

いつも通り4人で教室に入って席に座ったとき、クラスメイトが話を持ってきた。

そういえばクラス対抗戦はあと3週間後。はやいなあ。

「そういえば聞いた？二組のクラス代表が変更になったって話」

「そうそう、なんとかって言う転校生に代わったのよね」

一夏さん曰く、女子の情報網の広さは異常だそうです。私も女性なので分かりませんがとにかく男性の一夏さんは話に着いていけず、頭に？を浮かべています。

なるほど、教室の騒がしさの原因はその転校生と言うことですか。

「こんな時期に転校生？」

「家の都合か何かかな？」

「分からないけど、何でも中国から来た子だって話だよ？」

「ふふん、今更ながらに私の存在を危ぶんでの戦力強化ではありません？」

セシリアさんが胸に手を当てて大げさにアピールする。けど皆はほとんどそっちのけでその転入生の話を聞いていた。

ああ、なんか可哀想やら可愛いやら・・・

「そいつって強いのか？」

「わかんないけど、今のところ専用機持ちは1組と4組だけだし余裕だよ」

そういえば思ったけど随分アンバランスな構成にしたものだと思ってしまう。普通なら他のクラスに割り振るのではないだろうか？
と思ったけど考えれば当たり前です。何せこのクラスには一夏さんがいるんですから他の国がこのクラスに人を入れたがるのは明白ですね。

「その情報、古いよ！」

教室の入り口から声がした。その方向を見ると教室の入口にツインテールが特徴的な小柄で、肩の部分が露出するようにした改造制服を着ている女の子が立っていた。

いえ、まあIS学園ですから女の子が女性しかないのが当たり前なんですけどね。

あ、ちなみにIS学園の制服は許可さえ取れば改造が可能なので。自由な校風ですよね。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「2組の専用機持ち・・・もしかして貴方が？」

そういえば彼女の顔は代表候補生のデータベースで見たことがある。私の言葉に彼女は腕を腰に当てて仁王立ちの状態で言葉を続けた。

「そう！この私、ファン中国代表候補生、リンイン凰 鈴音！今日は宣戦布告に来たってわけ！」

周囲の視線がその言葉で一気に凰さんに集まる。

ああ、それにしても法治国家日本で宣戦布告なんて物騒な言葉を

二回も聞くなんて・・・！

そういえばIS学園は条約上『どの国にも属しない特殊な場所』にあるんでしたね。忘れてました。

「お前・・・鈴か！？どうしたんだ、カッコつけて！全然似合わないぞそれ！」

「な！１年ぶりにあった幼馴染に対する最初の言葉がそれ！？」

幼馴染・・・はて？でも篤さんは全然知らないような顔をしてますけど・・・？

全然関係ないですけど鳳さんって見た目可愛いのに口調がすごい乱暴ですね。

「じゃ」

いつの間に来たのか織斑先生が鳳さんの頭を出席簿で叩いた。

「っ！いったー！なにすんの！？」

ああ、そんな相手を確認する前にわざわざ火に油を注がなくても・・・

「もうSHRの時間だぞ、さっさと教室に戻れ」

「げ、千冬さん」

「ほう・・・教師に向かって開口一番『げ』とは恐れ入る」

最前線にニトログリセリンを投げ込みましたね・・・

織斑先生が指をコキコキと鳴らすと、凰さんが一步後ずさる。あの人にアイアンクローをされた日には顔についた跡が消えなさそうで怖い。

一夏さんの幼馴染ということは織斑先生とも面識があるのでしょう。どうやら苦手みたいですけど

「それから、学校では織斑先生と呼べ」

「す、すいません」

織斑先生が入るために凰さんが道を譲る。どうやらまた叩かれるということは避けたようです。

「また後で来るからね、逃げないでよ一夏!」

そう言いながら凰さんは教室に戻っていった。

「何で俺が逃げる必要があるんだよ」

まったくもってその意見には同意します。セシリアさんといい凰さんといい何故逃げるなど言っただけでしょうか？

「織斑、いつまでくっちゃべっている。出席を取るから黙っている」

「は、はい！」

でもあの凰さんの反応からしてまた一夏さんが好きな人なんですよ。また障害が一つ増えそうですね。

ん？障害ってなんの？

その日の昼休み。すっかりお馴染みになった私、篤さん、セシリアさん、一夏さんと今日はもう一人、二組の凰さんも一緒・・・というより食堂で待ち伏せしていて今日は5人です。

そして今はそれぞれの昼食を持ってテーブルを囲んでいます。

篤さんとセシリアさんからは何か気迫に似たような空気がチリチリと。

「で、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。あんたこそ、なにIS使ってるのよ？二ユースで見た時はビックリしたじゃない！」

そんな二人を尻目に一夏さんと凰さんは会話を進めています。幼馴染というのは本当のようですね。

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが！？」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方とつ、つき・・・付き合ってらっしゃいますの！？」

流石にじれったくなつたのか篤さんとセシリアさんが切り出します。何かまた面倒ごとが始まりそうな予感がします。

ああ、お茶がおいしい。これはどこの銘柄のお茶なのでしょう？

「べ、べべべ別に付き合ってるってわけじゃ・・・！」

「そつだぞ？何でそんな話になるんだ？ただの幼馴染だよ」

「むう・・・」

ほう、これが玉露ですか。道理でおいしいはずです。

「コホンッ、私の存在を忘れてもらっては困りますわ！ 中国代表候補生、凰 鈴音さん！」

「誰？」

「なっ！私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！まさかご存じないの！？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「うーん、それはそれで問題があるような。でも戦争でもない限り実際戦う相手が決まってから調べても遅くないわけですし無問題ですね。」

「玉露と知ってから飲むとまた一段とおいしく感じるのはどうしてなのでしょう？」

「あ、あのさあ。ISの操縦、あたしが見てあげてもいいけど？」

「ああ、このデザートも美味しいです！紫で四角くてプルプルしています。突っいていると弾きかえってくる弾力が溜まりませんね。なんというのでしょうか？」

「一夏、何ならアタシが見てあげようか？ISの操縦の！」

「一夏に教えるのは私の役目だ！頼まれたのは私だ！」

「あなたは二組でしょう！？敵の施しは受けませんわ！」

「あたしは一夏と話してんの。関係ない人は引っ込んでよ」

「関係ならあるぞー！」

あ、これが羊羹というのですか。やっぱり資料と実物は違いますね。

「後から割り込んできて、何をおっしゃってますの！？」

「後からじゃないけどね・・・あたしの方が付き合い長いんだし」

「それを言うなら付き合いは私のほうが早いぞ！」

なんと！食後にお茶漬けを食べるのですか？ふむう、日本の食文化とは奥が深いんですね。

「うちでの食事ならあたしも何度もあるけど？」

「い、一夏！どいうことだ！」

「納得のいく説明を要求しますわ！」

「説明も何も・・・鈴の実家の中華料理屋で飯食ってただけだぞ？」

お腹がきつくなるかと思いましたけどこれは案外いけますね！新しい発見です・・・

「放課後は私とESの訓練をするのだ！時間など空いていない！」

「そうですね！クラス対抗戦に向けての特訓が必要不可欠な今、他のクラスの方と接する時間はありませんわよ！」

「じゃあその後でいいや、空けといてね」

凰さんはそれだけ言い放つと返事も待たずに空になったトレーを持って去っていきました。

ふむ、お話は終わったようですね。やはり嵐は黙って引きこもるに限ります。

今日は新しい食文化に触れることが出来て食事の時間も有意義にすごせました。これでまた一つ勉強になりましたね。

「一夏、当然訓練が優先だぞ！」

「私たちも有意義な時間を使っているのを忘れなく！」

一夏さんがお二人の台詞に大きく肩を落としました。おお、今回は私は何もありませんでした。

今日の一言、『触らぬ神に祟りなし』

意味、その物事にかかわりをもたなければ、災いを受けることもない。余計な口出しや手出しをしないほうがよい、といったとえ。

日本には素晴らしい格言があるんですね。これからこの言葉を参考にしま・・・

「カルラ、一緒に頼む！」

できないようです。

2 - 2 (後書き)

連投12回目でした。

ちよびつと意識始めるカルラ・・・無意識を操る程度有能力！
さて・・・こつからどうするかね・・・

今回昼時は言葉が途切れ途切れですがこれは原作を見てくだされば
ちゃんと台詞になっているので全部書くのもどうなのかな？って思
ったためです。原作見てない人にはすいません。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしく願います。
感想、評価もお待ちしております。
ではまた次の話で！

2 - 3 (前書き)

連続投稿14回目！

凰さんが来たその日の放課後、第2アリーナ

結局やることは変わりません。

一夏さんは呆れながらも訓練することは必要だと理解したのでしよう。

一夏さん、箒さん、セシリアさん、そして私の4人は一夏さんのIS訓練のためアリーナに集まっていた。箒さんもアリーナにいるのは訓練機の使用許可が下りたためだ。

日本の第2世代型IS『打鉄』。一夏さんが最初に乗った量産型ISと同じものです。

「せっかく使えるようになったのだ。ならば剣の稽古もISでするべきだろう」

至極真つ当な意見です。一部の隙もない理論ですね。

「ま、まさかこんな早く使用許可が下りるなんて計算外でしたわ」

「そうは言ってももうすぐ5月ですし・・・学年別トーナメントもクラス別マッチが終われば案外直ぐですから」

「むう」

セシリアさんは唸っているが下りてしまったものはしょうがないので諦めましょう。

「では一夏、始めるとしよう」

「お、おう」

そう言つて箒さんが『打鉄』の近接ブレードを構えたのを見て一夏さんも構える。

箒さんはその雰囲気も合っていて『打鉄』がすごい似合いますね。

「お、お待ちなさい！一夏さんのお相手をするのはこの私ですよ！」

「ちょ・・・！セシリアさん！？」

セシリアさんがそれを見てISを装着する。まさか二対一でも行う気なのだろうか！？

いくら機体が高性能で操縦が上手いとしても一夏さんは初心者、それは無茶がある。

そういう戦いに慣れるのはもっと後のほうが・・・

「カルラ・・・」

「は、はい！？」

「助けてくれ」

割と本気の声で助けを求められた。
し、仕方ありませんね。

「では二対二でやってみましょう。折角4人いるんですし」

「お、いいなそれ。じゃあ俺は・・・」

「私が一夏さんと組みますわ!」

「私が一夏と組む!」

一夏さんが言い切る前に二人が同時に言い放った。これじゃあ進まないじゃないですか・・・

「ローテーションで回しましょう。クラス別マッチまで時間がありますし・・・とりあえず今日は一夏さんが決めるということだ」

「わ、分かりましたわ」

「そうだな。一夏が決めるのが一番いいな」

「当然私ですわよね!?!」

「当然私と組むよな！？一夏」

いきなり迫られた一夏さんは・・・

「えっと・・・今日はカルラと・・・かな」

あろうことが私を選んでしまいました。完全に私の提案は裏目裏目に出てしまっています。

「な、何故だ一夏！」

「や、だって二人とも何か今日怖いし」

まあその気持ちは身近で見てる分痛いほど分かりますけどね。

「ま、まさかここまで狙ってタッグ戦を提案したというんですの！？」

「今まで静かにしていたのもこのためと・・・く、中々侮れないなカルラ」

ああ、こうしてまた誤解が深まっていくんですね・・・

ちなみにこのタッグ戦、二人とも一夏さんに八つ当たりとばかりに攻撃を集中して私は眼中にないようでした。

結果だけ言えば3勝0敗で私と一夏さん組の勝ち越しなんですが・
・勝った気がしません。

特にボロボロになった一夏さんと対照的に装甲さえ全く無傷の私はどう声を掛けろというのでしょうか。

えっと・・・

「ごめんなさい一夏さん。こんな時どんな顔したらいいか分からないんですけど」

「笑えば・・・いいと思う・・・よ・・・ガク」

笑えません。

「ふんふんふーん」

訓練が終わった後、久しぶりに今日は時間があります。
何故って、それこそISが無傷だったからに他ありません。弾の

補充はすぐ済みましたし、傷がない以上直す必要がありません。

というわけで私はいつもより二時間ほど早く部屋に戻って趣味に没頭できるというわけです。

隣で篤さんと凰さんらしき声の言い争いが聞こえてきたりしていましたがそんなことは関係ありません。ええ、ありませんとも。

「ふんふーん」

自然と手の中のを拭く作業で鼻歌も出るというものです。

ちなみに今手にあるのは大型拳銃『デザート・イーグル』。アメリカ製で自動式拳銃の中では世界最高の威力を持つ弾薬を扱えるという一品です。

ああ、鈍い鉄の光沢・・・無駄のない綺麗なライン・・・そして何といってもこの重量感。たまりませんね。

『デザート・イーグル』の整備を終えて壁にかかっている飾り棚に戻す。こういう時一人部屋はいいですね。誰にも趣味に対して言われません。

えっと次は隣の『グロック17』ですね。うーん、『ベレッタM92』の整備は明日ですかね。流石に一日二丁くらいにしておかないと集中力が持ちませんからね。

銃の整備は時間が掛かりますが・・・まあその時間がいいといえるかなんと言つか。

ゴンゴン！

『グロツク17』を手に取った瞬間誰かが扉を叩く音がしました。
・・・嫌な予感しかしません。だって『コンコン』じゃなくて『
ゴンゴン』ですよ!?

来訪者の方には申し訳ないですがここは居留守を・・・

ゴンゴンゴンゴン!ベキイ!

ちよ!明らかに破壊音なんですけど!?
敵襲!? 敵襲なんですか!?

って鳳さん?

?

なんで真つ青な顔で両手を上げているのでしょうか?

「あ、あたしが悪かったからその銃しまってください!」?

「へ?」

言われて気づきました。そういえば『グロツク17』を持っただけ
までした。

でも私の銃に弾は入ってないんですけどね。撃たないんですから
弾なんて持っても無駄なだけですし。

慌てて『グロック17』を寝巻きの腰に挿して手を離しました。

「殺されるかと思ったわよ」

「すすす、すいません！」

「大人しそうな顔してあんた随分な物もってるのね……」

「はあ、ちよつとした趣味で」

「まだ護身のほうがいいわよ……趣味ってなによ……」

まあ……そうですね……分かってるんです、変な趣味って言うのは。

でもあの無駄のないフォームを一目見たときから好きになってしまつて……その後は成り行きでズルズルと大型銃器にまで手を出す始末で……でも大型銃器はいくらIS学園と言えども持ち込むのが難しいと言うことでまだ交渉中なんですよね。

それは置いておいて！

「そ、それで？こんな時間に何のご用ですか？」

「あー、いやなんていうかさ……頭に血が上つてたから殴り込んじゃったんだけど……さっきの下がったわ。ごめん」

「はあ……一夏さんのことですか？」

「・・・なんのことかしらね！」

分かりやすいんですから。

これで何で一夏さんが気づかないのか不思議で仕方ないのは私だけではないはずです。

・・・目の端に涙の跡があるのはなんでなのでしょう？

一夏さんは女の子を泣かすようなことはないと思っていたのですが・・・鳳さんはプライドが高そうですし言わないほうが吉ですね。

「あー、用事・・・用事・・・ああ！そうよ！あんた一夏に勝ったのに代表候補辞退したらしいじゃない！」

明らかに今思いつきましたね。その用事。

「ええ、私そういうガラじゃないので」

「まあ見た目争い事好みなさそうな顔してるもんね。決闘・・・つていつでもあんた受けなさそうだし」

「そうですね」

セシリアさんの時も売り言葉に買い言葉でしたから。正直一夏さんとは戦う理由がなかったので戦いたくなかったんですね。

当然理由がない鳳さんとは臆病者と言われても戦いませんよ？

あ、故郷や友達を侮辱されれば言われなくても戦いますけどね。
オーストラリア

「んー、じゃあいいや。あたしの変わりにクラス代表戦まで一夏のこと鍛えておいてよ。あんまりあっけないんじゃないんじゃ味気ないでしょ？」

「鳳さんはいいいんですか？」

「ま、やるならあたしも負けたくないしねー。自分の手の内はなるべく残しておきたいし」

セシリアさんといい鳳さんといい代表候補生は負けん気が強いのが特徴なんでしょうか？まだ二人しか会ってませんけど。

「それじゃ頼んだわよ。あんた、さっきの二人よりは仲良くなれそうだしね」

「はあ、分かりました」

「んじゃ、邪魔したわね」

そう言って鳳さんが部屋を出て行こうとします。

「あ！待ってください」

「ん？何か用？」

ええ、ありますとも！

「ドア、直していつてください」

「あ・・・そつか・・・」

結局その日はドアが直ることはなく、一日ドア無しで過ごすことになったのは全く別のお話です。

翌日、廊下にはクラス対抗日程表が張り出されました。

「マジかよ・・・」

隣の一夏さんの声が聞こえます。それはそうでしょう。私もそう思います。

クラス代表対抗戦、一回戦第一試合、一組VS二組

つまり一夏ちゃんと鳳ちゃんの戦い・・・とていつとでもからね。

2 - 3 (後書き)

連投14回目。はじめてから2週間と言うことですね。

作者の個人的な感覚ですけどカルラと鈴は相性いい気がする。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

感想と評価をもらえると作者のテンションがウホオオオ！します！

手探りでお試し

質問(?)に答えるコーナー

はい、二回目です。といってもオリ設定じゃなくて今回はちよつとした疑問に答える回です。というわけで今日はこの人に来ていただきました。

???「えつと・・・初めまして。カルラ・カストです」

はい、主人公のご登場ですね。

カルラ(以降力)「それで今日はなんで呼ばれたんでしょうか?」

うん、とりあえずこの紙の内容読んでもらえる?

カ「へ?はあ・・・えつと、76、56、75・・・ってこれって
! / / /」

んー?どうしたの?ただの数字でしょ?(ニヤニヤ)

カ「あうあうあうあう／＼／＼／」

まあぶっちゃけて言うとかルラのスリーサイズなわけで・・・

カ「ぶっちゃけないください！」

まあ今まで『設定』では発展途上ってことで内緒にしてたんだしいいじゃん。

カ「よくないです！今すぐなかったことに！」

ごめん、この内容考えるのにも時間かかってるし消すとかないわあ

カ「なにメタってるんですか！乙女の一大事なんですよ！他の皆さんのスリーサイズは公式でさえ決まってるのになんで私だけなんですか！」

おおう、カルラもすごいメタ発言だぞ。

まあ元々後から上げる予定だったしそれが早まっただけで結果は変わらないと言うでっていうw

ジャキン！

あれ、カルラさん？なんでIS起動させてるの？

いや、ちょ、『ゲリユ』なんて取り出してどうしたの？

カ「なかったことにい！」

待て待て！『ゲリユ』のグレネードとかまだ本編でさえ使ってない

から！こんなところで撃つてどうするんだ！

カ「あなたを殺して私も死にます！」カチッ！

ぎゃあああああああああああ！

ドン！

ギャグパートじゃなきゃ死んでいた・・・
また機会があれば誰かに登場してもらいます。では ガクッ

追記

『設定』にカルラのスリーサイズを追加w

2 - 4 (前書き)

連続投稿15回目！

クラス対抗戦まで残り一週間。各アリーナは対抗戦のための調整に入るので実質今日が最後の訓練日です。

現在いる場所はいつもの第3アリーナ。今は私一人ですが後から3人も合流する予定です。

最近一夏さんとの訓練ばかりで自分の鍛錬を怠ってましたからね。

右手に『ラングリスニ』左手に『ラングニスト』を構えて射出されてくる模擬戦用ターゲットを撃ち落とす。

しばらくそれを繰り返し高機動モードから反撃モードへ。ターゲットから射出されてくる攻撃を避けながら『ラングリスニ』を、近距離のものには『ラングスト』を叩き込む。

ガチン！

『ラングリスニ』が鉄を弾く音と共に弾が切れたのを理解する。弾幕の薄くなつた右側からターゲットが迫ってくるのを左手の『ラングニスト』で撃ち落とし、『ラングリスニ』に銃剣をオープンし、同時に弾切れになつた『ラングニスト』を左腰に戻す。

「はあっ！」

『ラングリスニ』で気合の声と共にターゲットを突き刺し、引き抜くと同時に左手でマガジンを装填。セミオートに切り替えて近距

離は突く、遠距離は撃ち抜くという行動をマガジンがなくなるまで続ける。

マガジンが切れると同時に目の前に『completed』の文字が表示されます。

頭の周囲に今の訓練のデータが表示されます。

うーん、命中率73%に撃破率85%・・・射撃命中率落ちましたね。近接戦闘の洩らしは一個もないのに。

やっぱり一夏さんと訓練するようになってから近接戦闘多くなつたせいですかね？

それに命中率73%というのは簡単に言えば無駄撃ちです。無駄撃ちはいけません。弾代だって撃つたら撃つた分だけ本国に請求されるんですから多少は自重しないと。

それと被弾率9%というのも案外問題なんですよね。セリアさんレベルが相手だとこれ以上簡単に行くでしょうしもっと精進しないと

「お待たせしましたわね」

声に振り返るとセシリアさんが、その後ろに篝さんと一夏さんが来ていました。

???

なんで一夏さんはものすごい落ち込んでいるんでしょう？

「あの・・・」

「ああ、これは一夏さんのせいですので気にしないでいいですよ？」

「え？でも・・・」

「ああ、あれは一夏が悪い」

「え？え？」

「うん、俺が悪かった・・・」

「はあ・・・」

意味が分からないですけど『触らぬ神に祟り無し』ですね。
予定通り行きましようか。

「で、では今日も訓練を始めましょう」

「ああ、今日が実質最後だからな。なるべく有意義なものにしないと」

「そうですね」

皆さんがまだISを展開していなかったのでセシリアさんの時もやったとおり、空中に画面を映し出して皆さんに見えるようにする。目の前に映っているのは鳳さんの専用機、中国第三世代型IS『

甲龍^{シエンロン}。今回も文章のみですけどね。

「ではこれまでに分かった情報を一夏さんにお教えします」

「これには私の分析が入っていますのよ？存分にお役立てになっ
てくださいね！」

「お前だけなものか！これは私が・・・ゴホン！私たちが分析した
結果だ！」

いえ、どうでもいいですけどお二人とも、言い争いは後で・・・
はあ・・・

「始めても？」

「お、おう。頼む」

言い争ってる二人を置いて話を進めてしましましょう。

「まずこの『甲龍』ですが、コンセプトとしては私の『デザート・
ホーク』と似たところがあり、燃費と安定性を第一に設計されてい
ます。策無しで行くと燃費の悪い『白式』はほぼ確実に負けます」

「お、おう・・・」

『白式』の単一仕様能力、ワンオフ・アビリティ『零落白夜』。れいらくびやくや

あ、単一仕様能力っていうのは、操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する固有の特殊能力のことで、他の人には絶対真似できない、正にその人だけの能力のことですね。私も使える人を見たのは一夏さんが初めてです。

しかも通常第二形態から発動するものであって、それでも発現しない可能性の方が高いんです。それが第一形態から発現するなんて相性がいいたかの問題じゃないですよ全く・・・

それで今までの訓練で分かったのは相手のエネルギー兵器による攻撃を無効化したり、シールドバリアーを斬り裂いて相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられるという反則的な最高レベルの攻撃能力。

ただ、反面シールドエネルギーを攻撃に転化する能力のため、極端に燃費が悪い。

攻撃するたびにシールドエネルギーを使うんですからゲームで言うところとHPやMPを常に削りながら戦っているようなものです。

「そして武装ですがこれは少数・・・まず近接用武装の『双天牙月』。双と名の付く通り二本で一对の青龍刀だそうです」

「ちなみに先ほど少し見ましたが明らかにパワータイプでしたわよ」

「ああ、パワーだけなら『白式』を上回っているかもしれん」

いつの間に争いが終わったのか、セシリアさんと篤さんが一夏さんと同じくデータを見ていました。

「次の武装ですが、これが曲者です。セシリアさんの『ブルーティーズ』と同じ第三世代型兵器『龍砲』。情報によると衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲、ということですよ。やはり文章ではこの程度の理解が限界ですが・・・」

「んー、もっと分かりやすく言っと？」

「そうですね・・・ドラ もんって知ってますよね？」

「ああ。もちろん」

「あれの空気砲と原理は同じです。ただ圧縮した衝撃を飛ばすか空気を飛ばすかの違いですね」

「なるほど、あれ？ってことはつまりそれって・・・」

気づいたようですね。この武装の特徴・・・

「はい、恐らく・・・というかほぼ100%の確立で相手の弾丸は見えません」

「ああ、結局私たちもそこに辿り着いた」

「いくらバリア無効化とはいえ、衝撃の塊では切り裂くことも回避することも困難ですね」

「おいおい・・・それじゃ打つ手なしか!？」

「一夏さんじゃなければ色々手はあるんですけども・・・」

「そうだな。一夏じゃなければ・・・」

「おい・・・」

正確に言つと一夏さんの『白式』では、なんですけどね。近接武装しかないので突っ込むしかないわけですし・・・

「しかし今から射撃のノウハウを教えても今日だけでは身につきませんし・・・」

「うむ」

「ですわね」

「だああああ!どうすんだよ!結局突っ込むしかないのか!？」

「分かってるじゃないですか」

「は？」

「一夏さんには近接戦闘しかない。ということは接近しなければ戦えない」

「あ、ああ」

「なら私がセシリアさんにやったのと同じように、射撃兵器を使わせる隙を与えなければいいんです。ですから今日は……」

そう言って私は腰部の『レヴァテイン』を引き抜いて一夏さんに突きつける。

「射撃武器を切り抜けてからの接近戦を主にやります」

「ちなみにこれは3人の総意ですよ？」

「ああ、今日は覚悟しろ一夏」

そう言ったときにはもうセシリアさんも箒さんもISを身に付けている。

ちなみにセシリアさんは左手に『スターライトmk?』右手に『インターセプター』を展開しています。箒さんは『打鉄』なので近接ブレードしかないのは仕方ないですね。

「さ、時間がもったいないので一夏さんも」

「あ、ああ……」

そう言って一夏さんが『白式』を身に着けました。

さあ、訓練（地獄）の開始ですね

「おい、ちょっと待て！何か三方向から警告出てるんだが！？」

「当然ですわ」

「今までの話を聞いてなかったのか？」

「いやいやいや！まさか3対1か！？そんな無茶な！カルラにだけの時だって負けたんだぞ！？」

「勝つ必要ありませんからね」

「は？」

「今から鍛えるのは反射神経とか状況判断能力とかですから。私たちに勝つのではなく、いかに相手の隙を見て懐に入り込むかの訓練です。本当はもう少し早く出来ればよかったのですが・・・」

この訓練方法だと一夏さんがもたないですからね。最終日にしか持つて来れなかったという悲しい事実が・・・

「一回では付け焼刃かもしれませんがやらないよりはマシでしょう」

「では予定通りに」

「ああ、行くぞ一夏！男ならこの程度は切り抜けて見せる！」

「お、鬼だ・・・鬼がいる」

多分、赤鬼とか青鬼とか考えているんでしょうね。私とセシリアさんは髪と機体の色的に結構そのままですから。

あ、そうだ。忘れてた。

「箒さん、これ、忘れてました」

「ん？ああ、すまんな」

そう言って私の『ゲリユ』を手渡す。前日の内に設定しておいたので箒さんは『ゲリユ』を使えるようになっていきます。

「おおおおおおおい！箒も射撃武器持つのか！？ずるくないか！？」

「実戦にずるいも何もあるわけじゃないですか？」

あ、今鬼に金棒とか考えてますね。なんでこんな分かりやすいんでしょう？

箒さんとセシリアさんはキツチリ頭に青筋浮いてますし・・・ご愁傷様です。

2 - 4 (後書き)

連投15回目です。

実を言つとこの話、昨日の夜『2 - 3』を上げた時点で急遽作ったもので、ちよつとやつつけ感でちやつてます。そして今全力で明日以降の『2 - 4』『2 - 5』の矛盾点を手直ししています。

というのも先に作っていたものを見直すといきなり一ヶ月くらいの月日が経つて訓練とか鈴対策とか全然取ってなかったんですね。セシリアの時やったのに今回ないのはどうなの？ってことで作ったら一夏VS鈴戦がえらい矛盾だらけになりました・・・
というわけで全力で手直し中です。一応話は大まかには決めてあるので連続投稿は途切れません。そこは大丈夫です。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
評価、感想をもらえたら作者のテンションがブルアアアア！します！

前回のようになんかキャラでの質問もあつた時にはやります。
ではまた明日！

追記

20時時点の日間ランキング78位・・・ありがとうございます・・・
・
自分の小説がこんななんて・・・なんか泣きそうです・・・

2 - 5 (前書き)

連続投稿 16 回目！

あの特訓（地獄）の日から一週間。クラス対抗戦一回戦の日。

鳳さんと一夏さんの間には以前に何かあったようで、一夏さんからは負けられないという感じがヒシヒシと伝わってきています。

結局鳳さんはその間全然クラスにも来ませんでしたし、根本的な部分で何かあったんでしょうね。

今は私、篝さん、セシリアさんはピットにいる一夏さんの様子を見に来ているところです。

既に鳳さんはアリーナの中央で待機していて一夏さんを待っている状態にある。

『甲龍』は赤黒い装甲に特徴的な非固定浮遊部位アンロックユニットが両肩の上に浮いているISだ。

「私のような射撃専門とは勝手が違います。お気をつけて」

「むしろカルラのような牽制で遠距離を使うタイプだろう。気を引き締めてな」

「練習どおりやればうまくいきます。基本を忠実に、ですよ」

「ああ、3人ともありがとう」

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

「行ってくる！」

そう言って一夏さんはアリーナに飛び出していった。私たちも管制室に移動してその様子を画面で見る。

その場には既に山田先生と織斑先生が待機していたので、私たちはその後ろから見る形になります。

『それでは両者、試合を開始してください』

開始の合図と共に両者が武器を構え、ほぼ同時に前に出ました。一度交差した後、それぞれの得物を振りかざす。

『甲龍』の武装は情報どおり一対の巨大な青龍刀。それ持つと上から一夏さんに向けて一気に接近し振り下ろした。それをなんとか一夏さんは『雪片式型』で受け止める。

そのまま鏢迫り合い状態で回転しながら上昇し、一夏さんが先に距離を取る。

正しい選択です。パワー型の『甲龍』に機動型の『白式』が付き合う必要はありません。わざわざ相手の土俵で戦わず本来の戦い方、一撃離脱が最も効率のいい戦い方です。

凰さんが積極的に前に出て一夏さんに襲い掛かる。左右の得物を

使った見事な連続攻撃だ。

一撃が重く、その勢いを止めないために遠心力を持って左右の青龍刀を自由自在に振り回している。そのため一撃を受け止めることに一夏さんは厳しそうな顔をしています。

初速が速く突進力が高い。典型的な接近戦タイプのIS。各部のスラスターとブースターがそれを可能にしているのだと思いますが、先ほどから繰り出す回転連続攻撃は純粋な技術ということでしょう。相当な修練を積んでいるということですね。

一夏さんも善戦しているが純粋な技術差と言うのは機体性能の差では中々埋まらない。

「一夏・・・」

「ああ、もう！何をやってますの！」

篤さんが心配する声を上げると共にセシリアさんがじれったさに山田先生の通信マイクを使って叫ぶ。

「私の教えて差し上げたクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回をお使いなさい！」

『む、無茶言っくなよ！』

防戦を繰り広げている一夏さんの声が響く。それでも時折隙を見つけては凰さんに斬りかかっていくので気負いはしていないようで

すね。

技術で負けているのならば気持ちで負けないことが重要です。負けと思えば勝てる勝負も勝てませんからね。一夏さんは剣道経験者ということですから辺のことはよく理解しているようです。

それに凰さんにも弱点がないとは言えません。

青龍刀は威力は大きいが取り回しが悪い。しかも二刀となると両手の負担を片手で受けねばならない分受けに回った時のリスクは大きい。『白式』の機動性と単一仕様能力の特性を考えれば十分に勝機はある。

・・・はずだったんですが、なんと凰さんは青龍刀を連結して攻撃してきた。これには一夏さんもたまらず回避する。

片手であれだけの威力を誇るのだ。両手持ちだとISごと弾かれかねない。

そもそも二つ離れているときでもあれだけの連携を見せたのに、連結した今は青龍刀をバトンのように振り回しながら更に苛烈な連続攻撃を仕掛けてきている。

「カルラ。この戦い、どう見る？」

「ひゃい！？わ、私ですか？」

織斑先生に聞かれて戸惑ってしまったが、言わないのも怖いので自分の考えを伝えましょう。

「そう、ですね。スペック上、機動力では『白式』のほうが『甲龍』を上回っています。それだけならいいのですがやはり一夏さんはまだまだ初心者です。連続稼働時間が凰さんに比べて圧倒的に足りないため経験が不足していて、そのせいで複雑すぎる機動はできません。今も・・・」

スクリーンを見ると凰さんの攻撃を避け、一夏さんが攻撃を仕掛けようとした。しかし既に凰さんは一夏さんの間合いの外に逃げてしまっている。

「動きを読まれます。勝率が無いとは言いませんが、良くて2割程度でしょうね」

「ああ、私もそう思う」

「そんな！お二人は一夏さんに勝ってもらいたくないんですの！？」

「そんな訳はありません。ですが、状況分析からいってそう見積もるしかないんです。練習でも結局私たちには近づけませんでしたし。何か奥の手があれば・・・」

そう、結局最終日の特訓、一夏さんは回避が精一杯で私たちに迫ることが出来なかった。当然といえば当然ですがあの特訓から何か得ることがあれば、と思ったんですけどこう接近戦が主体では遠距離攻撃を掻い潜って隙を突く、ということができません。

消耗戦になると思ったのか一夏さんは距離を取ろうとしているようです。

確かに『白式』の機動ならば引き離すことは容易です。現に二人の距離はどんどん離れていく。

その途端、一夏さんの背中を何かが掠った！

「な！」

「今のはまさか！」

今、弾丸も何も無い空間が爆発した。

「山田先生。今の攻撃は分かりましたか？」

「衝撃砲ですね。空間自体に圧力をかけて砲弾を打ち出す武器です」

「あれが・・・」

「『龍咆』・・・ですね」

箒さんが強く拳を握り締めているのが見える。

なんとか起き上がった一夏さんにまたも衝撃砲が連射される。一夏さんはそれを感じ取ったのか素早く回避を行う。

見えない弾を不規則な機動で避けつつ『甲龍』を中心に縦横無尽にアリーナを動き回っています。前情報のお陰で焦ることはないようです。

「弾が見えないというのは予想通りでしたけど・・・まさか砲身も見えないとは・・・」

「しかも砲身の射角がほぼ制限無しで撃てるようですわね。先ほど真後ろと真上の攻撃を確認しましたわ」

「そういうことに・・・なりますね」

私の言葉にセシリアさんが答えてくれた。
その間も一夏さんへの射撃は続いていて、必死にそれを避ける一夏さんがスクリーンには映し出されている。

でも・・・これは当初の予定通り・・・これでようやく、ということですね。

「あとはチャンスだけですわね」

「そうだな」

「ええ」

篤さんとセシリアさんは既に声だけでこちらを見ていない。画面を凝視している状態です。

砲身、砲弾は見えない。射撃角度は無制限。弾切れもない。これだけ見れば分かっている。でも無敵の兵器だ。ただ……

「ふむ」

なるほど。

「山田先生、少しよろしいですか？」

「あ、はい。どうぞ」

山田先生に許可をとって一夏さんへの回線を開く。

「一夏さん、聞こえますか？」

『カルラか！？今そこどころじゃ……！』

「あの衝撃砲の弱点が分かりました」

『エ！？』

内容を素早く頭でまとめ説明を開始する。

「あの衝撃砲は見ている限り砲身は肩部のユニットにひとつずつで計二門。つまり一度に撃てる数は2発まで、発射まで一瞬ですがタイムラグがあります」

『そのどこが弱点なんだ!』

「ここからです。あの砲身の射撃角度は無制限らしいですけど、それはオートロックではなくあくまでも操縦者がロックしてから射撃をする普通の射撃兵器です。360度確認できるISで死角にというものはありませんが、鳳さんの意識の外に行けば撃たれるラグは大きくなります。ただ不規則に動いても意図が読まれば弾幕を張られてしまいます。しかし『白式』の機動性なら、認知される前に離脱することが可能のはずです。とにかく常に動き回って相手に攻撃されるかも、という意識を植え付けてください。そうすれば後は最終日と同じですよ」

『わ、分かった!やってみる!』

「ただしこれは今の段階で分かっていることです。隠された能力もあるかもしれませんがお気をつけて」

『了解だ!』

通信を終えて再び画面に目をやると私のアドバイスを早速生かして戦い始めていた。フェイントを入れたり、後ろに回り込んだり、高速で旋回したりととにかく引つ掻き回す戦法を取っています。『

白式』の機動力があればこそ、ですね。

それ以降は明らかに凰さんの撃つ場所がずれている。これならあの射撃はもう当たらないだろう。

ただやはり決定打がない。近づけないのだ。

凰さんは時折接近戦を行ってくるがそれもほとんど反撃されないタイミングで切りかかってくるし、反撃しようとするとなやはり間合いの外に出て衝撃砲を撃つ。

「消耗戦ですわね」

「ああ、長引きそうだ」

「はい」

お二人の言うとおり、消耗戦になれば『白式』は特性のせいで不利です。そうなれば・・・

「いや、そうでもないぞ」

「「「え?」「」」」

私たち三人の言葉を織斑先生が否定した。

「織斑君、何かするつもりですね」

ずっと画面を見ている山田先生が呟いた。一夏さんは先ほどの戦法を取りつつも一定の距離を保とうとしている。

何故そんな動きをするのか、その疑問に織斑先生が答えてくれた。

「イグニッション・ブースト
瞬時加速だろう。私が教えた」

「瞬時加速？」

ええっと、確か本国で訓練してるとき聞いたような・・・

「一瞬でトップスピードを出し、敵に接近する奇襲攻撃だ。出しどころさえ間違わなければあいつでも代表候補生と渡り合える。ただし・・・通用するのは一回だけだ」

「ああ、なるほど！」

思い出しました。確か後部スラスタ―翼からエネルギーを放出し、それを内部に再度取り込み、それを圧縮して放出することで一瞬で最高速へと到達する加速方法。

『雪片式型』のバリア無効化攻撃を確実に当てるための『瞬時加速』。

決まれば必殺の組み合わせだが一度でも失敗すると相手にそれを

警戒させてしまう。絶妙な距離と相手の次の動きを読めていないと出来ない芸当だ。

それこそ動物的勘と言い換えてもいいくらいに。

しばらくは回避に徹していた一夏さんがアリーナの地面ギリギリを旋回する。衝撃砲が地面に当たった瞬間、一夏さんが更に加速して鳳さんの視界の死角へ入り込む。

舞い上がった砂煙のせいで鳳さんが一夏さんを見失い、探すために一瞬動きが止まった。

仕掛けるなら今しかない！

思った瞬間『白式』が猛スピードで『甲龍』に突っ込んだ！

「決まった！」

篤さんが叫んだ。間違いない。絶妙な間合いで鳳さんも反応が間に合っていない。

これこそ確実に決まったと誰もが思わずにいらなかった。

ズドオオオオオオオオオ！！！！！！

すさまじい衝撃と轟音が管制室まで響き渡った。

「ひゃう！」

アリーナの一部分が・・・爆発！？

オペレーションルームに緊急事態を知らせるアラームがけたたましくなり響き、部屋の中が非常灯に切り替わる。

「な、何？何が起きたの！？」

「一夏！」

「システム破損！何かがアリーナの遮断シールドを貫通してきたみたいです！」

シールドを貫通！？そんな馬鹿な！

IS学園に喧嘩を売ってくるなんてそれこそ世界に喧嘩を売ると同等のことを誰が！？

いえ、それ以前にアリーナのシールドはISと同じものを使っているはずですよ！？そのシールドを突破って・・・

そんなことを考えていると織斑先生がマイクを取って緊急事態を

告げる。

「試合中止！織斑、凰！直ちに退避しろ！」

物凄い判断力だ。この人が一介の教師なんて信じられない。

「アリーナ中央に・・・所属不明機を確認！？織斑君と凰さんが口ツクされてます！」

「そ、そんな・・・一夏！？」

山田先生が焦った声を上げ、箒さんも信じられないと叫ぶ。

実際私も信じられない。この場で冷静なのは織斑先生くらいだ。

未だに砂煙の中にいるはずの所属不明ISから攻撃が飛んでいく。

ビーム兵器！？

一夏さんが当たりそうになった凰さんを抱えて何とか回避する。

ほっと胸を撫で下ろした所に山田先生が今の攻撃の解析結果を伝えてくれた。

「ビーム兵器です！しかも・・・オルコットさんのブルーティアーズよりも出力は上です！」

「そ、そんなことが・・・」

煙が晴れゆく中、その機体の姿が見えた。

それは・・・

「全身・・・装甲？」

・
・ ISにはほとんど見ない全身フルスキン装甲タイプ、異形の黒いISでした・

2 - 5 (後書き)

はい、というわけで連投16回目です。

遂に一夏VS鈴にゴーレム乱入まででした。

ここで二つ大きな誤字があつたのでご報告を。

鳳 鈴音の『鳳』と言う字ですが・・・今まで『鳳』と書いてました。

凄いいてるので今まで気づかなかつたのですが昨日気づいて全部直しました。

後『甲龍』の武装『龍咆』ですが、これも『咆』と言う字を『砲』と書いてました。

セカン党の皆様、申し訳ありませんでした！

この他にも誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

出来れば何話のどこら辺、というのも教えていただけると非常にありがたいのでお願いします！

評価、感想をもらえたら作者のテンションがワイ！します！

そろそろ連投も終わりに近づいてまいりました。

ではまた明日もよろしくお願いします。

2 - 6 (前書き)

連続投稿 17 回目！

突如アリーナに乱入してきたISは全身装甲のせいで中の人は見えない。いや、むしろそれが狙いなのかもしれない。

一夏さんが呼びかけているが返答はない。無反応に佇んでいるだけで、一言もしゃべらない。

確かに声で正体がばれると言うことも考えるとそうするのが正しいのですが一体何の目的で・・・

「織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

『いや、皆が逃げるまで時間を稼がないと』

「そ、それはそうですけど・・・でも！いけません！お、織斑君！？」

山田先生が全て言い切る前に一夏さんは通信を切ってしまった。

「一夏さん！」

「一夏！」

「一夏さん！？」

ほぼ三人同時に通信機に叫びかけるが返答はない。どうやら本気みたいです。

一夏さんと凰さんが二手に分かれて侵入者を迎撃に当たり始めた。と言っても回避に専念している。

じれったくなつたのか侵入者が黒煙を上げて空を飛んだ。

近接武器はないのか拳で一夏さんに突っ込んでいく。

「早い・・・！」

攻撃を避られた後、一夏さんの『白式』ほどでないにしても一瞬で二人の上を取った。

その状態から肩部からビームの雨を降らせる。さしずめビームマシンガンと言ったところでしょう。威力は腕のものより数段劣るみたいですけど。

二人の作戦は決まったようだ。凰さんが援護で一夏さんが突っ込む。シンプルだけど二人の相性を考えたベストな作戦。

「織斑君！凰さん！ああ、もう！織斑先生、どうしましょう！？」

山田先生も思わず悪態をついてしまうほどテンパっている。

「ま、二人が出来るといつているんだ。任せてみるのもいいだろう」

「そ、そんなめちゃくちなな！」

「織斑先生！暢気なこと言ってる場合じゃないですよ」

私と山田先生が思わず叫んでしまう。いくら二人の実力があるといってもその結論はどうかと・・・第一、一夏さんは実の弟さんじゃないですか・・・！

「二人とも落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラする」

そういいながら織斑先生は準備されたコーヒーに片栗粉を入れて飲もうとする織斑先生。

って片栗粉！？

「あ」

「織斑先生・・・それ片栗粉ですけど・・・」

「・・・なぜ片栗粉が一緒においてある？」

「さあ？」

全くもって謎です。

でも砂糖と塩と片栗粉・・・何故塩と片栗粉があるんですか？

コーヒーを見ると中は既にドロドロになっていて飲み物の原型を留めていませんね。

「やっぱり弟さんが心配なんですね！だからそんなミスを・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

一瞬の沈黙と共に織斑先生がそのコーヒー（？）を山田先生に突き出した。

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「え・・・あの・・・これ・・・」

「どうぞ」

「これコーヒーっていうより・・・」

「ど・う・ぞ」

「い、頂きます・・・」

ああ、山田先生泣きそうになってますよ。でもあれ飲めるんです

かね？

うん、でも顔に出さないだけでやっぱり焦っているのは織斑先生も同じみたい。

そんなやりとりの間でも画面では未だにアリーナ内部で激しい攻防が行われている。

「先生！私とセシリアさんにISの使用許可を！」

「そうですね！私たちならすぐにでも出撃できます！」

「そうしたいところだが・・・これを見る」

そう言って織斑先生がアリーナのステータス状態を表すモニターを映した。

「遮断シールドがレベル4に設定！？」

「しかも扉が全てロックされて・・・！？」

そんな無茶苦茶な・・・外部との行き来は全て出来ないと、そういうことですか。

「あの所属不明機の仕業・・・と考えるのが妥当ですね」

「おそらくな。これでは脱出も救援も行うことができない」

「で、でしたら緊急事態として政府に救援を・・・！」

「既に行っている。今も3年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに教師の部隊が突入する」

「結局・・・待っていることしか出来ないということですね」

「私たちなら簡単な連携くらいならできるのに・・・歯がゆいですね」

「そういえばお前たちはあいつの訓練に付き合っているんだったな。何も訓練してない凰よりはマシという程度だが」

そう言っただけで気づいた。箒さんが手をずっと握り締めて画面を食い入るように見つめている。

専用機がない箒さんは例え遮断シールドがなくなっても助けに行くことが出来ない。

大切な人が危ないのに、絶対助けられないという現実。この中では箒さんが一番辛いかもしれない。

何分経っただろうか？10分？1時間？

いや、実際はほとんど経っていないと思う。

一夏さんがAピットの正面に来て、砲撃を回避した。

ドン！

「きゃあ!」

それと同時に凄まじい轟音が管制室に響き渡く。

「あの馬鹿者が・・・」

織斑先生がほとんど分からないくらいの角度で口の端を上げ、微笑んだのを見た気がします・・・見間違いかもしれませんが。

それを見て画面を見上げると、そこには回避して目標を失ったビームは展開している遮断シールドを吹き飛ばし、それだけでは足りずアリーナへの扉を失ったAピットが映っていました。

「カスト! オルコット!」

つまり・・・それは・・・

『は、はい!』

道が開かれたということ!

「ISの使用を許可する！ただし無茶はするな。二人を救出するのだけを目的としろ！」

「分かりました！」

「お任せください！」

私とセシリアさんが同時に返事をする。

「あ、あれ？篠ノ之さんは？」

山田先生に言われて気づいた。 篤さんが・・・いない！？

「まったく・・・いいから二人はさっさと行け！」

『はい！』

二人そろって部屋を飛び出す。

セシリアさんはこの狭い通路で今にもISを展開して飛んでいきそうな勢いだ。

「我慢してくださいよ！ここでIS展開したら私が吹き飛ばされち

やいますから！」

「わ、分かってますわ！そのくらいの分別はついてましてよ！」

自分の考えが読まれたので驚いたのか少し声が上ずっている。誰でも見れば分かるんですけどね。

ピットに出ると先に行っていた篝さんがピットから一夏さんに向かって叫ぶのが見えた。

「男ならそのくらいの敵に勝てないでなんとする！」

いい啖呵ですね。篝さんらしいです。

「セシリアさん！」

「ええ、行きますわよ！」

言って走りながら二人同時にISを展開。

「私は右へ、カルラさんは左へ！攻撃タイミングはそちらに任せます！」

「了解です！」

篝さんの後ろを私が左に、セシリアさんが右にアリーナの上で別れ、対角線上に所属不明ISを挟み込む形で布陣します。

セシリアさんはオールレンジのBT兵器がある。なら私はそれを邪魔しない攻撃が要求される。それならやはりこれでしよう。

最も射程の長い46mm対装甲ライフル『グルファクス』をオープンする。セシリアさんのレーザーライフルと同じく2mを超える銃身で接近戦では使い物になりませんが、遠距離ならば非常に有効な銃。

片膝立ちで『グルファクス』を構えて機会を伺う。

一夏さんが凰さんの衝撃砲の威力を利用して瞬時加速を発動、所属不明ISに突撃する。

なんとという無茶を・・・少しでも間違えばISのシールドが0になって動けなくなってしまうのに。

しかしそのお陰なのでしょう。今までの比ではない、それこそ瞬間移動と見間違うほどの速度で一夏さんは所属不明のISに接近。

そのまま迎撃してきたその右腕を切り落とした！

所属不明のISは右腕の部分から黒い液体を血のように噴出しながらも、残った左手で一夏さんを吹き飛ばし、それを受けた一夏さんが地面に叩きつけられる。

まだ・・・今撃つても避けられる・・・まだ、まだ！

所属不明のISが残った左腕のビーム砲を一夏さんに向けた！
それと同時にその動きが狙いをつけるために止まる。

瞬間、気づいていたのか一夏さんから個人間秘匿通信プライベートチャンネルが入った。

『狙いは？』

「バッチリです！」

言いながら引き金を引いた。

強烈な反動、銃声と共に弾丸が射出され狙い通り所属不明ISの
左肩に直撃した。

破壊は出来ていないが着弾の衝撃でISがふらついてバランスを
崩す。

『お見事ですわ！』

次弾を撃つ前にセシリアさんの声が聞こえた。展開の済んでいた

ビットが一斉にレーザーを放ち、その直撃で動きが更に止まる。

『二人とも決めろ！』

「当然！」

『了解ですわ！』

動きの止まったISに私の『ゴルフアクス』とセシリアさんの『スターライトmk?』が直撃した。

中央部分を貫かれたISが音を立てながらゆっくりと倒れこむのを見届けて『ゴルフアクス』のスコープから目を離す。

『ギリギリのタイミングでしたわね』

「あれくらい引き付けないとこの距離では外してしまいますから」

『二人ならやってくれるって信じてたからな』

ですから何で毎回この人はこういう発言をするんでしょうか・・・
思わず肩を竦めてしまいますね。

天然で女たらしとは中々珍しい人物ですよ。その上本人は恋愛に疎いとか・・・

あ、そういえば・・・

「中の人は大丈夫でしょうか？思いつきり貫通したように見えましてけど・・・」

「いや、こいつは多分無人機だ」

「無人機？ISが？」

「確証はないけど・・・十中八九そうだと思う」

それは確証って言うのとはば変わりありませんよ？

でも・・・無人のIS・・・？そんな技術はまだどこにもなかったはず。

仮にそんなものが出来たとしていたらまた新しい火種となりかねませんね。

「まあ、何にしてもこれで終わ・・・」

ピーピーピーピー！

その場にいた全員のISに警告を告げるアラームが鳴り響いた！

所属不明ISの再起動を確認、エネルギー充填中

「な!？」

そんな馬鹿な話が!？

『一夏!あいつまだ動いてる!』

開放通信から凰さんの悲鳴が聞こえた。見ると倒れながらも残った左腕を一夏さんに向けてビーム砲を撃とうとしている。

「くっ!」

『一夏さん!』

私とセシリアさんが慌てて射撃体勢に移行するが・・・一度銃を下げてしまっているため明らかにビーム砲の発射まで間に合わない。

ここまでやって・・・!

『うおおおおおおおおおおお!!!!』

瞬間、一夏さんが予想もしない行動を取った。避けるのでも、逃

げるのでもなく……『雪片式型』を構えての特攻。

傍から見ればただ撃つてくさいと言わんばかりの突進……

『一夏^{さん}！！！』

私たちの声が重なった。

左腕から放たれたビームの光が一夏さんを包み込む。

ビームが晴れたとき……そこには剣を振り抜いた状態の一夏さんと再び倒れこんでいくISの姿があった。

でも……アリーナの遮断シールドを貫通するビームを受けて無傷？

……ああ、失念していました。

単一仕様能力『零落白夜』はエネルギー系統は全て無効にするんです。

今まではセシリアさんのエネルギーライフルしか無効にしてなかったので分からなかったですけど。

『い、一体何が？』

セシリアさんの声で我に帰って倒れこんだISの方をズームにするが、今度は動く気配はない。完全に停止したらしい。

直後に『白式』が強制的に解除されて一夏さんがその場に倒れこんだ。

『一夏！！』

『一夏さん！』

凰さんとセシリアさんが慌てて近づいたのをみて私も急いでアリーナの上から降りる。

「一夏さんは？」

「大丈夫、気絶してるだけみたい」

一番近かった凰さんが一夏さんを抱き起こして言った。目立った外傷もないし本当に気絶してるだけみたいだ。

「よ、良かった・・・」

「本当ですわね」

篝さんもいつの間にかアリーナに降りてきていて少し遅れて駆けつけた。

「一夏は!？」

「気絶してるだけだそうです。大事には至っていないようですよ」

「そ、そうか・・・良かった」

私の言葉に篤さんは心底ホッとした表情を見せた。

『皆さん、聞こえますか!？聞こえたら返事をしてください!』

「や、山田先生ですか!？」

通信から山田先生の声が聞こえた。

『ああ!カストさん!？今遮断シールドが解除されました。すぐに先生たちの部隊がそちらに行きます。なので皆さんは退避を』

「分かりました。すぐに戻ります。皆さん、今は一夏さんを早く医務室へ」

「わ、分かったわ」

「篤さんは私が運ぶということでもいいですか?」

「ああ、よろしく頼む」

その後、すぐに先生たちの部隊が駆けつけ、私たちはピットへと撤退。一夏さんを医務室へと運び込んだ。

結果を言つと一夏さんは細かい傷はありましたが命に別状のあるようなものはなし。

ただ単に全力を出し切って倒れた、ということでしたので医務室で横になっています。

今は医務室に近い休憩所に、あの場にいた5人で一夏さんが起きるのを待っている状態です。

「お前ら、ご苦労だったな」

不意に声を掛けられたので顔を上げると織斑先生が立っていた。

「あの・・・あれは結局なんだったのですか？」

篤さんが皆さんの意思を代弁して尋ねた。皆さんも私もそれが一番聞きたいことだ。

「今のところは回収して調査中だ。どこの誰が、どんな目的で送り込んできたのも不明。分かっているのはお前らの予想通り無人機だったということくらいか」

「そ、そうですね・・・」

「それから分かっているとは思いますが今回の件は決して口外するなよ」

『はい』

5人が揃って答えた。織斑先生はそれを確認すると廊下を歩いていく。

「ああ、それと言い忘れた」

織斑先生が振り返えずに言った。

「弟を助けてくれて・・・感謝するぞ」

『え?』

今・・・なんて？

それを確認する前に織斑先生は廊下を曲がって行ってしまった。

「あの千冬さんがお礼なんて」

「明日は槍が降るかもしれませんわね・・・」

鳳さんもセシリアさんも地味にひどいですね・・・

「それはそうとさあ・・・あんたらって一夏のこと好きなのよね？」

「「「!!?」「」」

ああ、なんかまた逃げ損ねたというか巻き込まれたというか・・・

いえ、一夏さんが起きるのを待っているんですからある程度は私も惹かれてると考えるのが妥当でしょうか？いえいえいえ！そんな馬鹿な！

一夏さんは天然だけどちょっとかつこいいというか・・・とぼけている時もありますけど妙に鋭くて笑顔が素敵でサラッと惚れてしまふような言葉を自然に吐いて女性への気遣いもさりげなくて・・・

そりゃあ嫌いではないですよ？嫌いではないんですけど・・・

この3人ほど恋焦がれていると言っわけではなく人として好きという意味ですね・・・

・・・私は一体誰に言い訳してるんでしょう？

「まあそんなこと今ここで話てもしょうがないわね！一夏が起きるまで抜け駆け無し、正々堂々の勝負よ！」

「望むところですわ！」

「上等だ！」

「ま、話が纏まったところで」

そう言つて鳳さんが立ち上がる。

いつの間にか話が纏まってしまったようです・・・詰んだ、フオ
ーエヴァー私の平穏な学園生活・・・

「どこへ？」

「お手洗い。一々聞かないですよ、もう」

鳳さんがそう言つて廊下の角に消える。そこからは特に会話はなく、黙々と時間が過ぎていくだけ・・・

10分ほど経つただろうか、セシリアさんが立ち上がった。

「セシリアさんもお手洗いに？」

「え？え、ええ。そうですね。ちょっと行ってきますわ」

そう言ってセシリアさんも廊下の角に消える。
そういえば・・・

「鳳さん遅いですね」

女子のトイレは長いとはいえ時計を確認すると確実に10分を過ぎています。

「まさか・・・！カルラ、行くぞ！」

「え？は、はい」

篤さんが何か気づいたようだ。私の先に立って廊下を走るくらいの勢いの歩きで先ほど鳳さんとセシリアさんの消えた廊下に突入する。

そういえばこの廊下って一夏さんの病室前に続く廊下でしたね。
それで気づいた。

そうだとしたら呆れるしかないんですけど・・・
セシリアさんと鳳さんの声が聞こえた。予想通り一夏さんの病室からだ。

「一夏さんが起きるまで抜け駆けは無しと決めたでしょう!」

どうやら二人とも完全に抜け駆けしようとしていたみたいですね。

「そういうお前も・・・私とカルラに黙って抜け駆けしようとしていたな」

「そ、それは・・・」

「ですから私はちが」

「ああ、もう! 3人とも出て行ってよ! 一夏は私の幼馴染なんだから!」

だれか私の言葉を最後まで言わせてくださいってば!

そう言いながら鳳さん、セシリアさん、篝さんが言い合いを始める。というよりここ一応病室なんですけど。

とりあえず先ほど買っておいたお見舞いのドリンクを一夏さんに渡す。

「どうぞ、一夏さん」

「お、サンキューカルラ」

「「カルラ（さん）！」「」

「ひい！」

し、しまったあ！？またやっちゃったあ！

2 - 6 (後書き)

連投17回目、VSゴーレム編いかがでしたでしょうか？

今回はほとんどカルラ出番ありませんでしたね。まあ管制室に閉じ込められてるのしょうがないといえましょうがないんですけど・・

カルラちよつと意識し始めましたね。まだ恋愛感情じゃないですけどね！

あと所々原作と違いますがまあそこは二次創作ということでw

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者のテンションがふええ・・・します！

連投も明日の更新で最後の予定です・・・
ではまた明日！

2 - 7 (前書き)

連続投稿 18 回目！

クラス対抗戦後最初の日曜日。

あの襲撃後は予想通り結構な騒ぎでした。

クラス対抗戦は当然のように中止となり予定は全てキャンセル。戦闘を行った私たち4人は2、3日聴取を受けて改めて口外しないことを約束。

幸いにもあの謎のISのおかげで外部への通信、映像は流れていなかった。なので他のクラスメイトの人たちから特に聞かれることもなく（一夏さんと凰さんはそうはいかなかったみたいですけど・・・）実験中のISの暴走ということで話は収束していきました。

そして今日は一夏さんが家を見に行くというのでIS学園にはおらず、久しぶりに静かに部屋の中で読書をしています。

前から一夏さんがいるとISの練習だ、勉強だといって押し付けてくるのでこういう時間は久しぶりです。

いえ、私もついでに勉強させてもらっているので迷惑ではないんですけど・・・偶にはゆったりとした時間も欲しいですね。

「あ、もうこんな時間ですか」

ふと時計を見るといつの間にか11時になっていた。8時に読み始めたのに、やっぱり集中していると時間が経つのが早いですね。

読みかけの本に筆を挟んで部屋を出る。

目的地は食堂。休日は寮に留まっている人は少ない。

大抵の人が部活動や自分の部屋で趣味に耽っているためいつもよ

り人が少なく感じる。

遠くから部活に勤しむ人たちの声が聞こえてきた。それでさえも小さく、別の場所にいるような気になってしまう。

食堂へ行くとやはり人は疎らでした。

まだ少しお昼には早い時間だからかもしれませんが。こういう時は人気のある、普段あまり食べられないものを注文できるので得した気になります。

「あれ？あんだ・・・」

トレイを持って待っている時、後ろから声を掛けられたので振り返るとそこには鳳さんがいました。

「ああ、鳳さん。今からお昼ですか？早いですね」

「あんたもね」

「まあ、そうですね」

そう言っ て私の後ろに並びました。

「鳳さんはまたラーメンですか？」

この間・・・というより食堂で鳳さんを見るときは必ずラーメンを食べていると思う。

そういえば一夏さんも鳳さんはラーメンが好きだって言っていたような気が・・・

「何よ？文句ある？」

「文句はありませんけど栄養が偏りますよ？」

「大きなお世話よ」

「まだまだ育ち盛りなんですからバランスよく食べないと・・・」

「なんですって・・・」

あ、あれ？なんか地雷踏みましたか？鳳さんは自分の胸の部分をトレーで隠しながら私のほうを睨んでいます。

いえ、確かに鳳さんの胸囲は他のクラスメイトの方々と比べてもあまりないと言えますがそれがいいという人もいるわけで・・・
それ以前に私も似たような感じであるわけで！

「あ、ほら、ラーメン来ましたよ」

「む・・・仕方ない。この件は聞かなかったことにしてあげるわ。ほら、行くわよ」

「はいはい」

そもそもそういう意味で言ったわけじゃないんですけどね・・・
鳳さんにこの話題を振るのはやめておきましょう。私も言ってる悲しくなりますしね・・・

というよりいつの間にか一緒に食べることになってるんですね、
私たち。

窓際の日当たりのいい席に陣取って昼食を取り始める。

「やっぱりこの食堂はおいしいですね」

「そう？まあまずくはないわね」

「それ以前に鳳さんってラーメン以外頼みます？」

「私をなんだと思ってんのよ・・・」

一瞬昔見せてもらった日本の漫画でラーメンマンというキャラがいたのを思い出してしまった。鳳さんの場合はラーメンウーマン？

頭の中でおでこに『中』の文字が書かれて特徴的な髭の生えた鳳さんを想像してしまった・・・

「くっ・・・ぶぶ・・・」

「あんだ・・・絶対なんか失礼なこと考えてるでしょ・・・」

「そん・・・なこと、ふふふ・・・」

ふ、腹筋が・・・

「ええい！笑うのをやめい！」

「いふあふあふあふあ！いふあいでふふあんはん！」

凰さんにほつぺを抓られて思うように言葉が出せない。
っていうか痛いです！爪を立てないでください！

私の目から涙が出始めてようやく凰さんは解放してくれた。

「すみませんでした」

「ふん、分かればよろしい」

再びラーメンを食べ始める凰さん。

凰さんは見た目が他の人たちと違って小さいので妹のように思っ
てしまうのだがそういう扱いをされるのがすごい嫌みたいだ。

それは誰にでも言えるかもしれないが、凰さんは特に顕著に現れてると思う。

そんなことを思っていると凰さんはラーメンを食べ終わったのか、スープを飲み……

「ちょ……ちょちょちょっと凰さん!？」

「んあ?何よ?」

「レンゲあるんですから使いましうよ!」

あろうことが凰さんはラーメンの丼に直接口をつけてゴクゴクと飲んでいきます。

「嫌よ」

「な、何ですか?」

「だって何か女々しいじゃない」

あなたの性別は一体なんなんですか……

昼食後、凰さんはやることもないというので私の部屋に来ていた。と言っても私もやることはないので基本は本を読むか銃器の整備をしているだけです。

凰さんはベッドの上で寝転がりながら私の本棚から面白そうな本を探して読んでいます。

「あんたさあ、休日っていつもこんな感じなの？」

ベッドに寝転がって本に目をやったまま凰さんが聞いてきました。

「そうですね。IS学園にくる前なら本を読むか銃器の整理かで一日終わっていましたよ」

「銃器って・・・そういえばそんな趣味持ってたわね」

凰さんが飾り棚にある拳銃を見て言った。

「ん？来る前ってことは、ここに来てから変わったの？」

「というより変えられたといったほうが正しいんですけど」

変わらざるをえませんよね。

「なによそれ？」

「ええ、一夏さんが・・・」

「一夏がなんですって！」

「ひい！」

一夏さんという言葉に反応して凰さんが跳ね上がって私に詰め寄ってきました！

あまりに突然だったので変な声を上げてしまいました・・・

「あんたの休日と一夏となんの関係があるって言うのよ！ま、まままさかもうそういう関係とか言うんじゃないでしょうね！？」

「ああああああ、頭を揺らさないでくださいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii
「い」

その上襟首を掴んで前後に揺さぶるものだから話なんて出来ません！

それに気づいたのか凰さんが手を離してくれました。

「あ、ごめん」

「お昼が戻すか思いましたよ・・・」

「で？」

そこは無視なんですね・・・

「一夏さんの部屋が隣なのは知ってますよね？それに加えて私は一夏さんの席の後ろなのでよく授業のことやISのことを聞かれるんです。最近の休日はずっと授業のことを教えたり、一緒にISの練習をしたりしてるんです。それだけですよ」

「そ、そう・・・それだけなのね」

「それに凰さんが来る前の話ですから。セシリアさんや箒さんも一緒でしたし」

「あの二人も一緒だったの！？」

ですから襟首を掴まないでくださいってば！

「え、ええまあ。同じクラスですし」

「そう、そうよね。同じクラスだもんね」

襟首から手を離れた鳳さんは少し下を向いてしまいました。

なんか寂しそうですね。

それはそうかも・・・一人だけクラスが違うせいでこういう風に頼られないし、私たちに比べて話をする時間も相当少ないはずですから。

「でも鳳さんが来てから一夏さんは嬉しそうでしたよ？話し相手ができたって」

「なんかあんたに言われても同情されてるみたいで嬉しくないわね」

「そうですか？」

そう言いながらも頬を染めてソップを向いてしまう鳳さんはやっぱり可愛いんだと思います。

「来週また一夏さんが誘ってくれると思いますし、鳳さんも一緒にどうですか？」

「い、いいの!？」

「まあ一夏さんなら私が提案する前に誘ってくれると思いますよ？」

「ん・・・ん・・・そう、一夏の頼みならしょうがないわね。仕方ないから私も手伝ってあげるわ!」

これが所謂ツンデレ・・・というやつですか・・・

エッヘン！と腰に手を当てる凰さんを見て私はそれしか思いつきませんでした。

と、そこで凰さんが何かを思いついたように呟きました。

「そういえばカストの部屋って一夏の隣なのよねえ・・・」

「は？はい、そうですね・・・凰さん？」

何か物凄い嫌な予感が・・・！

「ああ、いいのよ！凰さんなんて他人行儀な物言いしなくて！一夏と同じように鈴って呼んで、カルラ（・・・）！」

物凄い笑顔が怖いんですけど！

そういえば笑顔って元々攻撃的なものって聞いたことがありますよ！

「でね？カルラ。私たちって友達よねえ？」

「え、ええつとお・・・」

「今日から私の部屋もここにしたいんだけど良い？良いわよね！良いと言え！返事は聞いてない！」

「拒否権無しですか!？」

ひどい!ここに小さな鬼がいます!

「あつたり前じゃない!友達の頼みは聞くものよ!」

「まあ・・・いいですけどね。私は」

元々二人部屋のせいで持て余してる状態でしたし別に鈴さんが入ってきても・・・

そう思ったとき・・・

コンコン

誰かが扉を叩く音が・・・最近これがすごい怖いんですけど病気でしょうか?

「カルラいるか?少し話があるのだが・・・」

扉の向こうから聞こえた声は・・・篝さんの声ですね。

「はい。開いていますのでどうぞ」

「うむ、では失礼する・・・何故貴様がいる！」

篤さんは入るなりベッドに寝転んでいる鈴さんを指差して叫びました。

「何よ？私がいちゃいけないの？さつさと用件すませなさいよ」

「む・・・その言い方は気に入らないが・・・確かにもつともだ。カルラ、折り入って頼みがあるんだが・・・」

「はあ、なんでしょう？」

嫌な予感しかしません。

「その・・・だな・・・実は部屋変えが言い渡されてな。相手の部屋も決まっているのだがどうもその・・・何というか・・・そう！私が行くと上手いかなさそうでな！カルラの部屋に入れさせてもらえないか！？」

嫌な予感的中！そんなの的中しないでいいんですよ本当に！？

「あ、ごめん。それ無理」

しかもなんで鈴さんが答えるんですか！

「・・・私はカルラに聞いているのだ。お前には聞いていない」

「関係あるわ。今日から私がこの部屋のもう一人なんだから」

「なんだと！？それは本当かカルラ！」

「あわわわわわおおおおちちちついてててて！」

ですから鈴さんも篤さんも人の襟首を掴んで頭揺らさないでくださいってば！

「あ、すまん」

「もう・・・」

「で？」

「正確にはまだです。確かに許可はしましたがけど先生にちゃんと許可取ったわけでもありませんし・・・」

「よし！ならばここは同じクラスの私が・・・」

「後から来て何言ってるのよ！ここは私が住むの！」

「ふん、ならさつさと先生の許可を取ってきたらどうだ？織斑先生の……な」

「う……な、ならあんたもさつさとその織斑先生の許可を取ってきたらどうなの！？」

「そ、それは……」

そうなんですよね。一年生の寮長はなんと言ってもあの織斑先生。二人から見ればそれは要塞対歩兵の戦いです。どう考えても勝ち目はありません。

そう思ったとき……

コンコン

誰かが扉を叩く音が……デジャヴ！？デジャヴなんですか！？

「カルラさん？お話があるのですけどいらっしゃいますか？」

扉の向こうから聞こえた声はセシリアさんのもの……誰か助けて……

結局その後セシリアさんも交えて誰が私のルームメイト・・・
夏さんの隣の部屋になるかの大論争。

しかし『三人寄れば文殊の知恵』と言いますが、あの鉄壁要塞（
織斑先生）を崩す算段は全く出ず、近日中にIS勝負で勝った人が
織斑先生に直談判に行く、ということを決着が付きました。

ちなみに3人の大論争の間、私は完全に蚊帳の外だったのは言う
までもありません。

2・7（後書き）

連投18回目。これで原作一巻分は全てです

最後に鈴との接点と次回への話の一部分的なものに乗せて締めとさせていただきます。

シャル&ラウラは出ずに終わりなんですネ・・・残念ながら・・・

というのも最初に言ったとおりまだここまでしか出来てませんので！
原作2巻分、ラウラ編の終わりまで更新はストップします。おそろく一ヶ月から二ヶ月は最低でも空くと思いますのでご了承ください。

こんな作者にお付き合いいただきありがとうございました。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしく願います。

評価、感想をもらえたら作者のテンションがうつひょひょい！します！

また、こんな展開になったらいいなーって言うのも書いておいたら作者の気紛れ次第で採用したりしなかったり！？

ではまた次回、3章からお会いしましょう！

3 - 1 (前書き)

おっまたせしましたー！連続投稿再開！

あの騒動から少し経って今日は6月最初の月曜日。

私の部屋争奪戦はなんとセシリアさんが勝利し、その日の内に鉄壁要塞（織斑先生）へ突撃を掛けて見事に玉砕していました。会話の一部をどうぞ。

「というわけで私が一夏さんの部屋のとなり……コホン。カルラさんとルームメイトになりますわ！」

「何を勘違いしたのか知らんが却下だ」

「な、何故ですの！？勝者の私には当然の権り……」

「そもそも部屋の移動は篠ノ之だけの話だ。当然凰も除外だ。どうしてIS勝負で部屋を分ける話になったのかは……まあ予想はつくがお前ら生徒の間で勝手に決めるな」

「う……」

「それにお前のあの天蓋つきのベッドを運ぶつもりか？さぞかし力ストも嬉しいだろうな」

「あうあう……」

上陸用舟艇で正面が開いた瞬間に要塞からの機銃掃射で一掃され

ました。

ちなみにその後セシリアさんの寮の部屋を見せてもらいましたけど本当に天蓋つきのベッドでした。そして相部屋です。

となれば当然その相部屋の人のスペースはほとんどなく…私も丁重にお断りしました。

というわけで結局私の部屋には篝さんが入ることとなり、この騒動は終結。最初から織斑先生に話しておけばIS模擬戦闘になることもなかったんですね。

でも苦手意識がある人って話かけずらいじゃありませんか！

ああ、逸れてしまいましたね。

今クラスの話題はISスーツです。今日からISスーツの申し込みが始まるということで、教室では数人で一つのカatalogを見てワイと騒いでします。

「やっぱりハヅキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「やっぱりミューレイのだなあ。特にスムーズモデル」

「あれモノはいいけど高くない？」

簡単に言えばISスーツは一張羅みたいなものです。

ISスーツは学校指定のものもありますがほぼ各人で用意します。

理由はISが自己学習能力により個人個人で全く違う仕様に化するものなので早いところからのスタイルの確立が大事なんです。

ほとんどのIS関連企業では所属のIS操縦者のためにISスーツを開発していますし、ISスーツ専用の会社もあつたりします。ちなみに見た目は全体的にワンピース水着やレオタードに近いものが多いです。理由としてはISは絶対防御があるので動きを阻害しないものが良い、ということでしょうね。

当然オーストラリアの国営IS企業ジャクソン社でも作っていて、私のISスーツもジャクソン社仕様です。ジャクソン社のスーツはシャツとスパッツがくつittedものようになっていて、他のISスーツより布地が多めになっています。

オーストラリアはIS実験時、中央の砂漠地帯でテストを行うことが多い。日によっては砂嵐が吹き荒れ、高速戦闘で肌の露出が多いと肌の皮が剥けてしまうのが理由です。

「ねえねえカルラさん！このジャクソン社のISスーツってなんとか安くならない！？」

「えっと…物によりますけど…」

「私この高機動補助型がいいなあ！」

当初はISの性能は不明な部分が多かったため不測の事態が起きてもいいようにとスーツも考えられたものですが、調査が進むと共に先に言ったようなことは防護フィールドによりありえないということが判明。しかしその方向で開発で進めていたジャクソン社は未だに布面積が多いため、他国に対してほとんど人気はありません。

なのですけど…

「あー、これいいね！ねえ、私も安くならないかな？」

「うんうん」

このクラスではジャクソン社は大人気みたいです。恐らく一夏さんがいるからでしょうね。やはりあの水着のような格好は恥ずかしいんでしょう。

しかし会社の一社員の娘というだけでは流石に値段交渉までは請け負えません。

「聞くだけ聞いてみてもいいですが望み薄ですよ？」

「そうなの？」

「はい。社員の娘という位置づけではそこまでのサービスは…」

皆さん「そっかー」や「うーん」など声を上げていますがカタログは離していません。やはり気になるようです。質問に答えているうちに山田先生が、その少し後に鉄壁要さ…失礼、織斑先生が入ってきました。

「諸君、おはよう」

『お、おはようございます!』

朝の雑談タイムがその一言で終了し朝のSHRが始まります。最早軍隊ですね。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように」

忘れた人は学校指定のものを。それも忘れた人は何と下着でやれとのこと…

今度からISスーツは授業が無くても着ていきましょう、はい。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

織斑先生の連絡事項が終わるといつも通り山田先生へバトンタッチする。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します!しかも2名です!」

「え…」

『ええええええっ！？』

水面に石を投げ込んだように一気に教室中に叫び声が広がります。この嗜好きの人たちの包囲網を抜けてどうやって入ったのでしょうか？鈴さんの時も噂だけで出身国さえばれていたというのに…

かく言う私も開いた口が塞がりません。

こんな変な時期に二人同時？波乱の予感しかしませんね。

山田先生に促されて入ってきたのは…お、男の人！？

ピシリと両足を揃えて軽く一礼をしてから自己紹介を始めます。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

「お、男の人……？」

私の口から自然と言葉が出ていました。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を…」

礼儀正しい立ち振る舞い、中性的に整った顔立ち、髪は長い金髪でその髪を後ろで束ねています。瞳は綺麗なエメレルドで、体つき

は女性と言われれば女性と見間違っほどの華奢さで、でもそれでいてしゅっと伸びた脚が非常に目立つ。

この人を見た人は誰でもこう思うでしょう。『貴公子』と…

「きゃ…」

「はい？」

「「「「「きゃあああああああああ　　っ！」「」「」「」」

水面に石を投げ込んだように以下略。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「幽体離脱」

「ちょ！逝っちゃダメだってば！」

「はっ！隅田川の向こうでお婆ちゃんの手を振っていたわ」

「あんたのお婆ちゃん生きてるでしょうが…」

危つく誰か死にかけたようですが無事戻ってこれたみたいです。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

いつも以上にヤレヤレといった感じで頭を抱える織斑先生。しかもその声がぼやきに近かったせいで教室の波が収まりません。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

そう、もう一人。

こちらにも男性用の制服ですが明らかに女性です。腰まである長い銀髪、小柄な体ですけどそれ以前に最も特徴的な、異色の左目の黒い眼帯。怪我でもなんでもない。昔の軍人映画や漫画で出てくる軍人がしているような目を隠すための眼帯です。

そしてそれさえも置いて、その人の存在感を出しているのが威圧感。その威圧感は知っている。本国で会ったことのある軍人さんのそれだ。

「…挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

教官？今織斑先生のことを教官って言いましたね。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

『……………』

自己紹介…終わり？

一夏さんより短かったような気が…

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

本当に終わりみたいですね。まあ軍関係者だとすればあれ以上の自己紹介はいらないのでしょうけど。

山田先生はいつも通り涙目になっています。

「！貴様が

」

何かに気づいたようにボーデヴィッヒさんが一夏さんに近づくと…

バシン！

何故かいきなり一夏さんの右頬を平手打ちしました。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「何しやがる！」

「ふん」

周囲の状況を全く置き去りにしたままボーデヴィツヒさんは空いてる席へとさっさと移動して座ってしまった。

山田先生は相変わらずあわあわしているし…

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS基礎実習を行う。解散！」

織斑先生が咳払いと共に進めることでようやく進みました。

第二の男性IS操縦者に軍人クラスメートって…もう波乱の予感しかしません。

どうやら残念ながらもう私は平穩を教授することは出来ないようです。

3 - 1 (後書き)

祝！連投再開ってコトで！

予定通り原作2巻分まで書き終えたため、今回も10話前後を連続投稿していきます。内容はラウラがデレるまでw
それ以降はまた3巻分が出来たら、ということでもた1、2ヶ月空ける予定です。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
評価、感想をもらえたら作者のテンションがフーハハハ！します！

初試み

原作設定のコーナー

今回から本編で説明できてない内容をここで説明して以降としたいと思います！

というわけで今回はこの方に！

???「こんにちは。一年一組副担任、山田真耶です」

上から読んでも下から読んでも？

真耶「やまだまや…って何言わせるんですか！」

ままま、とりあえず今日はISスーツの説明をばちゃちゃっとしてやってください。

真耶「はあ…分かりました。ISスーツはIS展開時に体に着ているフィットスーツのことです。肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達し、ISはそこで必要な動きを行うことができるんですね。耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができるんです」

でも衝撃は消えないんですね？

真耶「その通りです。いわば防弾チョッキのシャツ版と考えて頂いて結構です。ただ肌に直接つけてる分、防弾チョッキのようにベストみたいな形ではないので衝撃はモロに來ます。下手をすれば衝撃で内臓破裂、なんてこともあるので注意してくださいね」

うわーお…つまり当たらないことが結局一番良いと…

真耶「そうですね。銃なんて戦争以外で人に向けて撃つ物ではありません。皆さんも銃を持っても人に向けてはいけませんよ」

そういえばISスーツってIS展開時にスーツも同時に展開されるんですよね？

真耶「専用機化を行った場合に限りまずけどね。ただダイレクトのフォームチェンジはその分エネルギーを消費します。余程緊急でない限りスーツを身に着けてISを展開する方が効率的ですね」

流石先生。説明が分かりやすくて助かります！

真耶「えへへ、先生ですから。あ、そうそう。ISスーツは汗の吸着など完璧にこなすので普段から制服の下に着けていても不快感がな

いんですよ。生徒は着たまま授業をうけている人が多いようです。ちなみにISを使用する授業があるときは先生も着たまま授業をしている時がありますね」

つまり通常スーツの下にあの水着のようなISスーツを着ていると？

真耶「？はい。今日なんてそうですね」

つまりあの織斑先生もスーツの下に？夢が広がりますなあ…

真耶「へ？あ、あのー…」

グヘヘ…千冬様のISスーツ姿かあ…しかもスーツの下にかあ…妄想が広がるなあ…

真耶「…ゴクリ………」

ウヘヘヘ…

真耶「エ、エヘヘヘ…」

以下妄想エンドレスの為終了！

長くなりすぎだろこの後書き…もうちょい短くなるよう頑張ります

3 - 2 (前書き)

連続投稿2回目！

3 - 2

第二グラウンド。

転入生二人の紹介の後、今日は2組と合同での実習です。

既に一夏さんとデュノアさん以外の1、2組は全員揃っています。しかも時間は既に開始時間5分オーバー。いつもは間に合っているのにどうしたんでしょう？

デュノアさんが手間取っているんでしょうか？

「遅い！」

ようやく現れた一夏さんとデュノアさん。

「くだらんこと考えてる暇があったらさっさと並べ！」

どうやらまた一夏さんは考え事をしていたようで出席簿で叩かれています。

そして一夏さんが並んだ位置はセシリアさんと凰さんの近く。先ほどのボーデヴィツヒさんとの悶着が鈴さんに知れたらしく少し声が…

「アンタなんでそう馬鹿なのよ！」

鈴さん！声、声が大き…

「安心しろ、馬鹿は私の前にも二人いる」

ああ、ご愁傷様としか言いようがありません。

バシーン！バシーン…バシーン……

広い第二グラウンド全体に響き渡るくらい出席簿で叩かれる大きな音が響き渡り、こだましました。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はい！』

メンバーが2組と合同なのでいつもより気合の入った声が響きま
す。

あれ？そういえば山田先生がいませんね？どこいったんでしょう？

「まずは戦闘を実演してもらおう。凰！オルコット！専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出る」

先ほどので完全に目をつけられたようです。二人はブツブツ言いながら前に出ました。

？何か織斑先生が二人に囁きましたね。

「やはりここは、イギリス代表候補生、わたくしの出番ですわね！」

「私の实力を見せるいい機会よね！専用気持ちの！」

何言っただんでしょうか？急にやる気になりましたね。恐らく一夏さん繋がりでしょうけど。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。それはこっちのセリフ。模擬戦の借りは返させてもらうわよ」

そういえばセシリアさんが勝ったんですね。本当にギリギリでしたけど。

「慌てるなバカども。対戦相手は…」

ビービービービー！

な、何！？急にISの警告が…

「ああーっ！ど、どいてくださいー！」

直上より接近するISを確認。速度、角度より計算。衝突コース

見れば分かります！そういう情報はもう少し早く！

瞬時に両手の手甲を部分展開しながら…

「セット！」

両腕を言葉と共に振るう。

「オープン！」

手甲内部から『グレイプニエル』が射出され落下してくるIS装備の山田先生を絡め取る。

「え？え！？ええ！！？」

「くう！」

絡め取った瞬間にIS全体の展開が間に合い、どうにか山田先生を受け止め…

「ひゃあああああああああ！」

「ふにゃ！？」

られませんでした。『グレイプニエル』でこっちに無理やり誘導したため山田先生は受身を取ることすら叶わず、私は私で無理に急展開したため受け止める体制が整っておらず、空中衝突して一緒に地面を転がってしまった。

「痛たたたた…」

「や、山田先生…大丈夫ですか…？」

「は、はい。ありがとうございます」

ほ、どうやら山田先生は無事なようです。クラスメイトの方々も皆無事のようにです。

山田先生はIS装備なので絶対防御がありますがクラスの皆さんはありませんからね。無事でよかった。

「ん…あ、あれ？」

「山田先生？どうしました？」

「う、動けません…」

「は？そんなバカ…な…」

本当です。私も動けません。私と山田先生は完全に向かい合って密着状態で動けない状態です。
む、腕が何かに引っかかって……うーん…

モゾモゾ

「ひゃあ！」

「あ、すいません」

何か縛られてる感じが…か、体が動かない。というより下を見れない…

目の前には山田先生の顔がある。

わ、こうやって密着してると山田先生の胸すごい大きくて柔らかい…いいなあ…

一緒にくっついてる私の胸なんかとは大違い…いいなあ！

思わず私の顔はそのへヴンへと突入して…

ムニユムニユ

「ひん／＼／！」

ああ、柔らかい…このまま眠ってしまいたい…

モニユモニユ

「やつ／＼／ちょ、カルラさん！？」

「はっ！」

わ、私は何を…

「何をやっている馬鹿者」

「あ、織斑先生！助けてください！」

助かりました。

「何を言っている。縛っているのはお前の鞭だ。さっさと武装をし

まえ」

「へ？」

「さっさと解除しろ。授業が進まん」

「は、はい！」

慌てて手甲ごと『グレイプニエル』をクローズすると私と山田先生の体が離れました。どうやら衝突した瞬間に絡まってしまったようですね。

これは素直に謝るしかありません。

「申し訳ありませんでした！」

「か、カルラさんって意外と強引なんですね／＼／」

あ、あの…何で頬を赤く染めるんですか？

「はあ…模擬戦の相手は山田先生だ。時間も押しているしさっさと始めるぞ。カストは列に戻れ」

「あ、はい！」

織斑先生に促されてISを解除して列に戻る。どうやら2対1で

やるみたいです。しかも2はセシリアさんと鈴さんの組み合わせ……
つていくらなんでも無理なのは……

ああ……でも山田先生柔らかかったなあ……
などと考えていると周囲のクラスメイトの人に話しかけられました。

「ねえねえ、カルラさん！どうだった？」

「ど、どうとは？」

「しらばつけないでよ！山ちゃんの胸よ！おっぱいよ！パイオツ
よ！」

やっぱり同姓でもあの胸は興味の対象みたいです。そういえば篤
さんもお風呂一緒に入りたがらないんですね。大浴場もほとんど
行きませんし、多分好奇心の目で見られるからなのでしょうね。

そう、ですね……あの感触は……そう……例えるなら……

「マシユマロを薄い袋に目一杯入れて揉んだような感じ……でしょう
か」

「な、なんか生々しいわね……」

いえ、でもそれ以外は……プリンとか？

「私帰ったらスーパーのマシュマロを買い占める!」

「業者に頼んでマシュマロ製造機を買わなきゃ!」

「ふふ、甘いわけ。話題のマシュマロ並みに甘いわ!」

クラスメイトの谷本さんの声が聞こえます。

「何よ!あなたは気にならないっていうの!」

「モチ気になるわ!でもその考えが甘っぴいのよ!」

「何が甘っぴいよ!じゃあどうやって確かめるの!?」

「ふふふ、君たちは私たちが何者か忘れていないかね?」

『へ?』

谷本さんの言葉に近くで聞き耳を立ててた人たちが全員疑問の声を上げました。でも何者かって…?

「人間?」

「違う」

「生徒？」

「違う！」

「ISが使える？」

「惜しい！」

「分かった！女！」

「そう、私たちは女なのよ！」

ぐつと手を握って力説する谷本さん……一体それがどう関係するんでしょう？

「私たちは女！男がやったら犯罪なことも女がやったら許される」とがある！」

???

関連性が全く分からないんですが……

「そんなマシユマロを貰うなんてまどろっこしいことをしなくても……」

ま、まさか…

「直にあの胸にダイヴすればいいのよ！」

や、やっぱり………！

「そ、それってまずいんじゃない？」

で、ですよね。やっぱりまずい…

「なに言ってるの！女同士で胸の触りあいなんてスキンシップだよ！」

「そうよ！ならあなたはマシユマロで満足してればいいわ。私たちはあのヘヴンへ挑戦する！」

「わ、私もマシユマロなんて嫌よ！直にいくわ！」

「うむ、その意気やよし！」

あああああ！何故かドンドン感化しています！

「オールハイルおっぱい！」

「「「「「オールハイルおっぱい！オールハイルおっぱい！」」」」」

へ、変態が…変態さんが一杯います。火付け役は私だったとしても…これはなんというか

『オールハイルおっぱい！オールハイルおっぱい！』

うわああああああ！何か周りの人が更に感染しています！とりあえず声を抑えてください！声を…

『オールハイルおっぱい！オールハイルおっぱい！』

「どうやら貴様らには元気が有り余っているようだな…」

そりゃあれだけ騒げば織斑先生が気づくのは当然なわけで。

全員の首がギギギと機械のような音を立ててそこに立っている般若を見ました。

予想通り…いえ、これは予想外です。肩を震わせながらいつもの顔からは想像できない笑顔を浮かべ、額にはしっかりと青筋を浮かべた織斑先生がそこにいました。

『オールハイル織斑！オールハイル織斑！』

今更変えても遅いわけで！

「貴様ら全員グラウンド100週をくれてやろう。そうだな、制限時間は3時間もあれば十分だろう」

『……………』

ちなみにIS学園のグラウンドはISが十分活動できるようにと一周5km。つまり100週は500kmであり500kmを3時間で走るためには時速170？を出さないと間に合わないわけで…貴方たち人間じゃねえ！状態になるわけですね。

「時間内に走れなかった奴にはもれなく私が鍛えなおしてやろう。どうだ、嬉しいだろう？」

『サ、サーイエッサー…』

織斑先生の言葉が終わった途端、アリーナの一部に何かが落下しました。

「あんだねえ！何ポンポン回避先読まれてるのよ！」

「鈴さんこそ無闇に突っ込むのがいけないのですわ!」

「セシリアだってポンポンビット出すじゃない! エネルギー切れ早いし!」

落ちてきたのはセシリアさんと鈴さんでした。どうやら山田先生の勝利のようです。

なんというか… どちらも代表候補生だけあつて的確に弱点を言い当てているので余計評判を落としているような…

言い合いを続ける二人を織斑先生がいつものように出席簿で叩いて黙らせました。痛がつてる二人は当然IS装備ですけど何か?

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

後でセシリアさんたちに記録映像見せてもらいましょう。そうしないとダメな気がします。

「よし、それでは実習を始める。専用機持ちは6人だな。では6人7人のグループに別れる。専用気持ちがリーダーとなってやること。いいな?」

あの… そのやり方だと…

予想通り大半の人が一夏さんとデュノアさんに文字通り突進。
織斑先生がしまったという顔をして面倒そうに額を指で押さえな
がら言いました。

「まったく…出席番号準で一人ずつ各グループに入れ！」

日本には『鶴の一声』ということわざがあると言いますがまさしく
それでしよう。今まで統率性の無かったクラスの皆さんが一斉に
分かります。その時間1分ジャスト。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を1班1体取り
に来てください。数は『打鉄』、『リヴァイヴ』が3機ずつですか
ら、好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

珍しく皆さんが山田先生の声にも茶々を入れずに従っています。
やっぱり実力を見せるというのはそれだけ自信を生むんでしょうね。

「ではこの班は『リヴァイヴ』ということでもいいですね？」

『異議なし』

「ないよー」

最後誰？… ってのほほんさんでしたか。妙に間延びしてたから誰かと思いましたよ。

何人かに手伝ってもらって『ラファール・リヴァイブ』を持ってきます。

ちなみにISは専用機じゃないと待機状態には持って行けないので訓練機などではカートで運ぶわけです。

そしてそのカートは何と人力。しかも重量が滅茶苦茶なんですからここは動力が欲しいところですよ。

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切ってます。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

ISの開放通信で山田先生の声が聞こえました。

「じゃあ出席番号順で装着と起動と歩行まで行きましょう」

『はい！』

「はい」

のほほんさんがいると場が和むというか緊張感がなくなるというか…これも一種の才能ですね。

ちなみにISの装着までは皆さん授業でやっているので問題なく行けるのは確認済みです。

「えっと、一番出席番号が早いのは…」

「ん、私」

「岸原さん。じゃあどうぞ」

岸原さんから順に装着、起動、歩行、解除まで問題なく進みます。ちなみに一夏さんの班が途中でISが立った状態で解除してしまうというアクシデントもありました。そういう場合は運んでもらうか踏み台を探すしかないので一夏さんお姫様抱っこで運んでいました
が…

周りから怨嗟、憎悪、嬌声と言った声が上がったのは私の気のせいじゃないはずです。

最後はのほほんさんですね。

「カルカルー、よろしくねー」

「は、はあ…では装着から…」

カルカル。これがのほほんさんが私につけたあだ名です。まあ…いいです。もう慣れました。

周囲を見るとボーデヴィツヒさんの班意外はほぼ最後の人のようです。ね。ボーデヴィツヒさんの班は会話すらないようでお通夜状態です。ご愁傷様です。

今上手いこと言いましたかね？

はっ！

いけないいけない。一夏さんのセンスが移っている気がします。

「お、お…」

「へ？」

ガシャン！

「はわぁ！」

不穏な声に振り向いた瞬間のほんさんが転びました。
世界転んだ人格好ランキングでいったら間違はなく一位を取れる
くらいの転びっぷりでした。そんなものあるかどうか知りません
けど。

しかも当然ISを装備した状態で…

って…姿勢制御システムがあるのにどうやったら転ぶんですか！？

「えへへへ…ごめんー、カルカルー」

「け、怪我は…ありませんよね？」

「うん、大丈夫ー」

ほ…それなら大丈夫ですね。

「なら立つてもう一度歩行をしましょう」

「おっけー、任せてー」

のほほんさんはゆっくりとISを立たせてもう一度歩行を…

「おろろろろ？」

フラフラ～

「はわわわわー」

ヨタヨタ～

ガシャン！

「ふぎゃー！」

転びました。

だからどうやってるんですか！

3 - 2 (後書き)

連投二回目ってことで！

激しくギャク回になってしまった…どうしてこうなったし……

原作でなかったのほほんさんIS装着ってことでこんな話考えてみました。

のほほん党の自分としては可愛さが際立たせられたかなと…！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしく願います。

評価、感想をもらえたら作者がプールから上がって『超気持ちいい！』って言います！

原作設定のコーナー

二回目のこのコーナー。今回はIS学園実質的最高指導者！立てば軍人、座れば侍、歩く姿は装甲戦車と形容されるこのお方だあ！

???「一年一組担当兼茶道部顧問、織斑 千冬だ」

うおおおおおお！千冬様あああああ！結婚してk

バシーン！！

千冬「黙れ、さもなければ死ね」

……………

千冬「よろしい。では今日はISバトルと実戦の違いを説明する」

うす！よろしくお願いします！

千冬「ISバトルは文字通りISを使つた試合の事を指す。相手のシールドエネルギーを0にすることで勝敗が決定する。バリアーを貫通するだけの攻撃をうければ大なり小なり実体ダメージを受けるが、まあ怪我はすることがあっても絶対に死ぬことはない」

なるほど。弟の一夏さんはよく実体ダメージを受けてますけど、それはバリアーを貫通する攻撃を受けているからなんですね。

千冬「うむ、奴の相手にしているのはどれも第3世代のISだ。普通はISのアサルトライフルでも中々バリアーは貫通しない。相手にダメージを与えるための武装や弾丸も存在するが、まあそれも戦闘を有利に進める戦略と言えるだろう」

では実戦との違いは？

千冬「基本的には変わらん。だが実戦はシールドエネルギーが0になつても戦いは続く。つまりシールドエネルギーが切れてからダメージを受ければ、待っているのは確実な『死』だ。いくらISスーツが丈夫だからといって敵ISの武装に耐えられるわけではない。ISの武装には全て最終安全装置がかかっているが、それを解除することは実戦を意味する。使うときは十分注意するように」

な、なるほど。それすなわち戦争ということですね。

千冬「その通りだ。そしてシールドエネルギーの切れたISの装甲

というのは脆い。既存の兵器には遅れを取らないだろうが、IS同士の戦いではあつという間に撃墜されるだろう。そうならないように私たち教員がIS学園で基礎を教えている」

流石現役教師。分かりやすい説明、ありがとうございました。

千冬「貴様も精進しろよ作者」

うつす！では今回はこの辺で！

何かまともに終わったな…

3 - 3 (前書き)

連続投稿3回目！

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使ったISの整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散だ」

時間ギリギリとはいえ、なんとか全員が起動テストを終えた私たち一組二組合同班は、格納庫にISを移してから再びグラウンドへ。特に私の班はのほほんさんが通常の3倍かったのではぼボーデヴィッヒさんの班とほぼ同じくらいに終わりました。別にそれでどうか言うのではないんですけどね。

そして現在は昼休みのIS学園屋上。

IS学園の屋上は通常の学校と違って開放されています。しかもちゃんと機能的にも見た目的にも考えられており、美しく配置された花壇に季節の花々が咲き誇り、欧州を思わせる石畳が落ち着いています。どこかの庭園を思い浮かばせるほどですね。

そして所々に円卓が置いてあり、天気の良い日は絶好の昼食ポイントなんです。

なんですけど今日は人っ子一人！正確には私たち以外いません。多分ですけど一夏さんとデュノアさん目当てで食堂へ行っているんでしょうね。今頃は上へ下への大騒ぎで緊急包囲網が敷かれているに違いありません。

この場には今いつもの面子+デュノアさんということで計6人。

私以外の女性陣は全員お弁当持参です。

こういう風ならば私もお弁当作ってくれば良かったですね。

明日辺り久しぶりに作ってみましょうか。正直IS学園だと寮に食堂、学校に学食とあるので作る必要がなくて腕が落ちてしまうんですよね。

ちなみに言い分としては

箒さんの場合

「私の分の余りで作ってやった」

セシリアさんの場合

「たまたま偶然何の因果か今朝早くに目が覚めまして作ってみました」

鈴さんの場合

「前食べたと言ってたでしょ。だからよ」

こういうときに限って被るのはなんなんでしょうね？

中身は上から順に普通のお弁当、BLTサンド、そして酢豚。いや、でも鈴さん。酢豚オンリーのお弁当ってなんですかそれ。新手的のいじめですか？

そして鈴さんはセシリアさんのお弁当を見て「うわぁ」と声を上げています。感嘆の声ではなくそれは引いている声。

私も知っているので少し冷や汗が出ています。

何故かと言うと…セシリアさんのお弁当はもののすごい不味…ゴホン、個性的な味がするのです。

見た目はいいのですが見た目だけなんです。以前調理場でセシリアさんの料理をしているところを見たことがあるのですが赤色が足りないからといって七味トウガラシやタバスコを突っ込むのいかなものかと…

その時何を作っていたかは知りませんが、後日オムライスを進められて食べたら物凄い辛かったので恐らくそれではないかと…

「わぁ、皆さん美味しそうですね」

デュノアさんがそう言う。私とデュノアさんは購買のパンです。このコロッケパンと焼きそばパンは絶品なんです。

でも焼き鯖パンってなんなんでしょう？怖くて買ったことがないんですけど美味しいんですかね、あれ。

「あら、よろしければデュノアさんもお一つどうぞ」

ちょ！考え事してるうちに…

「え、いいの？じゃあ一つだけ…」

『あ…』

「あむ」

止める間もなくデュノアさんの口に吸い込まれていくサンドイッチを見てセシリアさん以外の全員が声を上げました。
そして…

「如何ですか？」

ああ…デュノアさんの顔が見るからに真っ青を超えて真っ白に変わっていきます…

「う…っん、こ、個性的でいいと思うよ…っん…」

流石の貴公子も冷や汗が止まらないようです。でも人間って怖いものがあるとそれに興味が沸くものなんですよね。
というわけで…

「セシリアさん。私も頂いても？」

「カルラさん？ええ、どうぞ」

「ちょ！」

「カルラ本気！？」

「人間は好奇心に勝てないものなのです！」

鈴さんと一夏さんの制止を振り切りセシリアさんのバスケットからサンドイッチを掴んで…食べます！

「……………」

あ、甘いです…これバニラエッセンスですね…そしてほんのり香る匂いと辛味…黄色ということは辛子と生姜…そしてこれレタスじゃなくてキャベツですし…この…トマトじゃなくてこれ…まさか本国で食べさせられたあれですか！？

「セ、セシリアさん…？」

「はい？」

「これ味見しました？」

「いいえ、しておりませんが？」

「それはいけません。いくら美味しいと言えども味見をしなければ料理は向上しませよ？」

「まあ、でもこれは…その、ですね」

残りが案外少なくて一夏さんにあげる分が無くなるのを恐れているのか中々食べようとしません。

「では私のものを…」

「そ、そうですね。それでしたら」

そう言ってセシリアさんに私は手渡して、それをセシリアさんが口にしました。何度か租借して…

「あら…思ってたのと味が…」

フラッ

『あ』

バターン！

全員の声が重なりと同時にセシリアさんが椅子から転げ落ちました！

「セシリア！セシリアーーーーー！！」

「ちょっと何よ！どうなってるの！？」

「衛生兵！衛生へーーーーーい！」

「はわわわわわわわわ」

一夏さん、鈴さん、篝さん、デュノアさんが4者4様でうろたえています。

どうやらセシリアさんの味覚が拒否したようです。

そういえばセシリアさんはイギリスの大企業の令嬢なんでしたね。料理なんて一夏さんに会ってから初めてしたんでしょうし、お抱えの料理人もいるはずですからあの味は衝撃的だったということでしょうか？

ちなみに私も最初的时候はあそこまではありませんがひどい料理を作っていました。当時の友達から付いた仇名は『殺人シェフ』。それが悔しくて料理勉強して今では普通なんですけどね。

と思ったらセシリアさんの目がいきなり開きました。

何か様子がおかしいですね？周りをきよろきよろ見渡しています

「あら？貴方たちはどちら様でしょう？」

『はい？』

「というよりここはどこで私は誰なのでしょう？」

「う、これはまさか…」

記憶：喪失：？

ま、まさか余りの衝撃で？

ということは……これ残りを食べさせると元に戻るのでは？

恐る恐るですが……セシリアさんバスケットの中のBLT（？）サンドを進めてみましょう。

「と、とりあえずお腹すいていませんか？これ食べます？」

「ちよつとカルラ!？」

「止めろ！武士の情け的だ、止めてやれ！」

「あら、親切なお方ですわね。頂きますわ」

あ

パクツ、
バターン！

「セシリア！セシリア――――！」

「ちよつとまたなの!？」

「メディック！メディック！……ク！」

「あわわわわわわわわ」

そしてまた少しすると再びセシリアさんの目が開きました。

「あら？一夏さんも皆さんもそんな顔をして如何致しましたの？」

「セシリアー！」

「きゃ！いいいいいいいい一夏さん？／＼あの、ここんなどころで……」

涙を流しながらセシリアさんを抱きしめる一夏さん。結果オーライということでしょうか。

「……………」

「……………」

そしてそれを見つめる二つの視線。その視線の先には……セシリアさんのBLT（？）サンドが残り二つ……まさかとは思いますが……

「「セシリアー！」」

「はい!？」

「私も貰う(わよ)！」

「ちょ、何言ってるんだお前ら！」

一夏さんが止めようとしたましたが既に二人の手はサンドイッチを掴んでいます。

「あ、そ、それは一夏さん用の！」

セシリアさんが言い切る前に…

パクッ

二人がそれを口にして…

バターン！

倒れました。

「バカヤロウ！無茶しやがって！どうしてこんなことしたんだ！」

「へ？へ？鈴さんと篤さんはどうしたのですか!？」

どうするんでしょうね。もう復活用のB L T (?) サンドありま
せんよ？もうどうとでもなってください…

「良かったですね」

「い、いいのかなこれで？」

デユノアさん、それは愚問です……いいんですよこれで！
ああ、パンが濡れているし涙の味がします………！

3 - 3 (後書き)

デスサンド回：これどうしよう…収集つかねえわ orz
乗りで書いてたらこんなことになってしまった！後悔はしてない！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
評価、感想をもらえたら作者がプールの中で『何も言えねえ』って
言います！

原作設定のコーナー

3回目のこのコーナー
綺麗な金髪と整った体型のこの方！

???「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ。って
…なぜ私がこんなことをしなくてはなりませんの!」

まあまあ、本編で一夏との出番増やしてやるから。

セシリア「では張り切ってまいりましょう!」

(嘘だけどね…)

セシリア「で？本日はなんですか?」

あいあい、代表候補生とは何かってのをお願いします！

セシリア「まあ！私にぴったりの内容ですわね。ではご説明いたしましょう！正確には国家代表候補生と言いますが、一般では代表候補生と言う名称で知られていますわね」

なるほど。国家はなくても分かりやすいということですか。

セシリア「ですわね。そして代表候補生は国家代表IS操縦者の候補、つまり将来的にその国を代表する可能性の高いその国の中で選ばれたエリート中のエリートというわけですね！」

ISを使わない戦闘でも相当と聞きますが？

セシリア「当然ですわ。単純な格闘能力だけなら、一般男性以上。軍人であつても対等な条件であれば限りなく互角に渡り合える程と一般的には言われておりますし、私もその内容に合うほどの訓練を積んできましたもの」

なるほど。その訓練を出来ないIS操縦者にさえなれないと。

セシリア「ISは既に世界を支えている一つの要素ですからね。ISの能力は旧世紀の一軍隊にも匹敵しますから。ISを扱う人物は、襲われてもそう簡単に奪われないように訓練するのは当然のことですわ」

（うわー…喧嘩売らなくて良かった……）

セシリア「ちなみに国家代表および候補生は国家公認アイドルという立場にもありますの。モデル、タレントといった仕事も兼任しています、国によっては俳優業などもする場合があるんですよ？私もそこまで多くはありませんがいくつか写真集などを出しており

ますのよ。この間も一夏さんにお見せしようと致しましたのに鈴さんが先に見せていて……」

うい！というわけでイギリス代表候補生、セシリア・オルコットさんでした！。

セシリア「鈴さんには『可愛いな』とか言っていたのに私のときも『可愛いな』とはどういうことですか！同じ反応では紳士としての対応に欠けますわ！確かにちょっとは嬉しかったのですが鈴さんの後ですしそれに加えて……」

で、ではでは！

3 - 4 (前書き)

連続投稿4回目！

デュノアさんとボーデヴィツヒさんが転校してきて5日目の土曜日

IS学園では土曜日の午前は理論学習、午後は完全に自由時間になっています。とはいえ生徒全員がそうなのでアリーナが全開放の土曜日は殆どの生徒が実習に使います。

そして今日はデュノアさんも一緒です。

となれば男性二人がいるこのアリーナは鮎詰め状態なわけで…

「きゃ！危ない！」

「ああ！ごめん！」

「ちょっと！射線に入らないで！」

先ほどから周りではIS同士の接触や誤射などがかなり起こってしまっています。

「こう、ズバーッと言ってから、ガキンッ！と言ったようにだな！」

「なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。はあ？なんでわかんないのよバカ！」

「防御の際は右半身を前方へ5度、回避の際は後方へ20度ですわ

「！」

そしていつも通り一夏さんは教師陣3人衆に囲まれています。ちなみにデュノアさんはまだ来ていません。

私ですか？私は誤解されたくないのだから3人がいない時しか教えていませんよ？

今は一人で射撃訓練中です。

「ごめんね！遅れちゃった！」

声に振り向くとデュノアさんが走ってこちらにやってくる所でした。

「いえ、まだ始まったばかりですし大丈夫……」

「だからこうデュア！って感じてだな！」

「感覚で分かんないなんてあんた馬鹿あ！？」

「ですから上へ17度体を傾けてですねえ！」

いつも通り過ぎますよ3人とも……

「大丈夫じゃないみたいですわね」

「みたいだね。アハハ…」

デュノアさんでさえ苦笑いしてしまうんですから…こんなだからいつも…

「カルラ！助けてくれ！」

こうなるんですもつ！

「ちょっと一夏！今カルラは訓練中ですよ！見れば分かるじゃない馬鹿！」

「そうだ！人の邪魔をしてはいかん！」

「この私が教えて差し上げてるのにデリカシーがありませんわよ！」

そして再び3人の教師（悪魔）に捕らわれる一夏さん（生贄）。

あー、もうなんか…この『ゲリユ』のグレネードを元凶（一夏さん）に叩きつけられたらとか考えてしまいますよ。しませんけどね。

「デュノアさん…」

「な、何？」

「一夏さんをお願いできますか？」

「うん。元々そのつもりだったし…大丈夫」

「お願いします」

デュノアさんはそう言うで一夏さんたちの方に向かっていきました。デュノアさんなら同じ男性ですしあのお三方も納得…はするかどうか分かりませんが、犯罪者じゃないですけど身柄を引き渡すと思います。

ちなみに先ほど言ったのはほぼ3人同時に行っています。しかも全員バラバラ…あれでは逆に弱くなるのではないでしょうか？

昔の日本では新撰組が組長ごとに教え方が違うという似たような状況にあっただけですが同時にない分そっちのほうがまだマシだったのでは…

そう考えているとデュノアさんがISを展開しました。デュノアさんのISは『ラファール・リヴァイブ』の専用カスタムで『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』というらしいです。色は通常のネイビーグリーンではなく鮮やかなオレンジ色ですね。

この間データを見せてもらったときはびっくりしました。私の『デザート・ホーク』も武装は多い方ですがデュノアさんのは既存の装備をいくつか外し、その上で拡張領域を倍することで武装を20以上搭載しているそうです。普通はそれだけあっても使いこなせるものではないのでその半分以下、もしくは一つのものに特化した人

が多いのですけどね。

鈴さんもセシリアさんも武装が3つほどしかないのがいい例です。二人からすれば私も十分多い部類に入るって言われましたしね。

『ゲリユ』のマガジンが空になると同時にISの通信からデュノアさんの声が聞こえた。

「今大丈夫かな？」

「はい？何か？」

「うん、今一夏の射撃武器に対する特徴を教えるんだけど、僕の持っていない武装いくつか貸してあげてくれない？」

「はあ、別に構いませんよ」

でもデュノアさんの持っていない武装ってなんでしょう？あまり思いつきませんね。

あれこれ考えつつも二人の方へと向かいます。

「わざわざ悪いな、カルラ」

「いえ。で、デュノアさんの持っていない武装って何ですか？」

「うん、『ゲリユ』ってあるよね」

「はあ、ですがあれはただのアサルトライフルですけど」

「重要なのはその備え付け。70mmグレネードの方だよ。グレネードランチャーだけなら僕もあるんだけどアサルトライフルの備え付けでそこまでの大きさのものはないからね」

なるほど。そういうことですか。

とりあえず理解したので再び『ゲリユ』をオープンして素早く許諾の欄に一夏さんを追加します。

「はい、どうぞ一夏さん」

「お、サンキュー」

「じゃあ一夏、さっき言ったように構えて」

「ちなみにそのグレネードはロケット推進式で射出時は火薬を内部で爆発させるので発射の瞬間の反動は大きいですよ」

一夏さんが両手で『ゲリユ』を構えて正面のターゲットに狙いをつける。

ドゴンッ！

「うおー！」

一夏さんがトリガーを引くと同時に発射音と発砲煙が発生。反動が予想以上に大きかったせいか『ゲリユ』を構えた右手は跳ね上がっていて発射されたグレネードはあらぬ方向へ飛んでいき爆発しました。

その近くにいた人たちが悲鳴を上げて回避しています。大丈夫でしょうか？まあ皆さんIS装備してますし大丈夫と思います。

「どうだった一夏？」

「お、おう。銃弾と違って弾が遅い感じがする」

「その通りです。グレネードなどは弾丸と違って中に火薬が入っていたり質量が違っていたりするので、どうあっても普通の銃弾より速度は遅くなりがちなんです」

「なるほど」

「もう少し撃ってみますか？」

「お、いいのか？」

「『ゲリユ』ではありませんけどグレネードなら『フェンリス』がありますから」

一夏さんから差し出された『ゲリユ』をクローズして『フェンリ

ス」をオープン。それも使用許可を出して手渡します。

「そういえばすごいミスショットしましたけど銃器管制のセンサー・リンクはやってないんですか？」

「ああ、シャルルにも言われたよそれ」

「そうなんですか？」

「うん、一夏の『白式』は本当に格闘オンリーみたいだね。目測でやるしかないみたいなんだ。反動制御も全部手動でやるしかないみたい」

「なるほど」

納得です。そもそも後付武装イコウヤザがないんですから射撃なんて想定してないのですね。それだったらあるだけ邪魔と、そういうことでしよう。

そう思って『フェンリス』を手渡した時、周りが騒がしくなるのを感じました。『ゲリユ』は一々グレネード弾を装填しなおさなければ行けない分『フェンリス』より厄介なんですよね。その分威力は高いですけど…

そんなことを考えているとアリーナの入り口辺りが騒がしくなるのを感じました。

「ねえ、ちゅつとアレ……」

「ウソ、ドイツの第三世代型だ！」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……………」

アリーナの人垣が割れて件のもう一人の転校生、ボーデヴィツヒさんが現れました。人が多いのでモーセの十戒みたいですね。

ボーデヴィツヒさんが纏っているのは殆どが黒のIS。本人の銀髪が非常に目立つこともあってその黒が映える。

左肩には大型の砲身がついていてかなり威圧的です。

データ照合、ドイツ第三世代IS『シュヴァルツエア・レーゲン』と確認

展開している私の『デザート・ホーク・改』が素早く情報を確認してくれる。学園に入る前に確認したときはトライアル段階と聞きましたけどやっぱりこの人の完成していたようですね。

「おい」

感情の無い声がISの開放回線で声が飛んできました。と言ってもその声は明らかに一夏さんだけに向けられています。

そしてこちらを見ているその目は、明らかに相手を見下すような目つき。

「……なんだよ」

一夏さんも転校初日に叩かれたことを思い出しているのでしょうか。顔が一瞬で厳しくなると共に空気が一気に張り詰めたのが分かります。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

それこそまさに一触即発…この空気は苦手ですよ本当に…
いざという時のために左手に『アイギウス』をいつでも展開できるように準備しておきましょう。

「貴様にはなくても、私にはある」

「また今度な」

「ふん……ならば戦わざるを得ないようにしてやる」

言うが速いか、ボーデヴィッヒさんはその漆黒のISを戦闘状態へシフトさせ、

警告、正面IS攻撃態勢に移行を確認！警告！

「ああもう！」

刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴きました！
こんな密集地でそんなもの撃つなんて！

準備しておいた『アイギウス』を展開しつつ、一夏さんを庇うように前に出て来るべき衝撃に備える。

ゴガギンッ！

「あれ？」

受け止めた音はするのに衝撃が来ません。疑問に思って盾を下げると、そこには私のさらに前で盾を展開して盾で砲撃を受け止めたデュノアさんがいました。

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようなんて、ドイツの人は随分と沸点が引くいんだね？」

「貴様……………ッ」

そういうと同時にデュノアさんは右手に六〇口径アサルトカノン『ガラム』を展開してボーでヴィツヒさんに向ける。

「フランスの第二世代型アンティークごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルークよりかは動けるだろうからね」

あう、耳が痛いです。オーストラリアも未だに実験段階で量産の目処は立っていませんからね…

しかし…今デユノアさん、ものすごい武装の展開が速かったですね。ほぼ一瞬で武装を展開、照準までつけています。なるほど、だからあれだけの武装をつけていても問題なく使えるんですね。

互いに涼しい顔をした睨み合いが続き…

しかし、その睨み合いも長くは続きませんでした。

『その生徒、何をしている！学年とクラス、出席番号を言え！』

アリーナのスピーカーから声が響きました。どうやら騒ぎを聞きつけた担当の先生のようにです。

「ふん………」

二度の横槍にやる気がなくなったのでしよう。ボーデヴィツヒさんがあっけなくISを解除してアリーナの出口へと歩いていきました。

「一夏、カストさん、大丈夫？」

「あ、ああ」

「ありがとうございます。助かりました」

先ほどまでの厳しい眼差しはどこへ行ったのか。今のデュノアさんはいつもの優しい笑顔に戻っています。

「今日はもう上がるのか。どの道もうすぐ閉館時間だし」

「そうですね」

「ああ、そうだな」

そうやって私たちは一夏さんとデュノアさんと別れて更衣室に戻りました。

でもボーデヴィツヒさんは何故あそこまで一夏さんに固執するんでしょう？

ただ単に唯一の男性で言うわけではないようですし、織斑先生にも個人的に何かあるように話してました。

ということは一二人の関係はその何かのところにあるのでしょうか。
もしくは先生繋がりが…どちらにしろこれは個人のことですし、
—
夏さんが話してくれるまで待つしかなさそうですね。

3 - 4 (後書き)

一夏が弱くなる原因3人衆：せめて一人ずつにしてやって…

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者が『強いられてるんだ！』って言いま
す！（言ってどうするw）

原作設定のコーナー

第4回目のこのコーナー。昨日はセシリアというわけで今日は特別なステータスを持つセカンド幼馴染ことこの方！

???「何か頭に来るフレーズがあっただけどまあいいわ。中国の代表候補、そして一夏の幼馴染の凰^{フアン} 鈴音^{リンイン}よ」

っしやーさーす！

鈴「ち・な・み・に：アタシの『凰』って言う字を『凰』って書く人がいるけど間違いよ！確かにどっちも訓読みで『おとり』って読むけどアタシのは『コウ』で後者は『ホウ』！そこ覚えておきなさいね！特に作者こらあ！」

さーっせんしたー！

鈴「まあ気づいて直したから許すわ。で、私に聞きたいことって？」

うす！ISの条約について分かりやすくお願いします！

鈴「え、もしかして『アラスカ条約』のこと？アンタそんな基本的なことも説明してないの！？」

面目ない！

鈴「はあ…呆れてものも言えないわ。いいわ、このアタシが直々に説明してあげるからよく聞きなさい！」

お願いします！

鈴「いい？『アラスカ条約』、通称『IS条約』は、ISが登場してから崩れかけた世界のパワーバランスを戻すために作られた条約よ。IS発表当時、ISの技術は日本の独占状態だったからね。はつきり言っちゃえば日本以外の国が自分の国の有利性を失う危機感から作った勝手な条約ってこと」

ず、随分過激な発言しますね…

鈴「いいのよ。皆言わないだけで思ってることなんだから。日本が条約に应じないでIS独り占めしてれば今頃地球は日本の物になってるわ」

むう…確かにそうだ。

鈴「ま、開発者も日本人ってこともあったし、『平等性』を維持するために各国が開発したISの情報開示義務、一つの国が独占しないようにって主要国への『平等』なIS配備、『研究のため』の超国家機関設立、『軍事利用』の禁止、ISのコアの取引禁止、『各

国ISの動向なんかを取り締まる』国際IS委員会の設置、その他諸々の条約が定められた国際条約よ。ちなみにIS学園の内容もここに盛り込まれてるわ」

それって守ってる国いるんですか？

鈴「正直言って形骸化してるわ。開発したばかりのデータは開示しても数値は実際のそれよりかなり下方修正されてるものがほとんど。配備数についての分配の基準もかなり曖昧よ」

ぶっちゃけましたね

鈴「ま、当たり前よね。国家として他の国への抑止力としてISを扱っている。この時点で軍事への転用だし、情報の開示も本来なら機密事項だし。それをポンポン開示したら皆真似されて開発してる国が馬鹿を見るもの」

そのためのIS学園じゃないんですか？

鈴「名目上はね。でもIS学園では改良ならまだしも本格的なIS開発なんてまず無理だし、開発はやっぱり国ごとなのよ。となればさっき言った状況になるのは必然よね」

なるほど、流石一年で代表候補生になるまで努力したお方。実に分かりやすい解説ありがとうございました。

鈴「そう思うならもつとアタシのことを出さないよ！」

ではまた明日ー！

鈴「聞けコラ！」

3 - 5 (前書き)

連続投稿5回目！

結局一夏さんは話してくれる様子はありませんでした。

まあ本人が嫌な内容を無理に聞くのはよくありませんし、これはまた別の機会に…一夏さんのタイミング次第と言うことで。

そういえば先ほど箒さん当てに荷物が届いていたので受け取った
らなんと…日本刀でした……

法治国家の日本……すいません、ここは違うんでしたね。という
より私の趣味も似たようなものですし箒さんをどうこう言う資格な
いです。

今はアリーナから戻ってきて夕飯前、部屋で休憩しています。
箒さんは届いた荷物を解いてその日本刀を確認している所です。
ああ、どうしてもそちらが気になってしまいます。

「ふむ、カルラは刀に興味があるのか？」

流石にその視線に気づいたのか箒さんが話しかけてくれました。
で、でも……

「は、はあ。人並みに…ですけど」

「人並み…か」

そこで飾り棚の銃を見ないでくださいよ！そうですよ！刀にも興味ありますよ！悪かったですね！

「では持つてみるか？」

「え？い、いいんですか！？」

「うむ」

篤さんが差し出してきた日本刀を受け取る。

長めの黒ごしらえの鞘に鞘越しにも分かる細い刀身。そしてこの重さ。これが真剣の日本刀……

「お、おい！ちょっと待て！」

「へ？」

柄に手を掛けたとき篤さんに慌てて止められました。

ぬ、抜いてはいけなかったでしょうか？

「刀を抜くときはそれなりの作法があるのだ」

「そっなんですか？」

「うむ、教えるからその通りやってくれ。日本刀と言うのは非常にデリケートなものだからな。抜いた後はなるべく話さないでくれ」

「は、はい」

そこからは篤さんに正しい日本刀の鑑賞の仕方を教えてもらいました。

日本刀の抜き方から、その見方、仕舞う方法、人への渡し方。

一通り教えてもらった後に私が一人でやってみる。

えっと、まずハンカチを銜えて…銜えるものはハンカチじゃなくてもいいそうですが、とりあえず唾が飛ばないように出来ればいいらしいです。

そして刀の刃の側を上にしてお腹の辺りで少し抜く……よし。

で、刃の反対側に鞘の中で滑らすように…一気に！

シャ！

「ふあ……」

あ、危なかった…あまりにスムーズに抜けたから銜えたハンカチ落とすところでした…

で、ここからは刀身を自分に垂直に立てて…下から上に見ていく…と。

（綺麗……）

部屋の明かりに照らされて映し出されたそれはその一言が勿体無いほどの魅力を感じる。

反りの入った刀には一切の無駄はなく、あまり波打たない刃紋は美術的な観点からではなく実戦を重視した型であるのにも関わらず本体をより美しく見せているように思えてくる。

（すごいなあ…いいなあ…）

銃器とはまた違う魅力に心が躍るのを止められない！
たっぷり10分は眺めていたと思う。

えっと仕舞う時は鞘の入り口に切っ先を乗せて…刃のないほうを滑らすようにゆっくりと納める。

カ…チン

ふう……

「満足いったか？」

「あ、はい。ありがとうございました」

ベッドの上で正座して待ってくれていた箒さんに刀を返す。

「その刀って名前はあるんですか？」

「うむ、名は緋宵。あけよい明動陽あかるぎょうという名匠の晩年の作だ」

「緋宵……いい名前ですね」

『あかるぎょう』さんかあ。後で調べておこうかな。

「さて、そろそろ夕食の時間だ。行くでしょう」

「あ、私少し調べ物があるので先に行行って貰ってもいいですか？」

「む、そうか。では向こうでな」

「はい」

そう言っ箒さんは部屋を出て行きました…ってどうして緋宵を持つていくんですか！？

まあ…いつか。いくら箒さんでも真剣は一夏さんにしか向けないと思うし。それはそれで問題だと思うけど一夏さんなら死なないと思っし。

そう思っ机の上の端末を起動させる。

「えっと、あかる、ぎょう……っと……あ……」

しまった。どういつ漢字書くのか聞いてなかった。

あ、でも緋宵は分かっているんだから一緒に検索すれば……

出ました出ました。

どうやら緋宵自体は江戸時代初期の作品みたいですな。

以下、文章より

安土桃山から江戸前期に女剣士伴侶としたことからこれまでの刀作りを捨てて『女のための刀』作りに生涯を掛けた刀匠。

『柔よく剛を制す』を発端とした考えは当時では珍しく、その考えはやはり妻の存在が大きく影響したと思われる。

その当人が至った最終結論は二つであり、一つは

『決して受けることなく剣戟を流し、また己が身に密着して放つ必殺の閃き』

この特徴は刀身を通常の太刀よりも短く、小太刀よりも長くしたもので、刀身自体も非常に細く薄いものである。受け太刀などは出来ないがその特性上非常に軽く、普通の刀を振るうよりも早く、鎧などの隙間に滑り込むようにして相手を攻撃できるものだった。

そして二つ目、『相手よりも早く抜き放ち、その一太刀を持って必殺とする最速の瞬き』。

この特徴は、刀身が細く長くされたもので、鞘もそれに見合う長

いものだが、最も大きな特徴は小太刀などよりも素早く抜けることにある。抜刀術を意識したそれは江戸時代の平穩の時代に作られたこともあり、鎧を切ることを前提とせず、頑丈さよりも切れ味を徹底追求した結果である。

鞘の滑り、使い手の円運動、踏み込みの力などを全て計算され尽くしたその作りは当時、女でなくても引く手数多であったが、当人はあくまでも『女のための刀』を作り続けたという。

以上

「『決して受けることなく剣戟を流し、また己が身に密着して放つ必殺の閃き』、『相手よりも早く抜き放ち、その一太刀を持って必殺とする最速の瞬き』かあ……いいなあ、かつこいいなあ」

うーん、箒さんの『緋宵』は多分後者のほうかな。あの長さだと密着してつて言うのも変だし、多分普通に抜くときは関係ないけど箒さんみたいな慣れてる人が使うと素早く抜けるんだ。

でも良かったな、日本刀……私も一本くらい欲し……

トントントン

その音で半分くらいトリップしていた意識を元に戻されました。扉を叩く音……この叩き方はどうやらいつもの方々ではないようです。ね。

覗き穴から外を見るとそこには黄色い耳が……

「カルカルー、起きてるー？起きてないなら返事してー」

この間延びた声とあだ名ってやっぱり……

「寝ていては返事できないでしょう？」

ドアを開けて呆れながらのほほんさんに答える。もう、この人は本当に……

「えへへー、こういうと皆突っ込んでくれるんだー。優しいよねー」

いつものダボダボのパジャマにずり落ちてきた耳付ナイトキャップを直しながらのほほんさんがそう言いました。それはいいんですけどその耳の部分どうやって動かしてるのかすごい気になるんですよ……

どうでもいいですけどのほほんさんの制服は改造制服で袖だけ異様に長くしてあります。あれ不便じゃないんでしょうか？

閑話休題。

しかし、のほほんさんですか？なんの用でしょう？

「で、何の御用ですか？」

「そうそうカルカルー、ビッグニュースビッグニュースー！」

「はいはい。それでその内容は？」

「あのね、学年別トーナメントで優勝した人はオリムーと付き合えるんだってえー！」

.....

はい？

「あの、それってどういう…」

「うんとね、実は…」

「あー！まだこんなところにいる！」

廊下の角から急に声が聞こえました。声のほうに顔を向けるとクラスメイトの相川清香さんがのほほんさんに向けて指を突きつけています。

あの…状況がさっぱり飲み込めないんですけど

「あんた遅すぎるの！さつさと行くわよ！」

「ほえー、でもでもー」

「いいから来る！今日中に全体に広めるわよ！」

そう言つと相川さんはのほほんさんの首根っこを掴んで走り出しました。その様は飼い主と飼い猫そのまま…って！

「あ…ちよ、ちよつと…？」

「ごめんカルラ！今急いでるから！」

「じゃねー、カルカルー」

さ、流石ハンドボール部。鍛え方が半端ではありませんね。一人を抱えながらものすごいスピードで元の曲がり角に消えていきました。

でもなんですかそれ。

『学年別トーナメントで優勝した人はオリムーと付き合えるんだってえー！』

先ほどののほほんさんの言葉が頭の中で再生される。

「はあ……」

ため息しか出ませんよもう……

次の日の朝、一年生の全クラスがこの話題で持ちきりになったのは言うまでもなく、一夏さんがこの話題を知らないのもまた、言うまでもないでしょう。

そしてそれを聞いて生まれる修羅が2人……隣のクラス、二組から響き渡る奇声が一つ……

平穩って……なんなんでしょうね……

3 - 5 (後書き)

連投5回目でした。

第5の刀が届いた話でカルラがそれに魅入られるっておいしい！遂にキヤラが一人歩きを始めたような気がする！

『緋宵』と『明動陽』の設定についてはオリジナルですので突っ込んでくれて構いませんよ！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者のテンションがパーン！します！

原作設定のコーナー

第5回目のこのコーナー。今回は前回に引き続き一夏の恋人候補、ファースト幼馴染兼IS開発者の妹のこのお方！

???「篠ノ之箒だ。っておい、何故私がセシリアと鈴の後なのだ？」

うい！という訳で今日は箒さんたちも通っているIS学園についての説明をお願いします！

箒「聞かんか！」

いやだって箒さん代表候補生じゃないからそこら辺の説明難しいと思っ…

箒「な…！馬鹿にするな！私だっであれくらいの説明は出来る！」

でも一夏さんに教えるとき擬音ばっかだったし…

第「あ…あれは一夏が初心者だからあの方が分かりやすいと思ったからで…断じて私がああ思っているわけではないぞ！」

分かりました。では今回しっかり説明をして出来るってところを皆に見せてあげましょう。

第「当然だ！」

（乗せやすい！）

第「IS学園についてだったな。IS学園はISの操縦者育成を目的とした教育機関だ」

………

第「……………」

……………？

第「どうした？」

……………説明……………終わり？

第「これだけ分かれば十分だろ」

そんなわけないでしょおおおお！そんなの本編読んでは誰でも分かるの！そのIS学園の成り立ちとか裏側とかを知りたいの！

第「う…うむ。分かっている。しかし言われもしないのに長々と話すのは悪いと…」

いいから話して！

第「わ、分かった。では説明するぞ。えつと……IS学園はISの操縦者育成を目的とした教育機関だ」

それはさっき聞いた。

第「わ、分かっている。黙って聞け！…ゴホン！その運営及び資金調達にはIS条約で原則として日本が行う義務を負うことになっている。ただしIS学園で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本にはないのだ。またIS学園内におけるいかなる問題にも日本は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務付けられている。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること、とこれでどうだ。しっかり説明できているだろ？」

あの一、第さん？

第「なんだ？」

それIS運用協定の「IS操縦者育成機関について」の項の丸暗記ですよ？

第「うぐー！」

そついうのいいんで入学してからじゃないと分からないこととかお

願います。

第「め、名目上は高校なので普通の高校より少ないが通常授業があり期末試験が存在するぞ」

うん、で？

第「く……」

で、他には？

「……」
（スラッ）

あの…なんで『**緋宵**』抜いてるんで…

「死ね！」
(ビュン)

うわ危っ！掠った！今掠ったぞ！

「第「貴様さえいなければこんな辱めを受けることもなかったんだあ！」（ブン）」

前髪がががが！それでは殺される前に今回はこの辺で！

「その首もらった！」
(ブオン)

ウワアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

追記

第うてすこい弄りやすくて可愛いので今後も出てもらうかも…生きてれば…

(その後作者を見たものは次の日まで誰もいなかったという)

3 - 6 (前書き)

連続投稿 6 回目！

「ですからここでビットを出して追い詰めようとし訳でして…」

「でもその位置からだとセシリアさんが止まっているのが丸分かりになってしまいますよ？」

「…で、ですがここはこの手が最善で…」

「ここは無茶でも鈴さんと連携して接近戦の方が良かったのでは？隙が出来ればビットも使えますし…」

時間は『学年別トーナメントで優勝したら一夏さんと付き合えるらしいよ』騒動の放課後。場所は更衣室から第3アリーナに抜ける廊下で、今は歩きながらこの間の山田先生との対戦映像を映像端末で見ながら移動しているところです。

そしてこの後はトーナメントに向けた模擬戦を予定。そのために私とセシリアさんはここに来ています。廊下を抜けてアリーナに出ると誰もいないようでした。

時間が早かったせいかなまだ私たちしか…

「」「あ」「」

失礼、先客で鈴さん私たちの真横で準備していました。

「奇遇じゃない。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。私たちも全くも同じですわ」

どうやら鈴さんも今来ただかりのようです。そして例の噂のせいなのか二人の視線の間には火花が散っているように見えます。

「丁度良い機会だし、この前の実習の事も含めてどっちが上か白黒ハッキリさせとくつても悪くないわね。カルラも含めて」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。誰がより強く、より優雅であるか、この場所ではつきりさせましょうではありませんか。カルラさんも含めて」

「ええ!？」

何故そんなことになってるんです!？逃げる間もなく両腕を掴まれましたよ!？

「だってあんたセシリアに勝ったんでしょ?てことは少なくともこいつよりは強いってことじゃない。ならセシリアより練習になるつてもんでしょ?」

「鈴さんのその言い方は非常に…ひじょーーーーーに気になります
が事実が変わりません。カルラさんは私の友にしてライバル!ここ

でリベンジさせていただきますわ!」

鈴さんはセシリアさんを見ながらニヤニヤとし、セシリアさんは顔を伏せて悔しそうにしながら、顔を上げた瞬間にはもう目に炎が宿っています。

これもう相手にしないとこの場から逃げられそうにありませんね。そもそもセシリアさんとは模擬戦する予定でしたし…

言っている間に鈴さんもセシリアさんもISを展開してしまったので私もISを展開します。

「はあ、分かりました。お相手しましょう。ただし1対1でお願いしますよ?」

「あつたりまえじゃない!」

「では私から…」

セシリアさんが言葉を続けようとした瞬間…

警告! 警告! ロックされています!

ISの警告と共に全員が飛来した超音速の弾丸を回避しました。弾丸が何もないアリーナの地面を吹き飛ばし砂煙を巻き上げます。これは…

データ検索、80口径レールカノンと確認

レールカノン？ということはまたあの人ですね。

砲弾の飛んできたほうを見ると予想通り、漆黒のISを身にまとったボーデヴィツヒさんがたたずんでいました。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアさんの声が強張っているのが感じ取れますね。

「どういふつもり？いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

鈴さんも軽口を叩いていますが『双天牙月』を肩に預けて『龍咆』を発射態勢に持っていつてる辺り警戒レベルは高いです。一夏さんをボーデヴィツヒさんが叩いたと聞いてから鈴さんは特にボーデヴィツヒさんに嫌悪感を現していますから無理ありません。

というよりいきなり撃たれれば誰だって警戒しますか。私も『ラングリスニ』抜いちゃってますしね。

「中国の『甲龍^{シエンロン}』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』……それにオーストラリアの『デザート・ホーク・改』……ふん、搭乗者のせい
かデータで見たときの方が幾分か強そうではあつたな」

分かりやすい挑発ですね。その程度の軽口は鈴さんやセシリアさんで慣れっこですよ私は。

「で？やるの？わざわざドイツくん dari からやって来てボコボコにされたいなんて大したマゾっぷりね。それともあれ？じゃがいも畑じゃそういうのが流行ってるの？」

「まあまあ鈴さん、こちらの方はどうも言葉が伝わってない様子ですからあまりいじめるのはかわいそうですわよ？」

二人ともしっかり挑発に乗っている…良くも悪くも乗りやすい性格なんですから…

それにしてもこういう時は仲いいですね。

「二人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬ者が専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数しか能のない国と、古さだけが取り柄の国はな。さらに言い返すだけの度胸もないクズも一緒か…」

ボーデヴィツヒさんが私を冷やかな目で見てきますが、まあ言いたいだけ言えいいですよ。私は私のことを言われるのは平気なんですから。

でもお二人は今の言葉で完全に頭に血が上ったようですね。

『甲龍』 『ブルー・ティアーズ』 共に最終安全装置の解除を確認
つてええ！？

「ちよちよちよ！お二人とも！それはまずいですって！」

最終安全装置の解除、それは模擬戦ではなく本当の戦闘をやり合うという宣告。つまり命の保障は出来ない殺し合いの始まりを意味します！

ここは戦場じゃなくて学園のアリーナなんですよ！？せめてISバトルに留めるべきです！

「何言ってるのよカルラ！相手がスクラップをお望みなんだからその望みは叶えてあげないとね！」

「そうですわよカルラさん。ああ鈴さん？私は頭部を吹き飛ばすだけで結構ですわ」

額に青筋浮かんでますしこれはダメですね。暴れないと収まりそうにありません。

「はっ、三人がかりで来たらどうだ？下らん種馬を取り合うメスにこの私が負けるものか」

ブチン…

あー、これダメですね。私のことならまだしも友達（一夏さん）のこと言っちゃいましたか。今までは本人がこの場にいるので我慢できましたけど…

「今なんて言った？あたしには『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「この場にはいない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬように今ここで叩いておきましょう」

「お二人とも、私も加わりますよ。いいですね？」

「「カルラ（さん）？」」

「自分のことはいいんですよ。ですけどね…友達のことを言われるのは我慢ならないんですよ、私は…」

自分でも沸点低いと思ってしまいますけどね。これだけは性分なもので変えられないんですよ！

言うと共に左手に『アイギウス』を展開します。

「とつとと来い」

ボーデヴィツヒさんが右手をクイクイと上に向けて挑発すると同時に戦端が開かれた。

3 - 6 (後書き)

てなわけで6回目！

ちよつと短めの前編後編分けての投稿です。ラウラVS3人の代表候補生、ここからどうなるかは明日をお楽しみに。何気2巻分に入ってから始めてのIS戦闘です。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者のテンションがジヨノサイドブレイブ
アアアアア！します！

原作設定のコナー

現段階で主要キャラをほぼ使い切ってしまった…ということですが
はモブキャラに登場していただきます。

今回はカルラたちのクラスメイトのこのお方！

???「皆さんこんにちは。出席番号一番、相川清香！趣味はスポ
ーツ観戦とジョギングだよ。よろしくお願いします！」

モブキャラ登場第一号です！よろしくお願いします！

清香「はいはいよろしくー」

モブキャラはキャラが定まらない可能性大ですけど読者の方もそこ
ら辺は寛大にお願いします！

清香「で？今日は何を説明すればいいのかな？」

うい、初の部活要因ということでIS学園の部活動についてお願いします。

清香「おっけい任された！基本的にIS学園は高校って言うのは知ってるよね？そのお陰で基本的に有名どころの部活は大体揃ってるよ。まず運動で言えば私の所属してるハンドボール部を筆頭にテニス、ラクロス、サッカー、バスケ、新体操、剣道、柔道、弓道とかとか。上げたらキリがないからこころ辺にしておくけど無い部活は無いって感じかな」

ほうほう、文化系はどうです？

清香「そっちは専門じゃないから少し雑になるけどこっちも同じ感じかな。有名所の新聞部から美術、吹奏楽、放送、料理とかそんな感じ。あ、文化系で忘れちゃいけないのが我らが千冬様が顧問をしている茶道部ね！めちゃくちゃ厳しいらしいけど…」

なるほど。千冬様が顧問の茶道とか一般人には無理ゲーですね。

清香「ま、通ってる人も一般人じゃないからそこは大丈夫なんだろうけどね。そうそう、結構マイナーで面白い部活もあるよ？部活って言うよりよくある同好会みたいな感じの」

お、じゃあいくつかお願いします。

清香「分かりやすいので言えば『IS研究同好会』とかかな。各国が開発してるISを研究して独自の結論を導き出したりしてる人たちの集まり」

あれ？でもそれって結構人数いそうなのに同好会止まりなんですか？

清香「この間鳳さんが話してたでしょ？ISは開発しても開示義務があるから個人レベルで研究する意味自体があんまりないの。それやるなら自分自身の使うISの技術を鍛えた方が効率的だしね」

あー、そう言えばそうでしたね。そんじゃ次をお願いします。

清香「面白所と言えばそうだね。『漫画同好会』ってあるよ。毎年夏と冬に日本の祭典で本出してる同好会」

あの……それってあれですよ？あの有明の一大イベント……

清香「まね。IS学園の生徒の写真売ってる人も一緒にいるみたいだけど……あ、もちろん個人の許可は取った上で売り上げの一部は報酬で渡してるよ？」

あんま深く関わりたくないので次行きましょう…

清香「はいはい。で、やつぱり一番は『千冬様に付き従う同好会』かなあ？千冬様の学園内ファンクラブみたいな感じの同好会だね。ちなみに私も所属してるよ」

それもう部活じゃないですか？

清香「この学園のほとんどの人は所属してるからもう同好会レベルじゃないんだけどねー。部活にするには先生の許可貰わなきゃいけないでしょ？だから絶対部活にならないの」

ですよー。千冬様が許すわけ無いですもんねー

清香「んー、こんな感じかな。同好会については個人でやってる人もいるし、正確な数と種類を把握してる人は生徒会長以外いないと思うよ?」

分かりました。ありがとうございます。では今日はこの辺で。

清香「出来たら織斑君との出番を増やして欲しいなー、なんて」

考えておきます。ではでは（原作設定といいながらほとんどオリ設定じゃねえか…）

3 - 7 (前書き)

連続投稿7回目！

ドゴオン！

「ぷあ！」

レールカノンの弾丸をギリギリで避けて、その砲弾が巻き起こした砂煙から脱出。

続いて連射される弾丸も『アイギウス』で防ぎ…

ゴアン！

「くう！」

レールカノン直撃の衝撃に『アイギウス』が少しへこみ、殺しきれなかった勢いで少し飛ばされる。

流石にあの口径の弾丸を正面で防ぎ続けるのはきついですね！

同じように煙の中から抜け出してくる影が二つ。

セシリアさんと鈴さんです。

二人とも一部の装甲を失っていますがまだまだいけますね。

警告、警告！

ISの警告が終わる前に砂煙を切り裂いて6本のワイヤーブレードが私たちに襲い掛かってきます。

切り裂かれた煙の先には漆黒のIS『シュヴァルツェア・レーゲン』が一瞬確認できました。

「こなくそお！」

襲い掛かるワイヤーブレードを掻い潜って『双天牙月』を両手に持った鈴さんが突撃をかける。

「ああ、もう！カルラさん援護を！」

「はい！」

セシリアさんが射出していたビットを一度止めてライフルでの狙撃に切り替える。

私も左手の『ラングニス』でワイヤーブレードを迎撃しながら右手の『ラングリズニ』でボーデヴィツヒさんを狙い撃つ。

「はっ！まともな連携も取れないで私に勝てると思っっているのか！」

ボーデヴィツヒさんが両手からプラズマ手刀を展開して鈴さんを迎撃する。こう接近戦になると射撃しづらいことこの上ない。下手したら鈴さんに当たってしまう！

「セシリアさん！援護お願いします！」

「お任せを！」

私も接近戦に行くために両手の武装を戻しつつ、右手で『レーヴアテイン』を掴んで一気に滑空する。

ボーデヴィツヒさんがそれを感じたのか私にワイヤーブレードが集中しますけど…

「させませんわ！」

私に当たりそうになったワイヤーブレードはセシリアさんの正確無比な射撃で弾き飛ばし道を開いてくれます！

「落ちろお！」

「はっ」

鈴さんが得意の連続攻撃を仕掛けられない訳。それはボーデヴィ

ツヒさんが両腕から展開している二刀流のプラズマ手刀の他にもう一つ。

「ぐっ！」

「落ちるのは貴様だったようだな」

いきなり鈴さんの動きが停止する。

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー

AIC、慣性停止能力。名前の通り全ての物体の慣性、つまり動きを停止させることが出来るドイツの第三世代兵器。

理論の上では実弾兵器はほぼ無効化でき、一対一の接近戦において相手の動きを止められるということはその時点で決着を意味する特殊兵装。

「させません！」

ゼロ距離でレールカノンを鈴さんに向けたところに向けてエネルギーを展開した『レヴァテイン』をボーデヴィッヒさんの頭部に向かって振り下ろす。

「ふん」

「な……！」

ほとんどこちらを見ないで避けられた！？

そう思った瞬間、ほぼ零距离でボーデヴィツヒさんの冷たい目と視線が一瞬合った。

感情の籠らない……なんて……冷たい目なんでしょう……

「カルラ！離脱！」

鈴さんの言葉に咄嗟に距離を取る。

鈴さんが『龍咆』をボーデヴィツヒさんに向け、発射。

しかしボーデヴィツヒさんが右手を鈴さんの方に向けただけで、いつまでも衝撃砲の砲弾は炸裂しない。

「無駄だ、この『シユヴァルツエア・レーゲン』の停止結界の前ではな」

「く！こうも相性が悪いだなんて！」

鈴さんの言葉から『龍咆』を撃っているけど全て無効にされているでしょう。AICの特性上、鈴さんの『龍咆』は相性が最悪です。

衝撃砲は以前一夏さんにも話したとおり空間自体を圧縮してそれを撃ち出す空気砲と同じ原理の兵器。

ならばその勢いが止まってしまえば……その衝撃は元の空間に戻り圧縮された空気は楔を解かれてすぐに霧散してしまう。つまり鈴さ

んの砲撃は今、実体兵器よりも効き目がないということ。

「名前ばかりの第三世代など私の敵ではない!!」

離脱しようとしていた私と鈴さんに6本のワイヤーブレードが迫る。

「私を忘れてもらっては困りますわね!!」

先ほど止めていたビットが私と鈴さんが離れたことで再度動き出し、4方向からボーデヴィッヒさんを狙う。

「ふん、理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の完成度で第三世代型兵器とは笑わせる」

ビットから放たれるレーザーの嵐を避けながら再びボーデヴィッヒさんが左右の腕を突き出す。

AICによつてビットは全て沈黙し空中で動きを止められてしまった。

「動きが止まりましたわね!!」

その瞬間を待っていたのか、セシリアさんが『スターライトmk
?』を構えているのが目に入って……まずい！

「貴様もな」

「へ？きやあああああああああ！」

その狙撃への移行も読んでいたのでしょう。

私と鈴さんに向かっていたはずのワイヤーブレードの1本がいつの間にかセシリアさんの真下に。それがセシリアさんの右足を絡めとり、そのまま地面に叩きつけた。

「よくも舐めた真似をお！」

鈴さんがワイヤーブレードを弾いてボーデヴィツヒさんに向かう。『龍咆』が効かないのであれば鈴さんの攻撃方法は近接戦闘しかない。

でもそうなるとワイヤーブレードはほとんど私一人で請け負うことになるんですけど！

「私があいつを倒すまで頼むわよ！」

貧乏くじですよそれ…まあやりますけど！

右手の『レヴァテイン』を一度腰に戻して、再び両手に『ラングリスニ』『ラングニスト』を構えてワイヤーブレードの迎撃を開始する。

しかし鈴さんの攻撃の鋭さは青龍刀を連結してからの回転攻撃があるからこそです。相手は二刀流、更には大口径のレールカノンと私の撃ち漏らしたワイヤーブレードも使える。

こうなるといくらISの機能、操縦者の腕が同様でも受けに回るしかありません。

予想通り鈴さんは押され気味で、押し負けることはないでしょうが攻めきれしていない状態です。

「そろそろ決めるか」

「やれるもんならやってみろってのよお！」

二人がそう言った瞬間、私の背後から巨大な煙が立ち上がる。見ると右足を縛られたままのセシリアさんがワイヤーブレードで引っ張られていくところだ。私も同様の武装を使っているから分かる。

これからやろうとしていることが！

「く…！」

間に合わなければ鈴さんにセシリアさんが叩きつけられて、動きの止まった二人にレールカノンが直撃する！

『レヴァテイン』の展開時間は残り10秒程度、ここで使えばボーデヴィツヒさん相手には使えなくなりますが…剣は捨てましょう！

ブースター全開、『レヴァテイン』エネルギー最大展開

引っ張られていくセシリアさんに追いつくと右足のワイヤーブレードにいつもの1.5倍程度の長さのエネルギー刃を展開した『レヴァテイン』を振り下ろす。一瞬の火花と共にワイヤーブレードが焼き切れてセシリアさんが解放されました。

「きゃ！ゴホン…助かりましたわカルラさん」

「どういたしまして！鈴さんは！？」

これで『レヴァテイン』はしばらく使えません。ボーデヴィツヒさん相手にはもう使う機会はないでしょう。再び背腰部に『レヴァテイン』を戻し…

警告！敵IS急速接近！

「な！？」

いつの間に！？

そう思った瞬間には既に漆黒のISが目の前に出現している。

先ほどまで鈴さんの相手をしていて今ここにいるということは…
まさか『瞬時加速』！？

鈴さんの相手をしながら行ったということですか！？

「邪魔をするな」

ガン！

「きゃあ！」

考える間もなく頭部に『シュヴァルツェア・レーゲン』の全体重
をかけた回し蹴りを食らって弾き飛ばされた。

「この…！」

何とか地面に激突する前に体制を整えて着地する。

敵弾接近！

息つく間もなくISが警告を出す。辛うじて避けると…一瞬前ま

でいた場所にレールカノンの砲弾が炸裂して大穴を作り出した。

「甘いな」

「くう！」

そしてそれを見る間もなく聞こえる相手を見下す冷徹な声。

私の頭上からは迫り来る回避不能のワイヤーブレードが3本。

動きを…読まれた！？

「……のお！」

直撃する刹那、一瞬体を捻ったことが功を奏したのか、ワイヤーブレードの直撃は回避に成功。

その代わりに左足の『スレイヴニル』が装甲ごと？ぎ取られ、両腰の『ラングリスニ』『ラングニスト』が真つ二つになり中の弾薬に引火して爆発する。

「ぐ…うあ！」

いくら絶対防御があるとはいえ爆発の余波と衝撃までは消せない。爆風で体が前に押し出されてその衝撃が全身を襲う。

ガシャン！

姿勢制御も間に合わず甲高い金属音と共に仰向けに倒れこんでしまった。

現状確認。シールドエネルギー残量150、ダメージレベルB
ー、『ラングリスニ』『ラングニスト』損失、『スレイヴニル』一
機破損、『レヴァテイン』再稼動まで後35秒、残存武装…

「あ……がつ！？」

「鈴さん！」

鈴さんの左肩の衝撃砲がワイヤーブレードに貫かれて爆散し、その余波で鈴さんが弾き飛ばされるのが見えた。

そう、今は現状なんてどうでもいい！

状況確認を後に回して緊急起動。全部位のブースターをフル稼働で一気にボーデヴィツヒさんの真下まで移動する。まだ『瞬時加速』は使えないのでこれが精一杯の加速！

両手を交差させて両肩の突起部分を掴むと同時に武装拘束を解除…

風を切る音共に『ヴェルフェルム』が私の所に、つまり直線状にいるボーデヴィツヒさんに向かって飛来する。

「ふん、ブーメランか。そうやって自分たちで気を引けば当たるとでも思ったのか？」

ボーデヴィツヒさんは『ヴェルフェルム』のことを知っているのでしょう。そう言つと自分の後ろに二本のワイヤーブレードを守るように展開します。

私は鈴さんのほぼ真後ろに影になるように位置取る。ブーメランはばれているでしょうけど…

そもそもそれが当たるとは思っていないからね！

「鈴さん回避！」

「へ？…って危な！」

「何！？」

鈴さんが慌てて回避すると同時にボーデヴィツヒさんに飛来していた『ヴェルフェルム』が左右ギリギリを通過して（……）私に戻ってくる。

『ヴェルフェルム』は手に持つことでエネルギーナイフとして接近戦で使うことの出来る。戻ってきた『ヴェルフェルム』を両手で

掴み取ってエネルギー刃を展開したまま、ブースターを全開にして突撃する！

「はあああああ！」

「意表をつけば攻撃が当たるとでも思ったか？遅いぞ！」

「う…！」

突進の途中で私の体の動きが完全に停止する。隙を突いたはずなのにAICに捕らえられた。流石ですね…

「貴様はISより曲芸士がお似合いだ」

「く…！」

レールカノンの砲口が大きな金属音と共に私に向けられる。

でもそれが有効なのは私が一人の場合だけなんですよね。
なんで私が鈴さんと一緒に突撃したか分かってないんですか？

「貰いましたわ！」

「ち、鬱陶しい！」

レールカノンの発射直前にボーデビツヒさんが回避行動を取り、その場所にビットのレーザーが通り過ぎる。

「私もいるって…言っただけでしょうがぁ!!」

「この！雑魚共がぁ！」

回避先を読んで『双天牙月』を鈴さんが振り下ろし、ボーデヴィツヒさんがそれを忌々しげに展開したプラズマ手刀で受け止めた。

その途端、体を縛っていた感覚が消えた。
動ける？え、どうして？

「やはり貴様から落ちるか赤いの！」

「やれるものならやってみろってのよぉ!!」

「そろそろフィナーレと参りましょう！」

再び空中で交差する黒と赤と青のIS。今は考えるより行動ですね。

私もAICに対応できる『フェンリス』をオープンし再度戦線に加わろうとした瞬間……

『何をしている貴様ら!』

アリーナのスピーカーから聞きなれた声が響き渡りました。

この声は…織斑先生?

『模擬戦をやるのは構わん。だが最終安全装置を解除してやるとなれば容認しかねるぞ。この戦いの決着は学年別トーナメントまで預からせて貰う。全員さつさとISを解除しろ』

「教官がそう仰るなら」

ボーデヴィツヒさんは素直に地面に降りるとISを解除しました。

『では学年別トーナメントまで一切の私闘を禁ずる。さつさと戻れ』

私たちも地面に降りてISを解除します。ボーデヴィツヒさんはそれを見てアリーナの出入り口へと引き返していく途中で一言…

「は、命拾いしたな」

そう言って去っていきました。

「こっちの台詞よ」

「まったくですわ」

ボーデヴィツヒさんがアリーナから去り、見えなくなった途端…

「あー、ゴメン。もう無理かも…」

「私もそろそろ限界ですわね……」

「じ、実は私も…」

ドサドサドサ

私たち3人はほぼ同時にその場に倒れこんでしまいました。

助かった…で、いいんですよね？

3 - 7 (後書き)

はい、と言うわけで3章に入って初めてのIS戦闘いかがだったでしょうか？

決着つかずのまさかのドローゲーム。だがこれがやりたかった！

代表候補生3人ならいくら強くてもドローくらいもっていけるはず
と思います。ここはゆずれなかった！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者のテンションがスピキュール！！！！します！

あ、ちなみに今回は設定のコーナーはお休みです。楽しみにしてた方はすいません。

3 - 8 (前書き)

連続投稿 8 回目！

ボーデヴィツヒさんとの戦闘の後、私たち3人は保健室に來ていました。

何でつてそれは…

「痛たたたた！あんたもう少し優しくできないの！？」

「代表候補生でしょう？少しは我慢してくださいませ」

「あんだだつて痛いでしょうが！」

「痛つ！何なさいますの！この！」

「痛いって言つてんでしょうが！」

横のベッドでは鈴さんとセシリアさんが互いに手当てしあっています。この突つきあいを手当てと言うべきなのか置いておきましょう。

保健室の先生は不在だったので勝手に使わせてもらっています。私もそうですがお二人とも代表候補生なので道具さえあれば簡易治療くらいならできるんです。

代表候補生は将来国家の代表を担う可能性のある人物。生身の時ですえあらゆる状況に対応できるように、訓練で技術を身に付けさせられます。特に未だに不明な部分の多いISは、いづどんな不具合が出るかも分からない。

ですからISが使えない状況になっても自分で自分を守れるよう

に訓練を受けています。

鈴さんは左肩に、セシリアさんは背中に打撲を負っています。私は左足と腰の部分に大きな打撲を負っていて、今は自分で出来ないところを包帯やシップで治療しあっているところです。

「はい、終わりましたわよ」

「はあ、じゃあ今度は私があんたにやる番ね！」

鈴さんが仕返しとばかりに手をワキワキと動かしています。絶対何か変なことするでしょうその手つきは…

「カルラさんお願い致しますわ！」

流石にあの鈴さんからは逃げますよね。私も逃げたいです。

「分かりました。鈴さん、薬取ってください」

「ぐぬぬ、しょうがないわね」

鈴さんが悔しそうに呻いていますがこれ以上付き合っていると時間がまた掛かってしまいますのでちゃちゃっとやりましょう。

セシリアさんが上半身だけ裸になって私に背中を向ける。とりあ

え、塗り薬を塗って…

「ひゃ！」

「あ、痛かったですか？すいません」

「い、いえ。ちょっとくすぐったかったただけですわ」

「そうですか。では続けますね」

うーん、それにしても綺麗な肌です。真っ白でモデルみたい…つてセシリアさんは実際モデルも兼ねてるんですね。

代表候補生は国の代表という意味合いもあってモデルやアイドル的なことをやってる人が多いです。なので噂ではIS適正が高くてもビジュアルで選ばれなかった人もいるとかいないとかそんな噂もあります。あくまで噂ですけど。

薬を塗り終えてシップを貼って、と。

「はい、終わりです」

「では最後はカルラさんですわね」

「腰ってまた面倒なところよね。座るときとかめっちゃきついじゃない」
「い」

「まあ仕方ないですよ。さっさと終わらせましょう」

腰なので一回脱がないといけないんですね。面倒ですけど放っておくと痛いだけで中々直りませんし。

スカートを下ろして下着も…

プシュ！

扉が開きました。

「3人とも！大丈夫……ぶ……？」

一夏さんがいます。多分アリーナの話聞いて文字通り飛んできたんでしょう。

その気持ちは大変嬉しいです。嬉しいんですけど……現状を説明しましょうか？

セシリアさんは制服を羽織っただけでまだ前を止めておらず白い肌と豊満な谷間が制服の間から見えています。

鈴さんは左腕の調子確かめるために腕を上げていて下着の線が見えています。

そして私は…

私は…スカートを下ろして下着に手をかけている状態な訳で……

…わけ…で／／／／／

顔面お化けになった一夏さんに鈴さんが枕を投げつけました。

「せせせせせせ、責任とって頂きますからね！」

「むぼ…！」

セシリアさんが誰が置いていったのか分からないお見舞いのリンゴを投げつけました。

「無かったことに！」

「うお！タンマタンマ！それは止めてくれ！」

「ちょ！それは流石に不味いわ！」

「そうですね！殺してしまっただけは責任は取ってもらえせんわよ！」

私が果物ナイフを投げようとしたら何故か鈴さんとセシリアさんに止められました。

何ですか！私にも投げさせてください！この恥辱を晴らせてください！

「いや…まあ何にしても、3人ともたいした怪我がじゃなくてよか

ったよ。箒が知らせに来てくれた時は本当に驚いたんだからな」

復活早いですね。これなら果物ナイフくらいいけないのでは？

つと、流石に引かれてしまいますから置きましょう。

果物ナイフを置くと鈴さんが振り返るように呟きました。

「それにしてもまさかあいつ一人にここまでやられるとは…一対一なら完敗ね」

「ですわね。私の射撃も全て見切られていましたし…もつと精進しなくては」

「左目の眼帯を外さずにあの強さですからね。距離感の問題もありますし…最初から両目で来ていたら私たち3人は全員危なかったかもしれません」

そう、それほどまでに強いです。

あの人の強さなら眼帯さえなければ私たちを文字通り潰せたはず。それをしなかったのはただ単に外すまでもなかったのか、それともそれ以外の理由があったのか。どちらにしろ私はまだまだ力不足なようです。これではいざという時に大事なものを守れませんね。

「飲み物買ってきたよ」

飲み物を買いいに出ていたデュノアさんが戻ってきました。

「鈴さんはウーロン茶、セシリアさんは紅茶、カルラさんはオレンジジュースね。はい、どうぞ」

「はあ、ありがとう」

「ありがとう、いただきますわ」

「ありがとうございます」

何で私の好きな飲み物がオレンジジュースって知ってるんでしょうか？謎です。

あ、そういえば篝さんがいませんね。
恐らく借りたISの整備でしょうけど。

チビチビとオレンジジュースを飲んでいると…

トトトトトトトトトトトト

な、何やらものすごい音が廊下から…

「な、なんだこの音!?!」

一夏さんにも聞こえるということは私の気のせいじゃないみたいですね。他の人も廊下に目を向けてますし。

なんというか前にテレビで見たヌーの大群とかの足音に似ています。

あ、保健室の前で止まりましたね。

と思つた瞬間…

ドカーン!!

保健室のドアが吹き飛びましたよ!?

なんですかこれ!?!火薬でも仕掛けてたんですか!?!?テレビ以外でこんなの初めて見ましたよ!

「織斑君!」

「デュノア君!」

クラスメイトの皆さんを筆頭に文字通り保健室に雪崩れ込むように皆さんが入ってきて一瞬で保健室が埋まりました。この保健室ベツドが5つもある大きなとこなんですけど…

あ、のほほんさんもいますね。ベッドで跳ねてはいけませんよ。埃が立つ上にスプリングが弱くなりますから。

「な、なんだなんだ!?!」

「ど、どうしたのみんな。と、とりあえず落ち着いて」

流石のデュノアさんも顔が青くなってますね。

「……………これ！」「……………」

一夏さんが渡されたのは、えと…学内の緊急告知文書？

「な、なにに？えつとお『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締切は…』」

「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！」

一夏さんが私たちにも聞こえるように音読してくれました。締切読む前に引っ手繰られましたけど。

「……………織斑君！私と組んで！」「……………」

「……………デュノア君！私と組んで！」「……………」

数少ない男性と組もうと皆さん必死です。そうか、だからここに

いる人たち皆一年生なんですね。

しかし……うわあ…これは怖いですね。周囲から伸びる手、手、手に。前に映画でこんな光景見たことがありますよ。

「えっと…」

一夏さんすごい困ってますしデュノアさんも一夏さんと女性の皆さんを交互に見て一夏さんの二倍くらい焦っているように見えます。

「悪い！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

一夏さんの言葉にその場に沈黙が流れます。

まあでもそれが一番いい選択肢だと私も思います。誰か女性なら非難されますが二人だけの男性なら誰からも否定されないでしょう。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりは……」

「織×デュノきた！これでカッル！！」

「今から原稿書き換えないと！」

とりあえず皆さん納得してくれたようで保健室から出ていきました。原稿ってなんの原稿なんですかね？そして何に勝つんでしょう？

「ふう…」

「あ、あの、一夏……」

「一夏っ！」

「一夏さんっ」

一難去つてまた一難。今の内容にセシリアさんと鈴さんが文字通り食らいつきました。

「あ、あたしと組みなさいよ！幼馴染みでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここは私と！」

「な、何！？」

「何バカなこと言ってるんですか二人とも」

ため息をつきながら言った私の言葉に全員の視線がこちらに向きました。でもここははつきり言っておかないと。

「そもそも一夏さんは女性が選べないからデュノアさんを選んだんですよ？ここで二人を選んだらデュノアさんどうするんですか？」

「う、そ、それは…」

「で、ですがカルラさん…」

「それに…」

二人に近づいて耳元で囁く。

「篝さんの居ないところでまたそんなことしたら文字通り殺されま
すよ？」

「う…」

「そ、それは…」

二人ともその一言で冷や汗をかいています。恐らくですけどIS
を使用しないで一番強いのは篝さんでしょう。

下手をすればあの真剣を持ち出して追い掛け回されかねない。

「それに他の皆さんもああ言った手前一夏さんが非難されます。こ
こは一つ貸しを付けるくらいの気持ちで…」

「そう…それも……そうね」

「そうですわね。ここは器の広いところを見せませんと…」

「というわけで一夏さんは予定通りデュノアさんと組んであげて下さい」

「お、おお…なんか悪いな二人とも。この埋め合わせはいつかするから」

「貸し一つね」

「私もそれで構いませんわ」

一夏さんは苦笑いしてますね。この二人に貸しを作ることがどれほど怖いことか…私は想像したくもないです。

「なら私たちどうする？一夏とデュノアがペアってつまり専用機持ちが二人相手ってことよね？それってずるくない？」

鈴さんの言うことももっともですけど…

「まあいい機会じゃないですか」

「それとも鈴さんはお二人相手では勝つ自信がありませんの？」

「何よ、そういうセシリアだって自信ないんじゃないの？何せあん

たの『ブルー・ティアーズ』の武装じゃあ一夏の単一仕様の前では唯の動款的だもんねえ」

鈴さんの言葉は正に的を射たもの。

『ブルー・ティアーズ』はB T兵器の研究ということで開発された機体ですから実弾兵器がないそうです。ということは必然的に『零落白夜』を使用されると射撃全般が通じなくなり、格闘戦で劣るセシリアさんに一夏さんに勝つ術はほとんどないということになります。

「な、なんですって!？」

「何よ!本当のことじゃない!」

「鈴さんの『甲龍』だって一夏さんに負けたではありませんか!」

「ま、負けてないわよ!持ち越しよ!」

「あらあ、どうでしょうね?あの状況で一夏さんに懐に入られた時点で鈴さんの負けは確定していたようなものだと思いますけど?」

「なんですってえ!」

「何ですの!??」

「くぬぬぬぬぬ!」「」

また的確に相手の弱点を言い抜いています。この二人にもう少し素直なところがあれば……

はあ、仲いいんだか悪いんだか……

「二人で組めばいいじゃないですか」

「「え？」」

二人の顔が「何言ってるの？」とこちらを向きますけど……それ以外にありますか？

「鈴さんは一夏さんに勝てる要素がありますし、セシリアさんの『ブルー・ティアーズ』ならボーデヴィツヒさんのAICの影響を受けないレーザー兵器があります。非常にバランスはいいと思いますけど？」

「それを言うなら私はカルラさんと組みたいですわね」

「それあたしがカルラより弱いつてこと！？」

「あら？私はそんなこと一言も言っていませんが、そういう自覚はあるみたいですよわね？」

再び言い合いを始める二人。

あ、頭痛くなってきましたよ本当に……

「私は箒さんとペアを組みますよ。一夏さんが無理なら箒さん人見知りなところありますし案外組めないで抽選になっちゃうかもしれませんから」

「あー、まあそれがいいかもね」

「ですわね。箒さんは専用機も持っていないませんし…」

うんうんと二人とも納得しているようです。どうやら箒さんは専用機がないので勝率が低い 私と組む 私の勝率も下がる 優勝の可能性が低くなる 一夏さん強奪戦のライバルが減る!とこついうことなのでしょう。

私も勝つのが目的じゃなく参加するのが目的なので勝率は問題ではないからそれでいいんです。箒さんには怒られそうですから本気でやりますけど。

「しかし、なんだってラウラとバトルする事になったんだ？」

一夏さんのいきなり核心をついた質問に鈴さんとセシリアさんが急にどもる。

「え、い、いやそれは……」

「ま、まあ。なんと云いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「ふうん？ そうなのか？」

だから何でそこで私に振るんですかねえ：

やっぱりお二人とも篤さんと同じで今の時点で一夏さんへの好意は知られたくないようですね。

「私の性格は知ってますよね？ お二人が馬鹿にされたからです」

「ああ、そか。なるほど」

納得してくれましたね。 鈴さんとセシリアさんもホッとしています。

と、デュノアさんが私の近くまで来て囁いてきました。

「もしかして、一夏の悪口？」

「ええ、その通りですよ。 よく分かりますね？」

「3人の反応を見てればね」

そうやってクスリと笑う姿はやっぱり女性みたいです。

でもその『好きなんだよね。分かるよー』って表情やめてくれませんか！？ 私はあくまで友達として好きなだけなんですよ！？

「まあ何にせよ三人とも無事で良かった。じゃあ俺たちは部屋に戻るよ。後で食堂で会おうぜ」

「お大事にね」

そう言つて一夏さんとデュノアさんは保健室を出て行きました。何か厄介ごとだけ残された気がします…

クイクイ

？

なんでしょう、袖を何かに引っ張られているような…

「ねね、カルカルー」

「わ！？」

の、のほほんさん！？一体いつからベッドの下に！？皆さんと一緒に出て行ったと思つてたのに！

「むー、そんなに驚くなんてひどいなー」

「す、すいません」

でも驚くなつて言う方が無理だと思いますけど……セシリアさんと鈴さんも声が出ないようですし。

「そ、それで何か御用ですか？」

「これこれー。さっきの緊急告知文書あげるー」

「へ？」

のほほんさんの手……というよりダボダボの袖の上に先ほどの緊急告知文書が乗っています。これどうやってここに乘せたかの方が気になるんですけど。

「あ、ありがとございます」

「うーうん。3人とも友達だからねー。じゃあ私は戻るからー」

のほほんさんはそう言つてベッドの下から這い出そうとして

ガンッ！

「あう！」

ベッドに頭をぶつけました…

「あ、あんた大丈夫？」

「う、うん。慣れてるから平気…」

流石の鈴さんも心配しています。のほほんさんは涙目になりながら立ち上がると物凄い遅い速度で保健室の外へと歩いていき…

ベチャ！

「ふぎゃ！」

保健室のドアのレールに足を引っ掛けて転びました。そこでまたゆっくりと立ち上がるとこちらにダボダボの袖を振って再び歩いていき私たちの視界から消えました。

「彼女と組む人は災難ですわね」

「「確かに…」」

セシリアさんの言葉に私と鈴さんは思わずそう答えていました。

3 - 8 (後書き)

というわけで8回目となりました。

今回はラウラ戦後でございます。

のほほんさん！一緒にのほほんしようぜー！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者のテンションがもっていくつ寝るとお正月〜！

あと正月も更新する予定だったのですが、3日まで親の実家に帰省することになったので4日まで家のPCが触れなくなってしまいました。

なので次回の更新は4日です。申し訳ありませんがよろしくお願いします！

年内の更新はこれで最後になります。皆様、よい年越しをお過ごしください！ではでは！

カルラ「来年も『インフィニット・ストラトスIS - オーストラリアの代表候補！？』をよろしくお願いします！」

4 - 1 (前書き)

新年一発目です！

「というわけで箒さん、私と組みましょう」

「何故だ…何故こうなってしまったのだ…」

「箒さん？」

部屋に戻ると箒さんはベッドに座って頭を抱えています。どうしたんでしょうか？

「あのー…」

「そもそもあの約束は私と一夏だけのものではないか……確かにあの時声は大きかった気がするがどうしてもあんな風に伝わったのか……」

「……………あー」

もしかして…いえ、もしかしくなくても『学年別トーナメントで優勝したら一夏さんが恋人になってくれる』騒動の原因は箒さん。しかもその内容は自分が優勝したら箒さんが一夏さんと付き合える、というものだったということですか……

噂というものは刻一刻と変わっていくものなのです。既に付き合いというあいまいな表現は消えて恋人という完全なる言葉が出ていきます。

その時今まで下を向いていた篤さんが何かに気づいたように顔を上げました。

「そうだ！ペアになったのだから一夏と組めば…！」

「それは無理ですよ」

「うお！？か…カルラ！？いつの間に帰ってたんだ！？」

うわーお…全く気づいてなかったんですか……ちょっと傷つきますよそれ……

それに気づいたのか篤さんが続けます。

「ご、ゴホン！け、怪我はもう大丈夫なのか？」

あ、別に気づかなかったことに何か言うわけじゃないんですね。でもその気遣いは素直嬉しいです。

「ええ、ただの打撲でしたからそこまで痛いわけでは…痛っ！」

ベッドに座ろうとして腰に痛みが響きました。

「まあ…なんだ。無茶をするなよ」

「え、ええ。ありがとうございます」

私が大丈夫と言ったので篤さんもそこまで深く言うわけにもいかないでしょう。

「で、先ほどのはどういう意味だ？」

これは一夏さんのペアが無理と言った件ですね。

「一夏さんは既に同室のデュノアさんとペアで出ると決めたそうです。なので一夏さんは無理です」

「な、何！？どどういうことだ！」

「どうもこれもそのままの意味です」

先ほどの保健室のやり取りを詳しく教えると篤さんの怒りも徐々に収まってきました。

「そうか。そのようなことがあったのなら一夏も断れなかったろう…今回は仕方ないか」

「ええ、ですので私と組みましょう」

「そ、そうか？私でいいのか？」

何を言ってるんですか。

「既に鈴さんとセシリアさんのペアは決まってるんですよ？他の専用機持ちは4組とボーデヴィツヒさんのみ。私とその二人と誰がいいですか？」

「む……」

「正直に言いますけど一夏さんとデュノアさん、鈴さんとセシリアさんのペアに普通の人と組んでも勝てませんよ？」

「ぬ……」

「ボーデヴィツヒさんなら勝率は上がるでしょうがあの人と連携できるんですか？私はボーデヴィツヒさんが、4組の人が、箒さんと聞かれれば迷い無く箒さんと答えますよ」

「う……む。そうだな。確かにそうだ」

はい、そう言うと思ってました。ポケットから先ほど貰ってきた申し込み用紙を取り出します。

「というわけで既に私と箒さんの名前を書いた申し込み用紙を持っ

「てきています」

「じゅ、準備がいいんだな…」

「問題は既に解決済みです」

でも名前は書けても本人の承認が無いとどうしようもないんです
けどね。

「で、だ。カルラ？お前はどこから聞いていたんだ？」

「はい？」

「だ…だからあの…独り言をだな…」

あー…

「箒さん」

「ん？」

私は箒さんの肩に手を置いて…

「私は箒さんと一夏さんを応援しますよ」

「う…うむ／＼」

そう言つと篤さんは顔を真つ赤にして俯いてしまいました。
聞こえてたと言つてると同じですからね。
でもこう言つた以上私も責任を持たなくてはなりませんね。

他の人のデータ研究、ギリギリまでしますか。

篤さんとの申込書を出した後、私はその足でIS学園の第1整備室の前にいます。

IS学園は2年生から1クラスだけですが『整備科』が作られるんです。学内でのトーナメント戦、2年生以上が参加するものには、整備科に協力を仰ぎ、複数名からなるチームをつけてもらうのが基本です。

ただ、それはあくまで2年生からであり、1年生の時点ではそこまで必要とされてません。

でも今私はその整備科に頼んでおいたものがあります。
先のボーデヴィツヒさんとの戦闘によって損傷を受けたISの修理、改修が必要だったからです。

圧縮空気の抜ける音と共にドアが開き中に、入ります。

「そっち持ってきて早く！」

「さっさとする！時間は待つちゃいけないよ！」

「そこ！どけていつてんの！」

そこに広がるのは夜だというのに明々と部屋を照らす明かり。それに照らされるのはあわただしく動き回る人。そして飛び回るのは怒号と聞き間違うばかりの指示と注文。さらには金属を削る音や電子音も加わり物凄いうるさい。

多分学年別トーナメントに近いからでしょう。その場はかなりも殺伐としたものを感じます。

「よう、来たか」

後ろから掛けられた声に振り向くと私の後ろには背の高い女性が立っていました。

オーストラリア出身の整備科3年生、リース・マッケンジー先輩。私の『デザート・ホーク・改』の修理・改修をお願いした人です。ショートカットの薄い青髪に碧眼で、身長は180cmと女性ではかなり大きな部類に入ります。

美人にも関わらずその顔には整備のときについたと思われる油を擦った後があり、服装はジャージ。その胸元はその豊満な胸をしまえ切れないと主張するかのように大きく開かれており、谷間が余計強調されています……

横に入っている線が赤色のため、3年生ということがより分かりやすくなっています。

「マッケンジー先輩」

「名前でいいって。同じ国出身なんだから」

「あ、はい。リース先輩」

「とりあえず注文されたのは出来てる。こっち来な」

私の先に立つとリース先輩は目的地に向かって歩き出します。この人、見た目美人なのになんか男っぽい話し方と性格をしています。って、今もう終わったって言いましたか？

「でも頼んだの5時間くらい前ですよ？もう直ってるんですか？」

「百聞は一見にしかず、ってな。とりあえず見てみる」

着いたのは整備室の一角に置かれている一つのブース。そこでは展開された『デザート・ホーク・改』が完璧に修復された状態で置かれていました。

思わず近寄って壊れていた部分をなぞってしまいます。そこには先ほど削られていた装甲はしっかりと作られていて、今まであった細かい傷も全て直されていて初めて受け取ったときと同じように輝

いています。

「すごい…」

「ま、直すだけならな」

私の意識せず出した言葉にリース先輩が答えてくれる。

「何言つてんのよ。こんな忙しい時期に他の仕事持ち込むなんてさあ。ちよつとはウチらの苦勞も考えてよね」

「あ、ISが喋った!？」

い、今ISから声が聞こえましたよ！

「何だ、そこにいたのか綾香」

リース先輩が声を掛けると、ISの後ろから黒髪を肩のところで切りそろえてある女性が出てきました。

あ、なんだ。後ろに人が居ただけだったんですね。

身長は多分160cmあるか無いかくらいでしょうか。格好はリース先輩と同じジャージ。線の色も同じく赤なので3年生ですね。

「他の連中はどうした？」

「フィリとマヤなら疲れて寝てるよ。毎度アンタの無茶に付き合わされる身にもなれっての」

「あー、まあ怒るなよ。可愛い後輩のためなんだからさあ」

「それはさつきも聞いた。で？その子があんたの言う可愛い後輩？」

綾香と呼ばれた先輩はツカツカとこちらに近づいてくると私の顔の前に自分の顔を付き合わせてきました。

「え、えっと…その……」

わ、私は何をしたら……とりあえずお礼を言った方がいいんですかね……

「可愛いけどまだまだ甘さの抜けない顔ね。これから期待……か」

そう言つと先輩は顔を離してくれて右手を差し出してきました。

「初めまして。神月 かみづき 綾香 あやかよ」

「あ、えっと！カルラ・カストです！この度はありがとうございます！」

その手を握り返してお礼を口にとすると神月先輩は肩をすくめて…

「礼なんていって。当然のことなんだから」

「あんたが言うな！」

リース先輩の声に神月先輩が突っ込みました。仲良さそうですね。

「あのねリジー。今はたださえ学年別トーナメントの時期で忙しいのよ？しかも何か知らないけどペア戦ってことになったせいでの調整が忙しいんだからこれ以上他の仕事は持ち込まないでよね！」

「リジー？」

今神月先輩がリース先輩のことリジーって呼びましたね。

「ああ、それ私のあだ名。基本綾香しか呼ばないけどね。こいつあだ名つけるの好きなの」

「と・に・か・く！これ以上仕事は請けないこと！分かった！」

「はいはい、分かったよ」

「あ、あの…すみません！」

私のせいでお二人が喧嘩するようになるとは、大変です。原因は私なので、私から謝らないと。

「ほら、可愛い後輩もこう言ってるんだし、ここは大目に」

「あんたのせいだろ！」

神月先輩は軽く溜め息を付くと私に向き直って言いました。

「別にカストちゃんのせいじゃないからいいよ。それにオーストラリアのESを弄れる良い機会だったしね。ま、私は寝るわ。仕上げはリジーがやっというてよね」

「あ、ありがとうございます」

神月先輩は手を振りながら整備室を出て行きました。いい人みたい。とやかく言いながらも最後まで手伝ってくれたみたいだし、リース先輩に伝えるために来るまで待っていてくれた。うん、私の中でいい人決定。

「んじゃま、私達は仕上げ終わらしちゃいますか」

そう言うത്リース先輩は『デザート・ホーク・改』のコンソールを開くとキーボードを弄ってデータを空中に映し始める。

って物凄く早い！？あつという間に全てのデータが私の目の前に映し出されていく。

「基本的には修理前と変わらずかな。盾を多用する傾向があつたから装甲を少しだけ削って、ちびつとただけだと機動性が上がるようにしておいた。あとこれまだなんだけど、手甲のショットガン『ドラウニプル』の使用率10%切ってる。いらなくね？外そうか？」

リース先輩が映し出されたデータを指しながらそう言います。
た、確かに私もあまり『ドラウニプル』は多用しませんし、言うとおりなんですけど…

「でも…」

「心情的には外したくない、だろ？」

な、なんでばれたんでしょう…

「ISを使ってる人、特に専用機持ちはその機体に愛情に似たよう

なものがあるからなー。データで分かっても外せないって人は結構いるよ」

「そ、そうですね」

「ま、そう言うと思ってたから外す準備もしてないけどねえ。カルラちゃん的に何か直したいところとかある？」

「今のところは特には…」

「そ、んじゃこれで終わりな」

リース先輩は再びコンソールを叩いて今まで映し出されていたデータを全て閉まってコンソールを閉じました。うん、やっぱり早い。

「ちなみに銃は完全に吹っ飛んでたからこっちじゃ直せないの悪しからず。ちゃんと本国から新しいのを送ってもらえよ」

「あ、はい」

明日朝一でやりましょう。メールなら今から送っても大丈夫かな？

「そんじゃ私は友達のIS整備があるからこれくらいで。また何かあったら言ってきてもいいよ」

「はい！ありがとうございます！」

「ただし！」

リース先輩が人差し指をビシッ！と私に突き付けて思いっきり気持ち良い笑顔で言いました。

「今回は初回サービスでタダにしとくけど次からは何かお土産を持つてくること」

「は、はい……」

し、しっかりしてる……

「こういうのは大事だからな。人に物を頼むときは何かお土産があったほうが物事はうまく進む。私も美味しい」

「そっちが本音ですか……」

「ま、それもある。とりあえず私たちの仕事はこれで終了。あとはカルラちゃん次第だから私の感知するところじゃないさ。精々頑張るなよ、期待の新人」

「あ……はい！ありがとうございます！」

そう言うところリース先輩は神月先輩と同じように整備室から出て行

きました。

私は『デザート・ホーク・改』を待機状態に戻し、いつも通り鎖に通して首に掛けます。やっぱり戻ってくると落ち着くな。

その場で頭部のみ部分展開して情報を再確認……ってあれ？

「なんだろう、このデータファイル」

預ける前には無かったはずのデータファイルが存在する。

……うーん、とりあえず開いてみようかな。

ファイルロック解除、映像を再生します

映像？

そこで再生され始めたのは昨日のボーデヴィツヒさんとの戦闘映像。って、何でこんなのが……

私がA I Cで止められた部分で映像が一時的に止まる。その映像に次々と文章が映し出されていく。

「こ、これって…」

映像分析？まさかこれ見ただけであのA I Cの弱点を見抜いたと言うんですか！？

10分以上の分析と文字だらけの画面が消えて映像ファイルが終

了。最後には『Fin?』って…

トーナメントが終わったら羊羹を持って行きましょう。

4 - 1 (後書き)

帰ってまいりました。というわけで壊れたISを直すために整備科に登場してもらいました。この後も出番ある予定です。

3年生はすごいよってところを見せてたくて入れたんですけどあまり凄さが伝わらなかった気がします……うーん、難しい。

リースと神月、後は名前だけ出たフィリとマヤについては2巻分が終了してから設定を上げたいと思います。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者のテンションが明けておめでとうございます！

4 - 2 (前書き)

連続投稿2回目！

学年別トーナメントまで残り二週間と迫った6月の月曜日。

来週の月曜日からは学年別トーナメント用にアリーナが整えられるため練習は今週いっぱいです。最後ということになります。流石に一週間前にもなるとほとんどの人がペアを決めて互いの理解を深めるために練習に力を入れています。

それは私たちも同じで、今日からは一週間は本格的なトーナメント対策です。

「では今日もよろしく頼む」

「はい。では今日から本格的に対策を立てましょう」

そう言うて以前と同じように各Sのデータを空中に映し出す。

『白式』&『ラファール・リヴァイブ カスタム？』

単一仕様能力『零落白夜』と瞬時加速による一夏さんの圧倒的攻撃力と、『高速切替』による多様性役割切り替え（マルチロール）戦法で様々な状況に対応できるデュノアさんの組み合わせ。

『ブルー・ティアーズ』&『甲龍』

両機共に第三世代兵器を持ち、遠距離狙撃とBT兵器により圧倒的アドバンテージを持つセシリアさんに、『龍咆』による見えない

攻撃と『双天牙月』での脅威の連続攻撃が可能な鈴さんの組み合わせ。

そして『シュバルツァ・レーゲン』

AICという一対一ではほぼ無敵の第三世代兵器を持ち、6本のワイヤーブレードと大口径レールカノン、更には鈴さんをも圧倒する熟練度を持った近接格闘能力を誇る一年生の中では恐らく最強と言っても間違いではないボーデヴィツヒさん。

ちなみにボーデヴィツヒさんは締め切りまでにペアが見つからなかったらしく抽選ということになりました。と言う訳で相手は分かりませんが恐らく他の一年生は皆さん『打鉄』か『ラファール・リヴァイブ』と考えていいのでここでは除外します。

問題は未だに一度も会ったことの無い4組の日本の代表候補生、更識たけしき 簪かんざしさんなんですけど、今回は都合でお休みだそうです。

ただ彼女のIS、全然情報が無いんですね。

機体名は『打鉄式』。名前からして『打鉄』の改良強化型の第3世代なんでしょうけど…

製作は『白式』と同じ倉持技研のはずですからデータが無いなんてはずはないんですけど…おかしいですね。

まあ今回は不参加ということなので考えても仕方ありません。このことはまた後日調べましょう。

そして私たちは『デザート・ホーク・改』&『打鉄』

長所を上げれば『ラファール・リヴァイブ』、『甲龍』に似たコンセプトの『デザート・ホーク』は防衛戦闘に耐えるために非常に燃費がよく作られており、どんな戦況にも対応でき、また『打鉄』は

安定したガード型のISのため、こちらでも後付装備により様々な戦闘に対応できる万能な組み合わせです。

ただ…それは悪く言えば決め手にかける組み合わせなんですよ。せめて私のISに第三世代兵器が搭載されていればまた状況は変わるんですけど…

この『デザート・ホーク・改』は第三世代ISではなく、正確には第三世代試作改良型IS。つまりスペック上は第三世代に匹敵するものの、ボーデヴィツヒさんや鈴さんのような空間干涉兵器やセシリアさんのBT兵器のようなものは存在しないのです。

現在本国では急ピッチでオーストラリア独自の第三世代兵器を開発中ですが、いつになるのかはまだ分かりません。

ですから他の国の技術者から見た『デザート・ホーク』の扱いは2、8世代型IS。未完成の不良品という人もいます。

とりあえず今はないものねだりをしてる場合ではないので、今ある現状で何とかできるように頑張らしましょう。

『白式』&『ラファール・リヴァイブ カスタム?』に対する考察

「ふむ、やはり私が一夏を抑えてその間にデュノアはカルラが、というのが王道ではないか?」

箒さんの言葉に私は素直に頷く。

箒さんと一夏さんはどちらも近接格闘を得意にする型で、腕は箒さん、機体は一夏さんが上といった具合なのでなんとかなるでしょ

う。

問題は私がデュノアさんを抑えられるかどうかですが…しかしそれは事が全て上手くいった場合の話。

「それは当然相手も危惧してくると思います。向こうとしてはその逆が有効……なので恐らく纂さんにはデュノアさんが来て、私には一夏さんを当ててくるでしょう」

「む、それもそうだな…」

となれば二人同時は無理ですね…

「ならデュノアを先に二人で落とせばいいのではないか？一夏は接近しなければ戦えない。一夏を牽制しつつ、デュノアを二人で倒す。その後また二人で一夏を倒す。これでどうだ？」

「そうですね。方針はそれでいいでしょうけど……一夏さんは行動が読めないのが厄介なんですよね」

「うむ、それには全くもって同意する」

纂さんがうんうんと頷く。そもそも格闘オンリーの機体と組んだデュノアさんの動きはまだ見たことが無い。そうなると当然デュノアさんは援護に回るのでしょうけど、そういう固定概念は持たないほうがいいでしょう。何せほぼ一瞬で武装を入れ替えられるんですから2トップで突っ込んでくる可能性もあります。

となれば…

「箒さん、『打鉄』って後付装備で射撃武器ありますよね？」

「あ、ああ。確かにあるが…ちょっと待ってくれ」

箒さんがデータを見せてくれます。『これ』は…使い道によっては……

「これ使えますか？」

「むう…この装備は使ったことが無いから……正直使えるかどうかは微妙なところだ」

「なるべく形になる程度でも使えるようにできますか？」

「一週間か…ギリギリだがなんとかやってみよう」

「お願いします」

『ブルー・ティアーズ』&『甲龍』に対する考察

「これはオーソドックスな前衛後衛タイプだな」

「はい。以前の模擬戦の時もセシリアさんは近接武器を出し損ねて

いましたし、2人の機体上恐らくそうでしょう」

「それにこの二人は仲が悪いのではないのか？ならば案外楽だと思うのだが…」

それだといいいのですね。

「油断は禁物です。仲が悪いとは言っても二人とも第三世代ISの使い手の上に代表候補生。型に嵌ったときは私たちは恐らく何も出来ずに負けますよ」

鈴さん、セシリアさんと私は連続稼働時間の点では勝るとも劣っているとも言えませんが、篤さんは絶対的に足りない。そういう意味でもこちらが油断することは出来ない。

「う、うむ…そうだな、油断はいかん」

B T兵器と狙撃で動きが止まったところに衝撃砲とあの連続攻撃を受ければそれこそ私たちの腕では唯の的になってしまいます。

「相手の意表をついてペースを握らせない。この二人に関してはこれが一番ですね」

「ふむ、ならば鈴に肉薄してB T兵器を使わせないのが一番だな」

篤さん分かってますね。

B T兵器は一对多と一对一では非常に有効な兵器ですが2対2などの味方がいる状態だと味方の動きも考慮にいれなければならない分非常に使いどころが難しくなります。

味方を巻き込む可能性が大きいB T兵器はその味方に接近戦を挑むことでそれを抑制することが出来ますからね。

ただ問題が…

「正直言って鈴さんにISでの格闘戦はきついところがあります」

「うむ…私も負けるつもりはないがISの技術では鈴の方が圧倒的に上だ」

ふむ、鈴さん相手では一对一の格闘戦は不利ですね。

「鈴に挑みつつ隙を見てセシリアを落とし二人で鈴を、そういうことか」

「はい。その方向で行きましょう」

上手くすれば先ほど一夏さんたちの時に考えた武装も使えるかもしれません。

『シュバルツァ・レーゲン』に対する考察

「
.....」
「
.....」

流石に私も箒さんも考えが出ませんね…

「流石にこれは二人同時に挑んでもきついな」

「そうですね…」

私も箒さんもボーデヴィツヒさんと戦うには腕が全然足りません。AICという特性上二人で戦わないと絶対に勝てないうえに、二人で戦っても勝てる確立は2割から3割といったところでしょうか。私のブーメランも初見で読まれましたし。

「一対一だと絶対負けますからね。常に二人で挑まない…」

「む？このAICは範囲内の奴を全て止めるのではのか？カルラの言い方だと一人しか止められないようだが」

「恐らくその解釈であっていると思いますよ？」

「その根拠は？」

ああ、そういえば篤さんはあの戦闘の時いないでしたね。なら説明が必要でしょう。

「あの戦闘の時、A I Cで私が止められて攻撃されそうになった際に真上から鈴さんが攻撃に入りました。それだけならボーデヴィツヒさんはA I Cで鈴さんもまとめて止めてしまえばいいだけの話です。なのにあの時ボーデヴィツヒさんはわざわざ私を撃墜せず鈴さんを迎撃しました。ということはA I Cはある程度の距離内の一人しか止めることは出来ない、と考えることができます」

「な、なるほど」

「更にその後私のA I Cが解除されました。ということはあのA I Cは無条件に全てを止められるわけではなく、ボーデヴィツヒさんの認識した対象一人、ある程度の有効射程、かなりの集中力を要する、というのが私のあのA I Cに対する考えです」

「よく分かるものだな。一回しか戦わなかったのによくそこまで分かるものだ」

と言ってもこれ私の考えだけではなく映像分析をしてくれたリース先輩たちのおかげで確信した内容なんですけどね。

「でもこれは推測です。確証はありませんしボーデヴィツヒさんは

眼帯をしたままだった、というのも忘れてはいけません。A I Cが無くてもある人は十分に強い。私たち二人で掛かっても勝率は2割がいいところでしょう。」

「カルラにそこまで言わせるとはな」

そう、問題はそこだ。

A I Cが無い程度で勝てるならあの3人で挑んだ時点で確実に勝てたはず。それをさせなかったのは機体でも兵装でもなく、私たち全ての攻撃を受けきり、攻撃を行ってきたボーデヴィッヒさん自身の腕以外の何者でもない。

「『打鉄』に何かもう一つありませんか？」

「むづ…もう一つか……これなんてどうだ？」

篤さんが映し出してきた武装は…
え…でもこの武装って…

「篤さん？これ使えるんですか？」

「む…こ、この一週間で…」

「さっきのやつと同時ですよ？無理なら他の簡易な武装にしたほうが…」

「いや、やる！やってみせる！」

まあ…本人がこう言ってるんですし任せてみてもいいでしょう。それ以前に私はボーデヴィツヒさんに通じる術をほとんど持っていないのですから箒さんに任せるしかありませんね。

「すみません。よろしくお願いします」

「うむ！任せろ！」

結論

これ…ほとんど箒さん頼みじゃありませんか？

「うう、箒さん。申し訳ありません」

「うん？何がだ？」

「私力が不足なばかりにあなたに負担を押し付けるような形になってしまっ…」

「何だ、そんなことか。ならば謝るのは私の方だぞ？」

「え？」

ど、どういふことでしょう？

「私の相手はカルラで良かったと思っている。それにお前も言っていた話だが、私はお前以外の奴と組んでいたら一夏たちには勝てないかもしれない」

「で、でも鈴さんやセシリアさんの方が腕前では上ですし、一夏さんやデュノアさんならここまで箒さんに無茶をさせることは…」

「くどい！」

申し訳なさと頭を下げていた私にそう言った箒さんは、何を思ったのか展開していたブレードを突きつけてきました。

えっとお…

「私はお前でよかったと言っている！私がお前の謝罪を望んでいると思うのか！？そんなものでこの状況が変わるのか！」

箒さんの顔は明らかに怒っている。いや、これは怒りというより…

「誰と組んだところで私が強くなるわけではない！そいつの負担が減るわけじゃないんだ！専用機も無い！連続稼働時間も一夏にすら及ばない！」

「篤さん……」

悲しみ…

「私に何が出来るか必死に考えて…必死にやって！それでも未だにお前たちの足元にも及ばないと分かっているさ！いつか一夏にも及ばなくなるというのもな！その気持ちがお前に分かるか！誰と組んでも足手まといにしかねない私の気持ちが専用機持ちのお前に分かるものか！！」

今まで我慢していたんでしよう。いくら授業で頑張ろうと、放課後に稼働時間を上げようと…専用機持ちはすぐその稼働時間を追い抜くことが出来る。

それに卒業時に専用機が全員にもらえるわけじゃない。卒業の時点でその人が国家代表になれる見込みがある人だけに専用機は与えられる。

何せISの専用機持ちになれるのは全世界でも数百人。全世界の人口が70億としてその半分が女性だとしても35億人。そのうちの数百人。可能性は限りなく0に近い。

そして今は一夏さんに師事してはいるが、専用機のある一夏さんはいずれ篤さんよりも強くなる。そうなれば篤さんの必要性は？

一夏さんは決してそんな人じゃないというのは分かってます。しかし…篤さんはその考えを捨てきれない。否、捨てられるわけが無い。

今以上に好きな人に近づく機会はなくなる。そうなれば待っているのは一般人と国家代表者という別次元の隔たり。何ヶ月、何年と会えないなんていうのも当たり前。下手をすれば一生会えないとい

う可能性もある。

「謝りたいのは私のほうなんだ！足手まといになってすまないと…
…苦勞をかけてすまないと謝りたいのは私なんだ！」

箒さんは俯いて唇を噛み締めている。我慢していても爆発した感情は収まっていけないようで、いつも気丈に振舞っているその目からは大粒の雫が零れ落ちました。

「箒さん……」

かける言葉が見つからない。この場合どんな言葉をかけても意味は無いでしょう。専用機を持つてる私と持たない箒さんではそれ程の言葉の違いがある。

「それでも…カルラ……お前が納得いかないというのなら…」

今まで突きつけられていた近接ブレードを箒さんは降ろしてくれました。その顔はいつの間にか涙は無く、いつも通りの力が入っています。

「こついう時に言うのは礼だ」

そう言った篤さんは少し微笑みました。
何て強いんでしょうね、この人は…
同年代とは思えませんよ本当に。

「分かりました、篤さん。ありがとうございます」

「ああ」

「それから…篤さんは足手まといではありません。それを証明しましょう」

「当然だ。第2世代でも第3世代に劣らないところを奴らに見せつけてやる！改めてよろしく頼むぞカルラ！」

「はい！」

見せましょう。私たちの底力を！

6月最終週の月曜日。

今日からIS学園は一週間に渡り学年別トーナメントが始まる。
そしてその慌ただしさは予想よりも遥かにすぐく、今こうして第一

回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていました。

当然例外なくですので私たち専用機持ちや上級生もあり、それがようやく解放された私たちは急いで各アリーナの更衣室へと走り準備します。

「きゃあ！ちよつとそつち詰めてよ！」

「無茶言わないで！」

「なんでこんななのよー！」

ちなみに各アリーナには更衣室がAピットとBピットの二つ。しかし今年は男性がいます。男性と女性の着替えと一緒にするわけにはいかないということでAピットの方は一夏さんとデユノアさん専用となり、他の人たちは全てBピット側に押し込まれてしまっているので着替えも大変です。

しかも更衣室中央にはモニターが配置されていて、皆さんが見るために空けておかねばならないのでロツカールームは大混雑です。

更衣室のモニターは試合の無いときは来賓席を映しています。来賓客には各国の政府の関係者や企業のエージェントなどなどの各国要人がズラリと並び、その人数はクラス代表対抗戦とは比べも出来ないほどの人数がいる。

「一学園のイベントに随分と大仰なものだな」

隣の篤さんが呟きました。

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認だそうですよ。私たち1年生は関係ないですが、有望な人へのチェックという意味合いが強いそうです。噂ですけどね」

「そうか…」

そして会場の警備も万全。ISの扱えるほとんどの教員は会場の警備に借り出されており、クラス対抗戦のような侵入者が無いように備えられています。映し出される空には時々警備を行っている教員方が雲を引いて飛行していくのが見える。

「しかし随分時間が掛かりますね」

「仕方ないだろう」

ペアへの試合内容変更せいで従来のシステムに不具合が発生し、本来なら昨日の内に出来上がっているはずの対戦表の作成ができず、対戦表は今現在も手作りの抽選クジで行っているそうです。

「出たわよ!」

誰かの声と共にその場の全員の視線がモニターに集まる。

一回戦Aブロック…

はあ…

「参りましたね」

「なに、私の切り札を見せないで済んだ分やりやすさ」

「なるほど」

第一試合…

『カルラ・カスト&篠ノ之 箒』ペア 対 『セシリア・オルコ
ット&凰 鈴音』ペア

試合開始まで残り30分…

4 - 2 (後書き)

というわけで今回は恒例のカルラの対策会議です。こう考えると
の組もやべえ…

どうでもいいですけどこの対策会議を書くときはエスコンの作戦会
議の時のBGMを聞きながら書いてますw

筈の描写……これで束に電話する理由が……でも実際筈の心情つ
てこんな感じじゃないでしょうか。なんて思って完全オリジナル。

明日は遂にVSセシリア&鈴ペアです！

前編後編分割でIS戦闘じゃあ！お楽しみに！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者のテンションが小銭だ！小銭を出せ！
状態になります！

4 - 3 (前書き)

連続投稿3回目！

「まさかこんなに早くリベンジのチャンスが来るとは思いませんでしたわ」

アリーナの中央上空、私と篝さんの前には、青と赤の対照的なISを展開したセシリアさんと鈴さんが待機していて試合開始の合図を待っている状態です。

セシリアさんは『スターライトmk?』を右肩に預けていてすぐには射撃できませんが、既に『ブルーティアーズ』が4基その周囲に浮いている状態で待機していてやる気満々と言った感じです。

「ちょっと、カルラは私が相手にするだからあんたは邪魔しないでよね」

セシリアさんの言葉に鈴さんが言う。鈴さんも既に『双天牙月』を展開していて、持て余しているのか時々ブンブンと回しています。

個人間秘匿通信を使って篝さんに話しかける。

「篝さん、最初は予定通り作戦Aで」

「了解だ」

篤さんは正面の二人に集中しながら頷き返してくれました。武装はいつも通り主武装の近接ブレードを右手で抜いて無造作に下げています。

私かというと『ラングリスニ』『ラングニスト』は腰のスカートから取り外しておらず、右手に『ゲリユ』、左手には『アイギウス』を構えています。片手では命中率が下がりますが作戦上これはしょうがない。

試合開始時刻まで残り5秒…

セシリアさんが『スターライトmk?』を両手で構え正面の私たちに向ける。

4…

篤さんが近接ブレードを中段に構えた。

3…

鈴さんが振り回していた『双天牙月』を止めて左手だけ逆手に構える。

2…

私は『ゲリユ』を構えて安全装置を解除した。

……………今！

『それでは始めてください!』

アリーナのスピーカーの声が試合開始を告げると同時に2つのI
Sが同時に動く!

「おりゃあ!」

「はあ!」

ガイン!

甲高い音と共に箒さんと鈴さんが激突した。箒さんの近接ブレードと鈴さんの右手の青龍刀がぶつかり合って一瞬火花を散らす。

「ふうん。片手とは言え『打鉄』で『甲龍』の攻撃を受け止めるなんてやるじゃない」

「舐めてもらっては困るな」

「ま、片手だけでも褒めてあげるわ!」

鈴さんはそう言うと同時に左手の逆手で持っていたほうを箒さんに振り下ろす。箒さんはそれに合わせて右足を振り上げ鈴さんの腹

部を蹴り飛ばすことでその斬撃を回避し、距離を取る。
それを見て私は箒さんの前に行くべく一気に加速。

「迂闊ですわよ！」

セシリアさんが動きが止まった箒さんに射撃を行う。直撃寸前に箒さんの前に出て『アイギウス』でレーザーを受け止め、右手の『ゲリユ』のトリガーを引いた。

射撃を止めたセシリアさんが弾丸を回避し、『ブルー・ティアーズ』で四方から狙いをつけてくる。

「囲まれた！？」

私ではなく箒さんに！？

「くっ！」

箒さんが慌てて『ブルー・ティアーズ』のレーザーの嵐を回避。
その方向は…まずい！

咄嗟に『ゲリユ』を上空に投げ捨てて『グレイプニエル』を解除し、右腕を振るった！

「もらい！」

「な！」

その先には…既に『双天牙月』を振りかぶった鈴さんが…

なんという連携…！

『ブルー・ティアーズ』の射線を邪魔しないように鈴さんが位置取り、その位置にセシリアさんが誘導して確実に『甲龍』の攻撃を当てるベストな選択。

鈴さんが『双天牙月』を振り下ろす瞬間に箒さん（・・・）の右足に『グレイプニエル』が巻きつく。

「はあ！」

「うわ！？」

ラグを全くおかずに『グレイプニエル』を収納することで箒さんを無理やり回収する。絡まりきっていなかった『グレイプニエル』は途中で解けて箒さんが私の後方に飛ばされてしまった。『グレイプニエル』を収納と同時に放り投げ、落ちてきた『ゲリュ』を掴み取る。

「無茶な回避させるわねアンタ！」

「箒さん！作戦Bへ！」

『わ、分かった！』

鈴さんの言葉を無視して箒さんへ指示を出した瞬間、ISが警告音を発する！

空間の歪曲を感知！衝撃砲発射まで0.2秒！

回避が間に合わず咄嗟に『アイギウス』で受けた。

ゴガアン！

「ぐ…！」

激しい衝撃と共に『アイギウス』と一緒に弾き飛ばされた！

「なんて…威力！？」

直上より熱源！警告！ロックされてます！

「頂きですわ！」

今度はセシリアさん！？

まずい、『アイギウス』は吹き飛ばされた時にセシリアさんと真逆の位置に。これじゃあ間に合わない！

ダメージ覚悟で『ゲリユ』をセシリアさんに向ける。

70mmグレネード安全装置解除、時限信管0.1秒に設定

『スターライトmk?』とレーザーと『ゲリユ』のグレネード発射がほぼ同時。狙いをつけないで引き金を引いた。

ISの命令どおり、ほぼ0距離でグレネードが爆発する！

「げほっ！」

グレネードの爆風で体が吹き飛ばされ、衝撃で肺の中の空気が吐き出される。

その甲斐あってかレーザーの直撃は回避に成功。したけど…

いくら盾の正面で受けてもこの距離だと流石にシールドエネルギーのダメージが変わりないですね。

「じ、自殺願望でもあるのですか！？そんな無茶な回避の仕方…！」

セシリアさんが開放通信で叫んでくる。

まあ、これも作戦の内なので気にしないでください。

『ゲリユ』をクローズしつつ『アイギウス』を真上に構える。

「む！同じ手は食いませんわよ！鈴さん！」

「私に指示するなつての！」

それを見たセシリアさんが鈴さんに叫び、その声を聞く前に鈴さんが突っ込んでくる！

『アイギウス』のジャミングと煙幕は発射は間に合う。でもそのジャミングが私を隠してくれる前に接近されれば目視で鈴さんの間合いに入る。

どうやら目標は完全に私一人に絞って先に落とすという戦法で決まりのようですね。

確かに近接ブレードしか持っていない幕さんなら距離さえ取れてしまえば恐るるに足らないという考えからでしょう。

以前ならそれでいいんですが…そこを私たちが対応していないとでも？

鈴さんが『双天牙月』を振りかぶった瞬間…

ドンドンドン！

「な…きゃあ！」

遙か上空から複数のエネルギーの塊が降り注ぎ鈴さんが体制を崩した。

その隙に『アイギウス』が発動。内部から煙幕が放たれ、ほぼ同時にジャミング装置がアリーナの3方に飛んで強力なジャミングを発生させる。

この状態では範囲内で開放通信も個人間秘匿通信も使えない。

熱探知センサーを作動させつつ『ゲリユ』をクローズ、『ラングリス二』を構えてセシリアさんに突撃する！

「同じ手は通じないと言ってるでしょう！」

当然読んでいたのか、爆発！？

その爆発で私とセシリアさんの間の煙が一気に晴れた。

「今まで見せる機会はありませんでしたわね。以前にも言いましたが、『ブルー・ティアーズ』は六基ありますのよ！」

なるほど、残りの二基の『ブルー・ティアーズ』は誘導弾とうことですか。近距離で爆発させることで爆風で煙を晴らすと、これはやられましたね。

「鬱陶しいってのよお！」

通信でもなんでもなく、アリーナ中に響き渡る声と共に全く見当違いの方向の煙が霧散する。その先を確認すると鈴さんが両肩の『龍咆』をアリーナ全体に無差別に撃ち込んでいるのが見えました。これは…相性悪すぎますね。衝撃砲のような兵器に煙幕は無意味です。というかめちゃくちゃ！

「ちよつと鈴さん！きゃあ！」

セシリアさんにも誤射しかけてますし、いくらなんでもこれは……瞬間、発生していたノイズが消える。恐らく煙が晴れたことでセシリアさんがジャミング兵器を撃ち抜いたのでしょう。鈴さんに気を取られたせいでセシリアさんへの注意がそれてしまいましたね。

「みつけ！覚悟お！」

私を視認した鈴さんが『双天牙月』を連結してそれを投擲。風を切りながら猛スピードで『双天牙月』が宙を舞い、私に向かって飛翔する。

まずい、この距離は…

「フィナーレですわね！」

「セシリアさんの距離…！」

『双天牙月』を避けた瞬間に『スターライトmk?』が左肩に直撃した。装甲が弾け飛びそのまま大きく弾き飛ばされる。

ブオンブオンブオンブオンブオン…！！

そして再び風を切る音と共に『双天牙月』が鈴さんの元に戻るために…私に向かってくる…！！

『アイギウス』で受けるとまた弾き飛ばされる…ここはギリギリでも…避ける…！！

右足のブースターだけ全開にして体を急速回転、紙一重の位置を『双天牙月』が通過した。よし、回避成功…！！

ジャキン…！！

「ま、避けるわよね。カルラなら」

至近距離での『双天牙月』を受け止める音。それはつまり…

音の方向、真下を向くと予想通り鈴さんが『双天牙月』を再び分割して迫ってきていた。

ここまで接近されては対応策が無い…！！

「今度こそ落ちろお…！！」

両手共に右からの強打。『アイギウス』に『双天牙月』を振るつた『甲龍』の全衝撃が襲い掛か……振るわれたのは左の青龍刀だけ！？

鈴さんは右手を更に振りかぶって…

「な、何を！？」

「いくら盾でも物体なら切ることは不可能じゃないってことよ！」

左手の青龍刀に右手の青龍刀を打ちつけた。『アイギウス』に…切れ目が！？

「うあ！」

ズバァ！

金属の切断音とは思えない音と共に『アイギウス』の上半分が真っ二つにされて地面へと落下し、私はその衝撃で弾き飛ばされる。

そのまま鈴さんが肉薄してきた、得意の回転攻撃に移行した。『アイギウス』の下半分を投げ捨てて右手の『ゲリュ』を捨てるつもりで防御に回すと同時に左膝の『スレイヴニル』を射出。左手で受け取る。

『ゲリュ』が弾き飛ばされた瞬間に右膝の『スレイヴニル』を同じように射出し右手で構える。

しかし短剣でこの連続攻撃は正直きついです！

「その短剣でいつまで防ぎきれるかしらね！」

「いつまでも！」

更に増す回転攻撃を両手の『スレイヴニル』で弾き、受け流し、避ける。

「は！」

両足の『スレイヴニル』を展開して一瞬出来た隙に鈴さんに足を振り上げた。

「ったく！どこまで武器が仕込んであんのよ！」

鈴さんが刃の無い部分を右腕で受け止めて左腕の青龍刀を振り下ろしてくる。片手だけなら！

『スレイヴニル』を交差させて青龍刀を受け、鏢迫り合いに持ち込む。

「へえ、アタシと力比べしようっての？」

「そ、それも面白そうですね…」

言っけていても分かる。明らかに力の差がありすぎて伸ばしていた腕がドンドン押し込まれてくる。

しかもこの状態はまだ片手。今から足を払って引き戻したもう片方が来る！

「流石に無理ですかね？」

「あつたり前！」

鈴さんが先ほどと同じように『双天牙月』を打ち付ける。『アイギウス』で耐えられなかったものに耐久性の劣る『スレイヴニル』が耐えられるわけもなく、『アイギウス』の時よりもあつさり二本の『スレイヴニル』が両断される。

そのおかげで『双天牙月』の攻撃は回避できましたけど…

ここまで2人同時がきついのは…予想していたとは言え作戦を実行する前に先に落ちてしまいそうですよ！

再び鈴さんが攻撃態勢に移行したのを見て腰から『レヴァティン』を引き抜くと同時にISが新たな警告を発する。

警告！上空3時方向より接近する熱源！警告！

警告に顔を向ける。そこには…

「はああああああああ！」

「せ、セシリアさん！？」

右手には『スターライトmk?』を構え、左手には『インターセプター』をオープンしたセシリアさんが突っ込んできていた！
左には鈴さん、右からはセシリアさん。

挟まれた！まさかセシリアさんまで前に出てくるなんて！
鈴さんの方向を向いていたせいでセシリアさんへの対応が一瞬遅れ、ほぼ体当たりと同意の『インターセプター』の突きをもろに受ける。

「ぐ…ああああああああ！」

頭部への攻撃でシールドエネルギーが大きく削られ、弾き飛ばされて地面へと自分が落下していくのが分かる。体制、立て直さないと…狙い撃ちに…！

「これで終わり！」

「ですわね！」

警告！敵2機にロックされています！衝撃砲の発射まで0 / 5秒、
レーザーライフル発射まで0 / 8秒！

間に…合わない！

「な！？」

「ちい！」

来るべき衝撃に備えた瞬間、二人が射撃をせずに回避行動を取り、
そこにまたもエネルギーの塊が降り注いだ。
どうやら…ようやく準備完了のようですね

「待ったか？カルラ」

「遅いですよ」

顔を上げるとそこには……

そこにはいつもの近接ブレードのほぼ倍の大きさのブレードを構
える『打鉄』を身に着けた篝さんの背中が浮いていました……

4 - 3 (後書き)

はい、というわけで学年別トーナメント前編でした。
やりたい放題ファオーウ！

鈴：強いなおい！上げてから気づいたけど青龍刀って切るものじゃ
なくて叩き潰す用途じゃん！盾切っちゃった！

さて、切り札篇はどう動くのかは明日をご覧ください！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
評価、感想をもらえたら作者が「ふっ、冗談はよせ……」って言いま
す！

4 - 4 (前書き)

連続投稿4回目！

それにしても箒さん、かつこいいですね。タイミング的にも台詞的にもこのまま小説の主人公になれそうな勢いですよ。

「カルラ、時間を稼いでくれて礼を言うぞ」

「別に倒しても構わなかったんですけどね。箒さんの出番がなくなりますから」

「ふ、そうか。では期待に答えましょう」

私の冗談に箒さんが微笑んで巨大な剣を肩に担ぐ。セシリアさんと鈴さんは突然の乱入と見知らぬ武装に少し様子見をしているようです。

さて、箒さんが来たということは作戦Cの開始ですね。

「な、なんですの…あの巨大な剣は…」

「は！武器がでかくなったところで！」

鈴さんが箒さんに突進をかける！援護……！

「今更『打鉄』程度にビビるわけないってのよ！」

両手の『双天牙月』を振り回しながら鈴さんが猛スピード迫ってくる！まずい、援護間に合わな……！

『打鉄』よりデータ受信。座標データ認識、時間データ認識

来ましたね、こちらの切り札！

迫っていた鈴さんと私たちの間に再びエネルギーが降り注いだ。

「さつきから何なのよもう！鬱陶しいわね！」

「鈴さん離れて！」

鈴さんが上昇すると共に四方から警告が上がる。『ブルー・ティーズ』ですか。状況を見るに敏と言ったところですね。まあまだこちらの手札はつきませんけど。

左手に『フェンリス』をオープン、全弾連続発射！

ドドドドドドドーン！

激しい反動、発射音と共にグレネード弾を二人の周りにばら撒き、時限信管が作動して爆発を起こす。

むろん全て直撃弾ではなく、二人の行動範囲を限定するような
もちろん当たるか当たらないかのギリギリの距離です。

二人が回避したところにまたもエネルギーの塊が降り注いだ。

「もう！さっきからなんだってのよ！」

「一体どうなっていますの！？」

混乱しているところに『ゴルフアクス』をオープンして鈴さんに
狙いをつけ、トリガーを引く。

「は！この程度、舐めないでよね！」

『ゴルフアクス』の弾丸は鈴さんが『双天牙月』を連結し前面で
回転させたことで弾き飛ばされて有効弾は無し。
でも動きは止まりましたね。

「おおおりゃあああああああ！」

『双天牙月』の回転が止まったところで箒さんが斬りかかる。鈴
さんが迎撃のために『双天牙月』を構え、それを見た箒さんがニヤ
リと笑うのが見えた。

鈴さんがその切っ先を受けて…弾き飛ばされた！

「嘘!？」

「お前も私を舐めていたのではないか？」

鈴さんが驚きの声を上げる。

どんなに奥の手を用意していても『打鉄』は『打鉄』。第二世代型ISである以上第三世代型ISにスペックでは勝てない上にパワーでは『甲龍』には遠く及ばない。

ではどうするかというと、拮抗できるのは純粋な技量、質量、勢い、そして意表をつくこと。

そしてそれを実行するための2つの切り札。

まずは今篇さんが振るっている3.5mを誇る巨大近接ブレード、大野太刀『雷斬』。

「鈴さん! な、またですよ!？」

セシリアさんが援護しようと『スターライトmk?』を構えたところにもたもエネルギーの塊が降り注ぐ。

先ほどから降り注ぐこのエネルギーの雨。

これが切り札の二つ目、64式連装大弓『月穿』の曲射攻撃による時間差攻撃。

そのために篇さんを後方に投げ飛ばし、ジャミングで発射時に悟られないようにして、今まで私一人でセシリアさんと鈴さんの二人

を抑えてきた。ここで決めなければ私たちの負けが一気に濃厚にな
ってしまう。

次弾4時方向、距離80、着弾まで5秒

『ゴルフアクス』をクローズしつつ左腕を振るいながら『グレイ
プニエル』を解除、セシリアさんを捉えるために振るう。

「同じ手は通じないと言ったでしょう！」

「同じ手なら、ですけど？」

左は避けられましたか。でも…右腕も同時ですよ？

避けた位置には既に右腕の『グレイプニエル』を放っていてセシ
リアさんの左腕を絡め取る。

文字通り違う手ですね。

「しまっ…！」

「ええい！」

セシリアさんが言い切る前に4時方向距離80にセシリアさんを
放り投げ、そこにぴったりのタイミングでエネルギーの塊が直撃し

て爆発した。

「きゃあああああ！」

「セシリア！？」

「余所見とは余裕だな、鈴！」

「ちい！」

『雷斬』を自分の頭上で振り回していた篝さんがそれを振り下ろした。鈴さんはそれを『双天牙月』を交差させて防ごうとしたが、そのまま地面まで押し込まれる。足が地面にめり込んでから鈴さんがようやく『雷斬』の特徴に気づいたように叫んだ。

「あんた！何て重いもん使ってたのよ！？」

『雷斬』は大きさもそうですが特筆するのはその重量。そもそも第二世代型でプラズマ刃を出すのにIS自身のエネルギーを使ってしまったては燃費が悪すぎます。

その出力を維持する方法は簡単。刀自身の中にバッテリーを組み込んでしまえばいい。

しかしその結果どうなるかというと刀の長大化重量化が目立ち、結局凡庸性に劣ってしまったためにお蔵入りされた近接武装。それが『雷斬』。

扱いが非常に難しい分、先ほどのような振り下ろし、更に遠心力を加え重力を味方につけた超重量によってどんなISでも受け止めることは困難。たとえそれがパワータイプの『甲龍』だろうと結果は変わりません。

でも驚くべきはその扱いの難しい武装を一週間足らずであそこまで使いこなせている箒さんです。

正直最初は無茶かと思いましたけど、あれでIS適正って本当なんですかね？

上から箒さんがブースター全開で押し込んでいるせいで鈴さんは動きが取れないでいる。両足がドンドン地面にめり込んで行きますが、5cmほど沈んだところでそれが止まった。

流石『甲龍』。面目躍如というところですね。

鈴さんがこっちの番にとばかりニヤリと笑う。

「でもあんたも忘れてるんじゃないの？アタシの武装！」

空間の歪曲を確認！

ISのハイパーセンサーが『龍咆』の発射を捉える。でもその前に箒さんは離脱した。

何故ってそれは…

「う、嘘…」

次の『月穿』の着弾位置がそこだったからに他なりません。

鈴さんは篤さんがそのまま決めに来ると思っていたのか、ほとんど動けないでエネルギーの塊を受け、セシリアさんと同じように爆発を起こした。

それを見る前に私は既に『フローキ』を展開。爆発の中にいるはずの二人に向かって作動させる。

キイイイイイイイン！

いつも通り甲高い高速回転の音と共に弾丸の雨が吐き出された。出し惜しみ無しで全弾丸を叩き込む。当たってるかどうかなんて関係ない。あの二人相手に回転式機関銃を使う暇なんてこういう時しかないんですから。

一分はずっと作動させっぱなしだったでしょうか。『フローキ』が弾切れを伝え、回転音だけになる。私は『フローキ』をクローズして『レヴァテイン』に右手を、『ラングニスト』に左手をかける。手をかけるだけで抜かない。どんな状況でも対応出来るように気を張る。

相手の反応が無いのを確認したのか、篤さんが私のいる位置まで上がってきて、今まで構えていた『雷斬』を初めて右肩に預けた。顔には私の比では無い程の大量の汗をかき、呼吸も荒い。

いくらISとは言え扱うのは操っている人に他なりません。ならその武器を扱うのも人です。重量や遠心力、武装の反動は全て操縦者に跳ね返ってきます。

篤さんの場合、慣れない超重量武器に加えて格上とのIS戦闘で心身共に限界が近く見えます。

「大丈夫ですか？」

「はあ…はあ…すう…はあー…大丈夫だ。まだ行ける」

「分かりました」

一回大きな深呼吸と共に篤さんが顔を上げた。本人が言ってるんです。大丈夫でしょう。

それにまだ試合終了の合図も鳴っていません。相当削ったはずですがまだ落とすまでには至っていないということですね。

その時、アリーナの4箇所に爆発が起こった。『月穿』の残りのエネルギーが全弾着弾したでしょう。これでかなり状況は不利になりましたね。

そしてその爆発とほぼ同時に、先ほどの爆煙、『フローキ』の起こした砂埃を突き破ってセシリアさんと鈴さんが飛び出してきた。

「ああ、もう。やってくれるわね…痛てて」

「はあ、はあ…流石と言ったところかしら？」

二人とも埃だらけの煤だらけ。しかもかなりボロボロです。

状況確認、『ブルー・ティアーズ』BT兵器6基中3基破損。『甲龍』衝撃砲右肩部破損

爆発に巻き込まれた影響でしようね。BT兵器は腰の誘導弾2つとレーザーの物が1つしかありません。

と言ってもこれで互角、といったところでしょうか。私のシールドエネルギーも残り150を切ってる上に武装もほとんど残ってませんしね。

現状確認、シールドエネルギー残量139、残存武装、『ラングリスニ』残弾85発、『ラングニスト』残弾8発、『フローキ』残弾0発、『フェンリス』残弾0発、『グルファクス』残弾5発、『ドラウニブル』残弾10発、『ブリュナーク』使用可能、『レヴァティン』展開残り時間43秒、『スレイヴニル』脚部2本、『ヴェルフェルム』展開残り時間1分

前言撤回、案外残ってますね。と言ってもこの二人相手にどこまで行けるか…

「どうやらそちらの切り札は終わったみたいですし？今度はまたこちらの番ということでしょうか？」

「面白い冗談だな」

「箒さん？」

箒さんが『雷斬』をクローズして新しい武装を展開する。左上の内側に展開されたそれは『月穿』よりも幾分小さい取り回しを考えられた便利な射撃用の短弓。

「『重籐』……」

「どの道負けられん戦いだ！ここで負けてしまつては意味がない！出し惜しみなぞせん！」

「あら、奇遇じゃない。アタシも負けらんない理由があるのよね」

「結局皆さん負けたくないのは一緒の様子。なら最後まで付き合うのが務めですわね」

全員がそれぞれの武装を構える。私も両腕を交差させて『ヴェルフェルム』を掴む。

「行くぞ！」

「今度こそ！」

「レクイエムを聞かせて差し上げますわ！」

「……一夏と付き合うのは私^{アタシ}（わたくし）だ（よ）（ですわ）（！）」「

「

『ヴェルフエルム』を投擲すると同時に私以外の全員が叫んだ。
欲望丸出しじゃないですか…

「どりゃあー！」

鈴さんが『ヴェルフエルム』を叩き落とし、そのまま突撃してくる。
『ブリュナーク』をオープンしてそれを思いっきり突き出した。
左手の青竜刀で受け流しながら一気に接近してくるので、左足の
『スレイヴニル』を展開して蹴りを放つ。

ビシュン！

「な…！」

その『スレイヴニル』の刃の部分だけがレーザーで折られた。いつの間に近づかせたのかビットの一基が私の近くに浮いていて、それが撃ったのでしょう。

「もらったあ！」

「が…！」

振り下ろされた青竜刀を左腕の手甲で受け止める。

手甲がその威力に耐え切れず破壊されて中の『ドラウニプル』の火薬に引火した！

「きゃ！」

「うわ！」

その至近距離での爆発は流石に鈴さんも避けられなかったようと一緒に逆方向に吹っ飛び、地面に叩きつけられる。

シールドエネルギー残量 87

まずい！このまま落ちたら箒さん一人になってしまう。せめて相打ちに！

「箒さん！作戦D！」

『な、何！？』

「信じます！」

『ま、任せろ！』

篤さんに作戦最終段階を伝えてから『ブリユナーク』を左手に持ち替えて右手の『グレイプニエル』を鈴さんに向けて射出する。体制を立て直したところだったので鈴さんの左腕を絡め取ることに成功。

「は！チェーンデスマッチでもしようてっの！？」

「残念ですが…」

『グレイプニエル』を収納しながら『ブリユナーク』の地面に突き立て、残った右足の『スレヴニル』をスパイク代わりに地面に向けて展開する。この状態で収納することでパワータイプの『甲龍』でも確実にこちらに引っ張ることが可能です。

「武器を捨てた？何しようとしてるかは知らないけど先に落とす！」

『ブリユナーク』内温度急速上昇、危険区域に到達

鈴さんが『グレイプニエル』で引っ張られる勢いを利用して急加速、一気に突っ込んでくる。

ところで、今更言うまでも無いですが『ブリユナーク』はヒートランス。つまり内部に熱量発生装置を仕込んでいます。

通常外向きのそれを意図的に中向きに変えればどうなるか、分か

りますか？

臨界点到達、爆発まで0.3秒

ドガン！

「な……」

「一緒に退場と行きましょう！」

「何よそれえ！？」

私と鈴さんのほぼ零距离で巨大な熱量を含んだ『ブリュナーク』が爆発。その爆風と破片が一気に私と鈴さんのISに襲い掛かり、シールドエネルギーを根こそぎ奪う。

シールドエネルギーempty、行動不能。『甲龍』シールドエネルギーempty

「あ、あんた相変わらず無茶苦茶するわね……」

煙を吹いている『甲龍』から鈴さんがこちらを睨みつけてきました。

勘弁してください…

「ああしないと負けなので」

「だからって一緒に自爆する奴がいる？ 全く…」

「ここにいますけど？」

「ああそう」

溜息つかれてしまいましたね。分からなくは無いですけど。

ふ、っと上を見上げて篝さんの確認をしようとした途端、空中で爆発が起きました。

そしてその爆煙の中からはじき出されてきたのは…篝さんの『打鉄』…

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット、凰 鈴音ペア！』

負け…ですね。少し残念です。

4 - 4 (後書き)

学年別トーナメント決着！

やりたい放題2回目フォーウ！

まさかの相打ちで負け決定です。残念ですが第ではまだセシリアには勝てないということです。

『打鉄』の武装については本編全部上げたあとリースたちの説明文と一緒に乗せようと思ってたんですけど……上げてくれて意見があれば言ってください。上げます。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者が「あ、ジムがあ」って言って味方の末路を悟ります。

解説のコーナー

といわけで今回は前回もあわせて出てきた作戦A B C Dについてこの人から説明していただきます。

???「カルラ・カストです。よろしくお願いします」

てなわけで作戦Aからお願いします

カルラ「まず作戦A…というよりこれは段階なのでここからは段階といいますが、当初の予定通り鈴さんに肉薄してセシリアさんを落とすことがAです。相手の様子を見ることもここに入ってますね」

なるほど、そこで瞬時にBに切り替えたわけですが

カルラ「はい。段階Bは主な戦闘方法が近接戦闘の箒さんをあえて後方に置くことで遠距離攻撃を相手の視野に入れさせないという意表をつくための段階です」

ふむふむ。

カルラ「次に段階Cですが、これは箒さんの遠距離攻撃を終えた状態で私とのツートップで二人を同時に落とすという最終段階です」

最終段階？でもDもありますよね？

カルラ「ええ、Dは本来やってはいけないことなんです。段階Dは一人一殺を前提とした動きです。私と箒さん、どちらかでも落とせて片方が相打ちに出来れば勝てますから」

結構、ていうよりかなり賭けですよね？

カルラ「はい、ですから本来Dに行く前までに決着をつけておかないといけなかったんです。それが出来なかったのは純粹に私の力不足です。箒さんすいません…」

と、というわけで今回は負のスパイラルに入りそうなのでこの辺でー

カルラ「箒さんごめんなさーい！（泣）」

4 - 5 (前書き)

連続投稿5回目

「痛たた…」

「大丈夫か？カルラ」

試合後、私は一度保健室へ行ってきました。最後の鈴さんの一撃を左腕で受け、更にはその至近距離での爆発。折れてはいませんでした。簡易検査でひびが入っているかもしれないとのこと。

それなのに私は無理を言ってアリーナの生徒専用の応援席にいます。何せ次の試合のカードは…

一回戦Aブロック第二試合

織斑 一夏&シャルル・デュノア ペア 対 ラウラ・ボーデヴィ
ツヒ& amp・岸原 理子 ペア

これを見逃したら後悔してしまいますからね。

岸原さんはクラスメイトですが、どうやら組める人がいなかったみたいです。ISは予想通り『ラファール・リヴァイブ』を使用。

「大丈夫ですよこのくらい」

「すまん、あの段階で鈴かセシリアは落としている予定だったのに」

「作戦は作戦、実戦は実戦です。作戦通りいけば最もいいですがそ

うは行かないのが実戦ですよ。対応し切れなかった私たち二人のミスです」

「し、しかしだな……」

「篝さん？」

「……」

「う……いや、しかし……」

「篝さん？」

「……」

「……」

「ほ・う・き・さ・ん？」

「……」

「う・つ・つ・つ……つ、次やる機会があれば負けないように頑張ろうな」

「はい、頑張りましょう」

『それでは、始めてください』

篤さんにそう答えたとき、スピーカーから試合開始の声が聞こえた。

開幕早々、一夏さんが仕掛けた。フェイントも何も無い一直線、最短の距離を『瞬時加速』によって一気に駆け抜ける。それを見たボーデヴィツヒさんが右手を突き出した。

「A I C か…」

篤さんの言うとおり、猛スピードで突っ込んだ一夏さんの動きがある位置でピタリと止まる。そして『シュヴァルツエア・レーゲン』の大口徑レールカノンが一夏さんをほぼ零距离で捉えた。

その一夏さんの真後ろから頭を飛びこるように現れたのは『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』を纏ったデュノアさん。六一口徑アサルトカノン『ガラム』の爆破弾をボーデヴィツヒさんに浴びせ掛ける。

デュノアさんの射撃によってレールカノンの射線がずれて砲弾がアリーナのシールドに当たり爆発した。

更に撃ち込んでくるデュノアさんに押されてボーデヴィツヒさんが急後退し、それを許さないようにデュノアさんが左手にアサルトライフルをオープンする。

「やはり早いな」

「ええ、私よりも更に」

篤さんの声に頷く。武器をクローズしてからオープンするまではどんな慣れた人でも1秒近くかかる。それをデュノアさんはほとんどラグ無しでやっている。それは即ちどんな戦闘状況でも対応できるということ。長期戦に圧倒的アドバンテージを誇り、常に相手に有利な武装で戦えるということですね。

そのデュノアさんが一瞬動きを止め、先ほどまでいた位置に銃弾が叩き込まれた。

銃弾の飛んできたほうを見ると岸里さんが狙撃ライフルを展開してアリーナのかかなり後方に陣取っていました。前衛は完全にボーデヴィツヒさんに任せて自分は援護に回ると、そういうことでしょう。それ以前にボーデヴィツヒさんが岸里さんなんていないように扱っているからかもしれません。

「なんだ？どうなっている」

専用機のない篤さんは銃弾を追えないので私に尋ねてきました。

「岸里さんが狙撃ライフルで援護しました」

簡潔に伝えて状況を逐一記録する。

岸里さんはクラスで3番目、学年で上位10人に入る狙撃手。上

位5人は専用機持ちなので実質TOP5の使い手です。

撃つ回数は多くないけど確実に当たるタイミングで、もしくは邪魔になるタイミングで狙撃しています。

何度かそのままボーデヴィツヒさんに立ち向かっていましたが、あるタイミングでデュノアさんが離脱して岸里さんに向かって動き出しました。

なるほど、先に岸里さんを倒そうという考えですね。

ボーデヴィツヒさんの思考上相方を助けると言う考えは無いでしょうから、確実に2対1に持ち込もうと言う魂胆でしょう。

流石にこれには岸里さんも援護するわけには行かず、狙撃ライフルをクローズしてアサルトライフルと近接ブレードをオープンしてデュノアさんを迎撃した。しかし岸里さんの狙撃以外の成績は中の中から上と言うところ。流石にデュノアさんが相手だと分が悪すぎますね。

しかしその間は一夏さんが一人でボーデヴィツヒさんを抑えなければ行けないということ。

一夏さんがボーデヴィツヒさんに肉薄する。遠距離攻撃手段が無い一夏さんは一度距離を取られるとレールカノンとワイヤーブレードの餌食になってしまう。それが分かっているのか、両手のプラスマ刃とワイヤーブレードの波状攻撃を受けつつも距離を離すという愚策は取らない。

右手のプラスマ刃は『雪片式型』で、左手はプラスマ刃ではなくボーデヴィツヒさんの腕自体を払いのけることで防ぎ、ワイヤーブレードは避けるのと両足をうまく使って弾き返している。

と言っても足ではそんなに弾き返せるものではない。足のスラスタは姿勢制御でも重要な位置を担っていて、つまり足で弾き返せばそれだけ隙が出来てしまう。

その時、一夏さんたちのいる位置と違う位置が爆発、二つのISが躍り出る。ネイビーグリーンの『ラファール・リヴァイヴ』と鮮やかなオレンジの『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』。追われているのは当然、『ラファール・リヴァイヴ』で、ともに反撃も出来ず、防戦一方に見えます。

とにかく武装の切り替えが早い。更には近接、射撃、防御に全く溜めという行為がデユノアさんには無い。攻守に入る動作はあるけどその予備動作、準備というものが無い。つまり武器を切り替えた瞬間にはその武装で攻撃を仕掛けてきている。

しかも距離も絶妙だ。相手が諦め切れない位置に陣取って、常に相手の先を取る。

つまりジャンケンで言えばデユノアさんは手を出した瞬間、手を変えることが出来る。それならば普通の…ましてやIS学園に入つて数ヶ月の人がそれに勝てるわけが無い。デユノアさんに勝つには最低でも二つ同時に行えなければならないからだ。

これ…機体が第三世代でも余程上手く立ち回らないと負けますね。

「一夏！」

篝さんの叫びで視線を戻すと、AICに再び捉えられた一夏さんがいました。その瞬間『シュヴァルツェア・レーゲン』から6つのワイヤーブレードが射出されて、動きの止まった『白式』を切り刻む。

装甲の3分の1近くを吹き飛ばされ、更にあの状況ではシールドエネルギーもかなり削られたでしょう。

もう一回食らえば落ちる。そのくらいアリーナ席からでも分かります。

それでも『シュヴァルツェア・レーゲン』の攻撃は終わらず、右手をワイヤーブレードで拘束するとそのまま捻りながら地面へと叩きつけた。

「一夏！くっそお！」

箒さんが観客席からアリーナへと飛び出そうする。

「箒さん落ち着いて！」

慌てて腰にしがみ付いて引き止める。というよりここからじゃシルドがあつて入れないんですってば！

「しかしあれはやりすぎだ！」

「私たちが喚いたところで変わりません！今は一夏さんたちを信じましょう！」

「くう…！」

箒さんが悔しそうに俯くと共に再びその場に座った時、アリーナ

が沸いた。見るとボーデヴィツヒさんが一夏さんを踏みつけて動けないようにしています。

その状態でレールカノンを向ける。

避けられない様にしてから叩き込むつもりですか！？

「あ……」

篝さんの声が聞こえる。アリーナの誰もがここで終わ리と思った。

思っていた。

ガァン！

次の瞬間にはデュノアさんがボーデヴィツヒさんに構えた盾で体当たりを食らわして弾き飛ばした。

「ほ……」

「よかった……」

私と篝さんがほぼ同時にそう言う。あれ？岸里さんは？

確認すると既にシールドエネルギーが切れたのでしょう。アリーナの端には各部の装甲を剥ぎ取られて行動不能になり、膝について

いる『ラファール・リヴァイブ』がいました。

あの短時間でカスタム機とは言え同世代を打ち負かすなんて…

デュノアさんはそのまま弾切れになったのかアサルトライフルは投げ捨てて、右手にショットガン、左手にマシンガンオープンする。

そのまま戦闘に移行していく。流れとしては一夏さんがワイヤーブレードを掻い潜り攻撃を仕掛け、デュノアさんがその援護。

その二人の猛攻を受けてもボーデヴィツヒさんは眼帯を取ることなくその攻撃をいなし、更に苛烈な攻撃を仕掛けている。ここまでして眼帯を取らないという事はやっぱり何か理由が…

そう考えたときにアリーナが文字通り揺れた。観客の歓声が一瞬だけ全ての音を消し去る。

「『零落白夜』…」

一夏さん、一気に勝負をかけるつもりですね。さて、ボーデヴィツヒさんのA I Cをどうするのか…

ボーデヴィツヒさんが右腕を伸ばしてA I Cを発動させた…と、一夏さんがA I Cによってではなく、自身で急制動をかけて止まる。思っただけで急加速でその場から転進することでA I Cを避けた！

「上手い！」

それを鬱陶しく思ったのかA I Cに加えてワイヤーブレードが加わった。流石に避けきれず、当たりそうになったワイヤーブレードが飛来した弾丸によって弾き飛ばされる。

デュノアさんが牽制と一夏さんの防御を同時に行いながらアリーナを飛翔している。

一瞬デュノアさんに気を取られたボーデヴィツヒさんを見て一夏さんが一気に間合いを詰めた。

そしてその剣先は足元から正面、正眼の構えに。なるほど、腕の軌道を読まれないための突きですか。

それでもそれは…

再度A I Cによって一夏さんが動きを止められた。そう、腕にこだわらず本体を止めてしまえば同じこと。

ま、そこまで考えての突撃でしょうけどね。

A I Cの発動で止まったボーデヴィツヒさんに向けていつの間に接近していたのか、デュノアさんが零距离でのショットガンの6連射を叩き込んだ。

流石の第三世代型でもあの距離で無事でいられるはずがない。左肩のレールカノンが耐えられずに赤い炎と共に爆散する。

その隙を逃さずA I Cから解放された一夏さんが迫る。決まっ…

あれ？

『零落白夜』のエネルギー刃が小さく……ってまさかエネルギー切れ！？

あれだけペース配分の練習していて何で本番でミスするんですかもう！

そしてその隙をボーデヴィツヒさんが逃すはずない。動きの止まった一夏さんの懐に向けて漆黒の影が飛び込んでいく。

そして漆黒の影からの煌き、プラズマ刃が一夏さんの『白式』に襲い掛かる。

『零落白夜』が切れたということはシールドエネルギーは限界ギリギリ。つまりどんな攻撃でも受けたらその時点で負けが決まる。

一夏さんはただの近接ブレードに戻った『雪片式型』でその手刀をはじき続ける。

デュノアさんが援護に入ろうとしたところにもワイヤーブレードで牽制されて近づくことができない。

そしてそのデュノアさんに一瞬気を取られたのか、一夏さんの動きがほんの僅かに鈍った。

戦いの最中の集中の乱れは自身の破滅を意味する。その一瞬でボーデヴィツヒさんの左腕は確実に一夏さんを捉えていた。

そのプラズマ刃が当たった瞬間、一夏さんが『白式』と共に地面

に落下していく。

あれ？シールドエネルギーってまだ…

「いち…か…」

隣の筭さんが信じられないという声を上げるのを聞いた。アリーナの客席にも一気に沈黙が訪れる。

皆さん忘れてるようですね。今回のトーナメントは2対2です。アリーナにはまだその名の通り『疾風^{ラファール}』が残ってるんですよ？

デュノアさんが一気にボーデヴィツヒさんとの距離を詰め……あの速度は！？

「まさか『瞬時加速』！？そんな…先週まで使えなかったのに」

この戦いで覚えたとしても言うんですか！？
器用過ぎですよ…

デュノアさんの動きに流石にボーデヴィツヒさんも取り乱したように見えたが、すかさず右手を出してAICを発動させようというのは流石です。

ですが…忘れてはいけないんですって。今回は2対2なんですよ、ボーデヴィツヒさん。

ドン！

銃声と共にボーデヴィツヒさんの体が揺らぐ。銃声の元には…地面へと落下したはずの一夏さん。

いえ、地面には落下したんですけどね。シールドエネルギーが切れて無かっただけ。と言っても本当にギリギリでしょう。

そしてあの時デュノアさんの弾切れと思っていたアサルトライフルは残弾あり。そしてこの展開まで見込んでのクローズではなく投げ捨てるという先見の明。同型スペックなら間違いなくデュノアさんは1年生最強を誇れるでしょう。

そしてデュノアさんは懷に。第3世代に通じる第2世代の最強であり最凶兵器と言ったらあれしかないですね。

六九口径パイルバンカー、『灰色の鱗殻』グレー・スケール…通称『盾殺し（シールド・ピアース）』。

予想通り、デュノアさんの左腕の盾の内部がはじけ飛ぶ。パイルバンカートリボルバーが姿を現し、その先端を『シュヴァルツァ・レーゲン』の腹部へと叩き込んだ！

その単純さから相手にばれやすく決まることは少ない。しかし威力は第二世代型では他の追随を許さないそれは『シュヴァルツァ・レーゲン』でさえも、零距离からの一撃でアリーナの壁まで一気に吹き飛ばす。

さらにデュノアさんはボーデヴィツヒさんが立て直す前に『瞬時加速』で肉薄し、もう一度、さらにもう一度と叩き込む。

リボルバー機構が可能とする連続発射。決まれば相手のシールドエネルギーをほぼ削りきれるが、近づかなければ命中することはほぼないというハイリスクハイリターンな武装。

いくらISが防いでくれるとは言っても衝撃全てを防いでくれる訳ではありません。衝撃を殺し切れずにボーデヴィツヒさんの体が傾いた。

更にそれでは留まらずISにも紫電が走り、強制解除の兆しが見え始める。

「勝ッ…！」

私たちがそう思った。その場にいる誰もがデュノアさんの勝利を疑わなかった。

「あああああああつ…！！！」

その思いがアリーナに響き渡る叫び声で掻き消された。その声の主はボーデヴィツヒさんから発せられたもの。

『シュヴァルツェア・レーゲン』から激しい電撃が放たれ近距離にいたデュノアさんが弾き飛ばされる。

「い、一体何…が…」

「あ、あれは…まさか…」

篤さんが上げかけた声を引っ込める。そして私はその光景から目をそらすことは出来ない。

一度：一度だけ資料の映像で見たことがある……あれは………でもあれは……！

「『VT…システム』！」

それでも現実是不変ならない。『シュヴァルツェア・レーゲン』はどんどんその姿を変えていきます。

最早変えていくなんて生易しい表現ではなく、変異。アメーバのような微生物が姿を変えるように、子供が粘土で作った作品を崩し、作り直すかのようにボーデヴィツヒさんを中心に取り込み、黒い球体へと姿を変えていく。

『シュヴァルツェア・レーゲン』は既にその原型を留めておらず、球体が脈動しながら地面へと降りていき……そしてそれが地面についた瞬間に、ものすごいスピードで何かの形を作り始めた。

作られたのは黒いISに似た何か。

何かは分からない。

人間的な体とISらしきもの、頭部にはフルフェイス型のバイザーが赤い光を放っている。しかし他は黒一色である。簡単に言えばものすごい簡単なプラモデルの素組み。それが一番分かりやすい。そしてその右手には刀に近い近接ブレードを持っている。

「カルラ、あれを知ってるのか？」

箒さんの言葉が聞こえる。聞こえるだけ…声が出ない……

「カルラ？おい、どうした！顔が真っ青だぞ！？」

そうですか…今私は真っ青です…か…

意識が遠のく…

次に視界が歪む…

意識が闇に落ちる…

「カルラ！おいカルラ！」

箒さんの声が遠ざかり……消えた……

4 - 5 (後書き)

はい、というわけだね。どういうわけだってばよ…

今回の話は2巻分の中で一番苦労したかもしれません。何せ観客の視点なのでほとんど台詞が入られない上に戦闘描写が難しい！！色々間違ってるかもしれませんがねこれ…

さて、カルラはどうなってしまうのか！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。評価、感想をもらえたら作者が「狙いは完璧よ」って言って誤射します。

4 - 6 (前書き)

連続投稿 6 回目！

私は今どこかの建物内の無機質な灰色の廊下、十字路の中心に立っている。

これは…夢…かな…

人はたまに自分が夢にいると分かることがある。今の私はそんな状態。これは……

辺りを見回す。一目で分かった。ここは…

（ジャクソン社の本社…）

オーストラリアのIS国営企業。IS学園に来る前には嫌になるほどの廊下を行き来した。この廊下は忘れたくても忘れられない。そして目の前の廊下から誰かが曲がってきた。それは…

（え…）

私…だ…。両手には大きな本を山積みにしてフラフラと危なっかしく歩いている。

そしてそのまま私を…すり抜けた。当然だ。これは夢なんだから私がこれに干渉できるわけが無い。

そのまま私の後ろにあった扉に入っていく。
そしてその扉に書かれている文字を見て気づいた。『これ』は自分の過去を見ていると。

（『資料室』……………！）

この夢…うつん、記憶は半年前……『あれ』を見た時の記憶！

急いで後を追うように資料室に向かう。思ったとおり私の体は壁をすり抜けて資料室に入り込んだ。

正面には資料を持って奥へと進む以前の私の姿がある。

（ダメ…）

それ以上進んだら『あれ』を見つけてしまう！
この時の記憶は今までぼんやりとしか思い出せなかったのに今は昨日の…ついさっきのことのように思い出せる！

（いけない！やめて！これ以上行っちゃダメ！）

必死の叫びも虚しく過去の私は記憶にあるとおりに資料を元の位置に戻していく。

最後の一冊を戻したとき…一つの映像デバイスが棚の上から過去

の私の足元に落ちた。

『それは管理者が戻し忘れたのか、それとも誰かが故意に置いたのか、そんなことはどうでもいい。』『それ』のロックが落ちた拍子に外れてしまうのは誰が予測できたのか…

空中にそのデバイスから映像が再生され始めて…それに私は気づいてしまう。

(ダメ…それは…見たら……)

「『VTシステムに関する資料』？VTシステムって確か…」

好奇心から過去の私はその場に座って映像デバイスを見始める。そこに映し出されたのはとあるIS用アーリーナ。その中には1機のISとそれを取り囲むように武装を構える4機のIS。

突如、中央のISが変化を始める。黒い液体のようなものに飲まれたそのISは体自体を作り変えて黒いISのように変化する。

その形作りが終わってから4機のISが一斉に攻撃を開始する。

銃弾の嵐をいとも簡単に避けた黒いISが手に持った刀型の近接ブレードを振るう。一閃……それだけで二機のISが吹き飛ばされる。

残りの二機の銃弾も全て避けきり、またも一閃。先ほどと同じように一機のISが弾き飛ばされた。

20分はその映像が続いただろうか。最後に立っていたのはほぼ無傷な黒のIS一機だけだった。

それは戦闘と呼べないただの蹂躞劇だった。

「すごい……」

過去の私がそう呟く。そう、すごかった。ここまではそれだけで済んだ！

黒いISが再度球体に戻る。そして姿が元のISに戻ろうと再度形を作り始める。

（胸が………苦……しい……）

その黒い球体が完全に元通りのISになった時………画面が赤に染まった。

『あああああああああああああああああああああああああああああ
ああ！』

資料室を貫くほどの悲鳴とまるでスプリンクラーと見間違っほど飛び散る赤い液体。

瞬間…私の意識が遠のくのを感じた。記憶の中の私も気を失う。

再び私の意識は闇に閉ざされた。

「ああああああ……!!!!」

何で……あの頃の記憶……今更……

「はあ……はあ……はあ……」

呼吸が荒い……苦しい……
何度か深呼吸して……よし、落ち着いた。でも何で今更あの時の記憶なんて……

「ここは……」

辺りを見回して夢から覚めていることを確認する。見覚えのあるIS学園の保健室だ。

あの後には確か気絶しているところを探しに来た父さんに見つけられてこっぴどく怒られたんだよね。

何でも機密レベルSSの物だったらしくて、本当は閲覧禁止の棚にあるものらしい。

その後そこに置いた他の開発室の人を父さんは思いっきり殴って、その後は殺さんばかりの勢いだっただから止めるのにすごい苦労したんだっけ。

『VTシステム』、正式名称『ヴァルキリートレースシステム』
は過去のモンド・グロッソの部門^{ヴァルキリー}受賞者の動きをトレースするシステムのこと。

それだけ言えば聞こえはいいけど、発動時に使用者の生命力を著しく損耗し、場合によっては操縦者の衰弱死に至らしめる危険もあると判断された禁断の技術。そのためアラスカ条約でどの国家・組織・企業においても研究、開発、使用全てが禁止されている。

そして、私が見たあの映像は中止となった一番の理由。操縦者の運動能力を無視した超反応と規格外の力の行使により全身の毛細血管の破裂、筋肉の断裂、神経切断を引き起こし、あの人は一命は取り留めたが二度と動けない体になってしまったらしい。

窓からは夕暮れの太陽が地面へと姿を隠そうとしています……………
って夕方！？

「一夏さんたちの試合は！？」

「病室で騒ぐな馬鹿者」

バシーン！

「いたっ！」

「全く倒れたからと聞いて様子を見に来てみれば…随分元気そうだな」

「お、織斑先生」

聞き覚えのある声に振り向くと予想通り、そこには出席簿を持った織斑先生が立っていました。

「す、すいません。ご迷惑を…」

「その言葉は篠ノ之に言ってやれ。客席で倒れたお前を運んだのはあいつだ」

「そうですか…」

後でお礼言わないといけませんね。

「あ、先生。試合…いえ、ボーデヴィツヒさんは…」

「その様子だと『VTシステム』の詳細については知っているようだな」

「あ…はい」

「それが機密レベルSSと知っていてか？」

「あう…」

機密レベルSS。それはつまり最重要機密事項を意味します。国家代表者ならともかく代表候補生レベルではまだ見ることの出来ない内容。それを知っていると答えてしまいました…

織斑先生がやれやれ、と首を振ってベッドの空いている部分に腰掛けました。話してくれるみたいです。

「今回の件は機密事項だ。が、まあクラスメイトの安否ぐらいはよからう。ボーデヴィツヒは全身に筋肉疲労と打撲があるが命に別状は無い。しばらくは動けんだろぅがすぐによくなる」

「そうですか…良かった…」

「お前はよく分らんな。この間まであいつとは険悪な仲だと思っていたが？」

「そうかもしれないけど…でも同じクラスの人を心配するのは普通じゃありませんか？」

「普通か…そうかもしれんな」

そう言つと織斑先生は立ち上がって……

『ぬがああああああ!』

『だ、だから待ってくださいってば!』

な、なんですか!? 急に廊下から大声が!

『うおおおおお! カルラー! 離せ! 離さんかあ!』

『いくら親御さんでもIS学園にいる内は会わせるわけにはいきません!』

この声ってもしかして……っていかもしかなくても……

織斑先生がヤレヤレと言いながら右手を頭に置きました。

「忘れていたな。お前の父親と名乗るものが面会を求めている」

やっぱりこの声は父さんですか……もう……

来てたんですね。恐らく今回のトーナメントを見に来ていたのでしょう。

「だが知っての通りIS学園は国際規約で学園外の者は学園の関係者に対して一切の干渉が許されていない。残念だが……」

『きゃーーーーーー!!』

『カルラーーーーー!!』

ドーーーーン!

またドアが吹き飛ばされましたよ……しかもここ保健室ですよ。こんな短期間に二回も吹き飛ばされるなんて……

姿を現したの2m近い身長 of 巨漢と、目を回しながらもその巨漢の腰にしがみついて止めようとしている山田先生。

巨漢の方は鮮やかな赤い短髪に無精髭。筋骨隆々という言葉がピッタシの体にスーツという格好です。

「カルラーーー! おお、そこにいたかあ!」

「父さん!?!」

そう言ってこちらに歩いてくる巨漢の男人は何を隠そう私の父、ゼヴィア・カスト。

「はにゃああ……すいません織斑先生……止められませんでした」

山田先生が織斑先生に謝りました。いえ、山田先生のせいではな

いと……

「申し訳ありませんがお引取り願えませんか」

織斑先生が私を守るように父さんとの間に入りました。

「む、そういう貴方はどちら様かな？」

「織斑千冬と申します。若輩ながら娘さんの担任を勤めさせていた
だいております」

「おお！貴方が件のブリュンヒルデですか！これはこれは、娘がお
世話になって！」

そう言って父さんが織斑先生の右手を取って固く握手しました。

「挨拶は結構です。IS学園に関する国際規約はご存知ですね？学
園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろ
うと学園の関係者に対して一切の干渉が許されていません」

「うむ！重々承知している！」

承知してるんですか！

「だが大切な娘が倒れたと聞いてじつとしてられる親がいますか？」

「そこに関しては否定はしませんが条約上親御さんも例外ではありません。ご息女の無事も確認できたのならお引取り願います」

「しかしですなあ……」

「父さん」

「む……」

ウチの父さんは親バカという言葉がぴったりの性格です。私が言わない限り引いてくれないでしょう。

「私は大丈夫。お父さんの気持ちは凄く嬉しいけどこれ以上私のことで国の人や父さんに迷惑をかけたくないから……ね？」

「ぐ……むう……まあカルラがそう言うのだったら大丈夫か。いやお二人ともご迷惑をおかけしましたな。娘も無事のようにすし私はこれで退散しましょう」

「で、出口まで送ります……」

山田先生、まだ目を回していたんですね。そのままフラフラと廊下へと出て行きます。

それを危なっかしく思ったのか織斑先生がその後に続きました。

「申し訳ありませんが学園出口までは監視として私も付きます。よろしいですね？」

「ああ、願います。カルラ、体に気をつけるよ。たまには連絡寄越すようにな」

「う、うん。あ！母さんにも私は大丈夫だって言っておいてね」

「おう！ではまたな！」

そう言うつと父さんは山田先生の後に続いて父さん、織斑先生が保健室から出て行きます。
久しぶりに会ったけど父さん変わらず元気そうだったな。あの調子なら母さんも元気だ。

「そうだ。カスト」

「は、ひゃい！」

いきなり織斑先生が戻ってきました！一体なんでしょう？

「一回戦で負けたお前たちには関係ないがこの騒ぎでトーナメントは全て中止だ。良かったな（・・・・）」

「へ？」

良かったってどういうことなのでしょう？

それを聞く前に織斑先生は出て行ってしまつて聞けなかった。

あ、筭さんが良かったって意味なのかな？ていうことは織斑先生もあの噂を聞いてたってコト？

それで私に良かったって言う理由……………

あのゝ、もしかしてもしかします？

4 - 6 (後書き)

というわけで6回目、明日の分で2巻分は最後の予定です！

今回はVTシステムがどうして禁止になったかをカルラのトラウマ的な感じで書いて見ました。原作でなかったのもオリジナルですね。

そしてまさかのカルラ父登場！あつれ……もつと後で登場予定だったのになんでこうなったし……父親の設定もリース達と同じ所に書きます。

そしてまさかの千冬までも勘違い……！？どうしてこうなったし！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者が「また戦争がしたいのか！あんたたちは！」って言いながら主人公の座を取られます。

4 - 7 (前書き)

連続投稿7回目！

あの後、箒さんを誤魔化すにはすごい苦労しました。何せ気を失う寸前に『VTシステム』と言ってしまっていたんだから始末が悪いです。

何とか誤魔化しながら夕食へ行ったときには校内放送で学年別トナメントの中止を学校側が正式に発表。噂のせいでその場にいた一年生のほとんどが泣いて脱兎するかその場にへたり込むかしていました。

そして当の一夏さん本人はというと…

『箒、付き合ってもいいぞ』

『な！ほ、本当か！？』

『ああ、幼馴染の買い物くらいいくらでも付き合って（……………）やるよ』

はい、という落ちなわけ。もうわざとやってるんじゃないかって言うくらいベタな落ちでした。どこをどう取ればそうなるんでしょう。

その後はまあこれも予想通り激昂した箒さんは一夏さんをボコボコにした後部屋で不貞寝。

でもそのお陰で『VTシステム』については誤魔化さなくてもよくなったと言うか。

一夏さん、ありがとうございます。

でもデータ収集のため一回戦は全て行うということでトーナメントは実施。

という訳で今は一回戦から3日後の朝のSHRの直前です。

あれ？

「一夏さん、デュノアさんは来てないんですか？」

「一夏さんがいるのにデュノアさんがいないのに気づきました。一夏さんが遅刻するのは分かるんですけどデュノアさんが遅刻なんてありえないと思うんですが…」

「んー、俺もよく分からん。何か先に行っててくれって言われたかな」

「そうですか。でもそろそろ先生来ちゃいますよ？」

「だよなあ…」

体調不良か何かでしょうか？

「み、みなさん、おはようございます……」

教室の入り口から山田先生が来てしまいました。デュノアさん間に合いませんでしたね。

あれ？山田先生どうしたんでしょうか？すごい落ち込んでるように見えますけど…

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、既に紹介は済んでるといいますか……ええと……」

全然要領を得ませんね。転校生なのに紹介は済んでるってどういうことでしょうか？一度会ったことがある人ってことですか。でも転校生ってコトは今月だけで3人目ということに…

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

聞き覚えのある声とその持ち主が現れました。よく見知った顔にお馴染みの髪の毛の纏め方。違うのは服装が男物から女物に変わってるというだけで……

へ？

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。と言うことです。はああ………また部屋割りの組み直し作業が始まります………」

「いやいやいやいや、山田先生。そこじゃないですから。大変なのは分かりますけどため息つくのそこじゃないですから！」

「え？………え！？デュノア君って………女の子だったのぉっ！！？」

「そうですよ！そこなんです！」

「おかしいと思った！！美少年じゃなくて美少女だったわけね！？通りで肌がきめ細やかだと思ったわ！」

「だからそこじゃなくてですね！」

「いや、まあ確かにデュノアさんは肌を見ただけでも綺麗って分かりますけど。」

「って、織斑君！同室だから知らないってことはないわよね!？」

「ちょっと待った！確か昨日って大浴場男子が使ってたはず……」

そうして集まる視線の先には一夏さんがいるわけです。
後ろからでも冷や汗かいてるのが分かります。

でもまあ今回は私も全く擁護できないわけで……
というより本当に一緒にお風呂入ったんですかね？

「一夏あつ……!」

ドゴオン！

一体どこから聞きつけたのか！

そこには気迫で髪の毛を逆立たせんばかりの鈴さんが立っていました。

そして一人でドアを吹き飛ばしましたよ。当然IS無しで。

一カ月の内で3回も扉が吹き飛ぶのを見てしまいました。これもうドラマ取れるレベルですね。

いつもの鈴さんの気配はなく、今のそれはまさしく獲物を狙うトラのようです。

そしてその顔は怒れる龍の如く。竜虎相打つとかそういうレベルじゃないです！

あれ？竜虎相打つって意味全然違いましたっけ？

そしてそれを見た一夏さんは席を立って…

「げえ！かっ」

「関羽は言わないでくださいね」

同じネタは止めてくださいね。

「カルラ！せめて今から殺される奴の最後の台詞くらい言わせ」

「死ね！」

「せめて言い訳させてくれ！」

一夏さんが叫んでいる間に鈴さんが『甲龍』を展開して両肩の衝撃砲をフルパワーで…ってちよっとちよっとちよっと！

「鈴さんちょっと待った！」

「大丈夫よ！一夏以外当てないから！」

「そういう問題じゃないです！」

私の席真後ろなんですってば！余波とかそんなのの関係とかあるんですってば！

ズドオオオオオオオオオン！！！！

「あ…危なかった…」

間一髪『アイギウス』の展開が間に合いました。危つく潰れたトマトになるところでしたよ。

衝撃砲の余波で黒板の中心部は粉々。山田先生も粉々…

「きゅっ…」

いえいえ！山田先生は吹き飛ばされて目を回してるだけで粉々ではないです！

で…クラスの人たちはいつの間に私の後ろに隠れてるんでしょう

……

「いやー、助かったよカルラ」

「うんうん、持つべきものは専用機持ちの友達だね！」

危機察知能力が半端じゃないですねこのクラス。まあ怪我がないなら良かったです。

あー！そういえば一夏さんは！？

「た、助かったぜラウラ、サンキュな。……っっていうかお前のISもう直ったのか？すげえな」

え？ボーデヴィツヒさん？

『アイギウス』を下けるとそこには黒いIS『シュバルツァ・レীগン』を纏ったボーデヴィツヒさんが立っていました。どうやら衝撃砲はAICで直撃弾だけ無効にしたみたいです。

というかもう動けるんですね。ほっとしたというか驚きというか…

「……コアは無事だったからな。予備パーツで組み直した」

あ、なるほど。そういえば肩のレールカノンがありませんしワイヤーブレードの射出口も……

「へー。そうなん　むぐ!？」

『きゃーーーーーー!』

いきなり……何の脈絡もなく一夏さんに近づくと……き、きききききノノノキスしましたノノノ

それを見ていた教室中のクラスメイトから飛び交う黄色い声。

どうして?何で?昨日私の気絶した後何があったって言うんですか!?

ただ助けただけなんじゃないんですか!?

「ズキュウウン!」

「や、やった!」

「さすが代表候補生!私たちにできない事を平然とやってのけるッ!」

「そこに痺れる憧れるう!っていうか変われ!」

あの、皆さん?代表候補生だからってキスできるわけじゃないんですけど……

そして口で擬音言いましたね今。誰かは分かりませんが……

ていうか口つけてる時間長くないですか！？たっぷり一分は経っていますよ！？

そしてボーデヴィツヒさんがようやく口を離すと顔を真っ赤にして宣言しました。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「……婿じゃなくて？」

一夏さん、突っ込むところそこでもいいんですか……いえまあ十分突っ込みどころなんですけどもつとあるでしょう。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』と言つのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を嫁にする」

ボーデヴィツヒさんの言葉に思い出す。そう言えばオーストラリアにいた時も日本のアニメ好きの人がそんなこと言ってたような…

「あ、あつ、あ……………！」

そして忘れられている鈴さんは顔を真っ赤にして口をぱくぱくと動かし、声にならない声を上げています。

顔真っ赤ですし一夏さん辺りなら金魚とか言いそうですね。言った瞬間命がないでしょうから私は言いませんよ？

「アンタねえええッ！！」

今度は『双天牙月』を取り出す鈴さん。

これは戦場の予感！

「皆さんはやく退避を…！」

「もうしてるよ！」

早っ！

いつの間にか皆さん廊下まで退避していました。

「待て！俺は悪くない！むしろ被害者であって…！」

「何言ってるのよ！全部アンタが悪いに…！決まってるでしょうがああああああ！」

ジャキン！

もう鈴さん理屈も何も無いですね。頭に血が上って一夏さんを殺

すことしか頭にはないようです。

鈴さんが『双天牙月』を連結させると同時にそれを投擲。そしてそれはボーデヴィツヒさんのA I Cによって再び止められる。

「邪魔よ！」

「人の嫁に無粋な真似してもらっては困るな」

「何が嫁よ！」

そしてそのまま二人が両手を組み合って押し合いに…… I Sでここまで原始的な戦いは中々……

あ、その隙を突いて一夏さんが廊下へと脱出を試みようとしていますね。

ビシュン！

「ひゃあ！」

わ、私の頭の上レーザーが掠りましたよ！？レーザーって言うたらセシリアさんしかいないですよ！危ないじゃないですか！

振り返ると予想通り『ブルー・ティアーズ』を展開し、額に青筋を浮かべたセシリアさんが…

あー、こっちも何言ってもダメですね。

「あら、一夏さん？どこかにおでかけですか？実は私どうしてもお話しなくてはならないことがありますて…」

「そ、それは今じゃないとダメなのか…？」

「急ぎの御用ですの？でしたら上半身を置いていつてくださればそれで。あ、首から上だけでもよろしいですわよ？」

『ブルー・ティアーズ』の周りにはBT兵器4つがフヨフヨと浮いていて、右手にはいつものライフルではなく『インターセプター』が握られています。そして『インターセプター』を顔の前に持つてきてニコリと笑う姿はかの英国の殺人鬼『切り裂きジャック』を彷彿とさせます。

見たこと無いですけどね！

それを見た一夏さんは即座に窓へ。ここは二階ですから生身でも何とかなるとの判断でしょう。

でも忘れてますよね。

窓際の席には修羅が……失礼、恋する乙女がいますよ？

予想通り、篝さんが一夏さんの前に立ちふさがりました。そして腰には『緋宵』。

何で教室に持ってきてるんでしょう。朝一緒に来るとき持つてましたっけ？

「一夏…」

「ほ、篤…さん？」

篤さんの台詞にはほとんど感情が籠っていません。一夏さんの冷や汗尋常じゃないくらい出てますね。

「どういふことが説明してもらおうか…」

「待て待て！説明を求めたいのは俺のほうで…！」

「そうか…心当たりはないと…」

「そうだ！」

「ならばその身に聞くまでだ！篠ノ之流拔刀術…」

そう言った篤さんは『緋宵』の柄に手をかけ姿勢を低くする。あれはまさしく拔刀術の構え。

『緋宵』の拔刀術ですか。情報で見たとおりならまさしく『その一太刀を持つて必殺とする最速の瞬き』なんでしょうね。斬るの見てみたいなあ。

人以外で…

そして辛うじて篝さんの間合いから何とか逃げ出した一夏さんに待っていたのは…

デュノアさん…もといデュノアさん…って私の言い方だと変わりませんね。シャルロットさんとぶつかりました。

その顔にはいつもよりも数段いい笑顔が浮かんでいます。普段笑顔の人って怒ると怖いってよく言いますがこれ怖いってレベルじゃないんですけど……！

「一夏って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。すごいなあ、憧れちゃうなあ」

「それほどでもない！」

「……一夏さん……それは殺してくれと言っているようなものですよ……」

「あのー……シャルロットさん？俺はされたんであつてしたわけではないし、憧れる要素は一つもないし……なぜにISを起動してるんでしょうか？」

さて、逃げるなら今ですね。
さようなら一夏さん。あなたのことは忘れません。多分半年から
一年位。

とりあえず山田先生を回収しないと…
『グレイプニエル』で山田先生を回収……

「はわー、カルカル待つてー！」

何故かまだ教室にいたのほほんさんも一緒に回収ー！

私はシャルロットさんがパイルバンカーを取り出すのと同時に教
室を出ました。

教室を出た瞬間…

ドカアアアアンっ！！！！

校舎が文字通り揺れました。

ああ、これはなんというか……もう泣きたい……

ポン

思わず廊下で膝を着いた時、誰かの手が肩に触れました。

見上げるとそこにはのほほんさんがいつもののんびりした笑顔を浮かべていました。

その平穩そのものの顔が今私には神にも匹敵します。

ああ、布仏神さま！

「泣いていいんだよね？」

泣きました。

4 - 7 (後書き)

正月はい wasn't でしたが連投15回が無事終了しました。

これにて原作2巻分は終了ということで連続投稿も終了です。

ヒロインやつと出揃いましたね。ようやく物語りも始まりといった感じですよ。

なんですけど更新はここで一時ストップです。宣言通り原作3巻分が出来上がり次第、ということになりますので次回の投稿は2ヵ月から3ヶ月後、多分ですけど3月終わりか4月の初め辺りになると思います。

こんな作者にお付き合ひ頂きありがとうございました。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしく願います。

評価、感想をもらえたら作者が「俺が、俺たちが…」の後の言葉を期待します！（期待するだけ！）

本編は停止ですがオリジナル設定は今日中に上げるので少々お待ちください。

ではでは！

オリ設定（前書き）

本編じゃないです！

第二巻分までに出たオリ人物、オリ設定を紹介する場です

オリ設定

オリジナル登場人物

名前、性別、身長、容姿、モデル、詳細の順で行っていきます。女性のみ3サイズ公開です。

名前、ゼヴィア・カスト

性別、男

身長、198,6cm

容姿、赤い短髪に無精髭、瞳はグレー。筋骨隆々。

モデル、『Fate zero』より『ライダー（イスカンダル）』

詳細、

カルラの父親。

オーストラリア国营企業ジャクソン社IS開発局に所属。

見た目と変わらず豪快な性格で細かいことは気にしない。なのだが超の付くほどの親馬鹿でありカルラのことになると周りが見えなくなる。IS学園に入るのも当初は反対だったのだが妻と周囲の人の説得でようやく納得したほどの筋金入り。

現在もカルラのことを心配しており、普段は母親が抑えているため何とかなっている状態。

仕事は本職のIS開発から外交向けの学年別トーナメントの視察といった臨時エージェントなど幅広く勤める。

普段は包容力が高く、周囲からはその容姿とも相まって『社内の

お父さん』などと呼ばれて親しまれている。

名前、リース・マッケンジー

性別、女

身長、181 / 3 cm

容姿、ショートカットの薄い青髪、碧眼 スリーサイズ、B 89 /
W 57 / H 84

モデル、『アイドルマスター』より『三浦あずさ』

詳細、

オーストラリア出身のIS学園整備科3年生。

見た目は美人なのだが性格、口調共に男っぽくおしゃれには一切
興味が無い。

学内に複数ある整備チームの内一つを率いるチームリーダーでも
あり、一人でチームの仕事を請ける権限を有しているが、自由奔放
なところがありいつも無茶な仕事を引き受けては神月 綾香に嗜めら
れている。

職人気質で受けた仕事はしっかり仕上げるのがポリシーであり、
それを実行するだけのメカニクの腕を持つ。

ISというより機械全般に興味があり、それ以外はものぐさな性
格。神月による愛称はリジー。

名前、神月 綾香 （かみづき あやか）

性別、女

身長、161 / 7 cm

容姿、肩の辺りまでの黒髪、茶色の瞳 スリーサイズ B 83 / W 57 / H 82

モデル、『ストライクウィッチーズ』より『竹井醇子』

詳細、

IS 学園整備科3年生の日本人。

リースの率いるIS 整備チームの副リーダー兼毎回無茶をしかけるリースのブレーキ役。

武装、装甲、設計など計算を必要とする仕事を主に担当し、計算能力は整備科でもトップクラスに位置している。

普段は冷静な観点から物事を見ることが出来ているが、リースが関わっている時は性格が崩されるため普段とのギャップが大きい。

リースと後輩の架け橋の役割も担っている、

のほほんさんほど奇抜ではないが親しい人にはあだ名をつけるのが趣味で、他人に分かりずらいあだ名をつける。

名前、松本 弥生 （まつもと やよい）

性別、女

身長、容姿、モデルは未登場なので内緒。

詳細、

名前のみ登場したりリースたちの後輩で整備科2年生。神月による愛称はマヤ。

名前、フィアナ・リアス

性別、女

身長、容姿、モデルは未登場なので内緒。

詳細、

松本同様名前のみ登場の整備科2年生。神月による愛称はフィリ。

多分オリジナル人物はこれで全部です。抜けてる人がいたら言うてください。上げます！

弥生とフィアナは登場するまで内緒にしますよー。

そこ！考えてないとか言わない！ちゃんと設定集に書いてるよ！次はISについての『打鉄』のオリ設定！

『打鉄』オリジナル武装設定

・近接ブレード

『打鉄』のメインウェポン。刀身17m程の刀型の近接武装で

最もバランスがよく、日本内部の『打鉄』のほとんどに採用されている。突出した性能は無いが安定した武装。

・ 8 式射撃弓『重籐』（しげどう）

『打鉄』のサブウェポン。弓形の射撃兵装で、射程と連射性は突撃銃などには劣るが、威力と命中率では勝る。

展開時は左腕内側に弓が固定され、右手で弦を引くことがトリガーの役割となつているため、片手で撃つのは不可能だが、弦の部分が引ければいため近接ブレードを持ったままでも使える。弾丸は矢型の榴弾を展開してそれを撃ち込む。

・ 64 式連装大弓『月穿』（げっせん）

『打鉄』専用にして日本第二世代型唯一のエネルギー兵器。威力、命中率は立派に第三世代としても通用するのだが、3mを超えるその大きさゆえの取り回しの悪さと、第二世代型ではエネルギー兵器自体が安定して使えず、さらに撃つまでのラグが大きいという欠陥兵器のため基本装備としては採用されていない。

特性上エネルギーで形成した矢を曲射させることができ、使いこなすことさえ出来れば時間差攻撃により相手を追い詰めることが出来る。

・ 大野太刀『雷斬』（らいきり）

『打鉄』の後付装備として開発された野太刀。見た目はほぼ直刀に少しだけ反りが入ったもので、刀身3.5mとIS以上の大きさ

を誇る。

反りの無い方の刃は実体剣、反りのある方はプラズマ刃を形成することで状況によって切断能力を切り替えることができる。また刀身自体も非常に強固で、平の部分で打ち据えるだけでも質量からの衝撃はかなりのもの。

ただしこれは完全にこの『雷斬』を操れる場合の話で、3 / 5 m という大きさに取り回しは非常に悪く、『雷斬』を使いこなせる人は『月穿』共々極僅かしかない。

オリ設定（後書き）

オリジナル設定は以上です。細かいものは諸々あると思いますが多分気になる点はこのくらいかと思います。

こんなのが気になる、この設定はどうなってるの？これ矛盾してない？等などあれば感想かメッセージをもらえればその都度追記していくので遠慮せずお願いします。

間が空きますがこれからも『IS - オーストラリアの代表候補！
インフィニット・ストラトス』をよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849x/>

IS 《インフィニット・ストラトス》 - オーストラリアの代表候補！？

2012年1月10日22時46分発行